

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編

元治元年四月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
(紙数八七枚)の記載あり〕

## 目録

久光公ヨリ伊達宗城公へ御書翰  
全上

長州征討軍隊大操練

御城下各所礮台操練

久光賜暇御沙汰書

市來ヨリ寺師へ通信

蓼田傳兵衛ヨリ大久保一蔵へ書翰

久光公御帰国之布告

久光公其他御叙任

市來正右衛門書翰

久光公二條城へ御登宮

小松帯刀外二名二條城出頭ヲ命ス

英艦ト戦争ノ褒賜

日向国細島御預ケ所ニ被仰付

日向国細島御預リ所達書

大原重徳卿書翰

柴山彌八郎通信

久光公御帰国

久光公御帰国布達

海江田武次ヨリ大久保一蔵へ書翰

江戸知邸新納嘉藤次探訪報告

久光公下向達

江戸知邸新納嘉藤次ヨリ大久保へ私翰

江戸ニ於テ久木山泰蔵探訪報告

四月廿九日將軍へ賜ハル処ノ詔書

久光公天盃頂戴ノ趣幕府へ届書

高割ヲ軍賦云々藩令

或来状ノ中ノ拔書

源忠毗ヨリ小松帶刀へ書翰

薩州功罪案

久光公御退京ニ臨ミ御訓誡

二六九 久光公ヨリ伊達宗城公へ御書翰

清和之候、愈御清安奉恐賀候、然は昨夕は御来臨之処、

例之不齊主振嘸御退屈と奉存候、殊ニ醉談種々申述、

至今朝汗顔之次第ニ御座候、其砌御約束之面贅漸々出

来、拙悪之愚詠何共赤面之至ニ御座候得共、御笑種之

為進呈仕候、先は右申上度如此御座候、頓首、

首夏初三

例文省略御有怨奉願候、以上、

双松拜〔朱〕「久光公」

對翠明公

玉机下

〔伊達家字和局事務所蔵本にて校訂〕

二七〇 久光公ヨリ伊達宗城公へ御書翰

芳墨拜読仕候、如貴命昨夕は御緩話大快愉御同慶奉

存候、併夜半より少々御所勞〔異親王〕ニテ山階宮御從騎御断之

由、御保養專一奉存候、扱小銃・短銃等之義、細々被

仰聞致承知候、猶能々相糺明日も細事可申上候、先は

右御答迄如此御座候、頓首、

四月初三

二伸、御端書之趣モ委細致承知候、已上、

双松〔朱〕「久光公」

對翠賢兄

貴報

〔伊達家字和局事務所蔵本にて校訂〕

二七一 長州征討軍隊大操練

四月五日調練場ニ於テ、長州征討出軍ノ隊兵操練催サ

レ、御名代島津〔忠鑑〕周防殿及ヒ国老喜入〔久高〕攝津其他出軍ノ輩

モ出張、攻城野戦ノ操練ヲナセリ、或ハ糧餉ヲ掌ルモ

ノハ、野宮炊出シ或ハ給与等ノ試験モナシタリ、

二七二 御城下各所礮台操練

四月七日御城下各所礮台操練催サレ、太守公新波戸

礮台ニ御出馬アラレタリ、

二七三 久光賜暇御沙汰書

四月八日

久光公過日来懇請セラレタルカ如ク、御帰国御暇賜  
ル旨、達セラレタリ、

長々滞京 御用相勤苦勞

思召候間、今度賜 御暇候、但島津圖書<sup>久</sup>残置、

非常之節

禁闕警衛有之候様

御沙汰候事、

右從

朝廷重役御呼出シ、国老小松帶刀出頭伝奏野宮中納  
言<sup>功定</sup>殿ヨリ達セラレ、而シテ不日帰国御暇ノ御礼參  
内致スヘク、日取ハ尚ホ達セラルヘキトノ趣ナリ、  
斯ク御帰国ノ御暇屢々懇願セラレタルハ、旧臘上洛  
セラレ

朝幕ノ間ニ就テ、尽力セラレシコト一方ナラス、夫  
カ為メ公武ノ間稍々親睦ノ緒ニ就キ、正邪ノ弁モ立  
チタルカ故、茲ニ至リ優々長ク在京ハ素ヨリ好ミ玉  
ハサルノミナラス、又其間ニ於テ、憂患シ玉フ事情  
寡カラサルカ故、姑ク退テ其機運窺ハレント、隠ニ  
賜暇懇請セラレタルモノナリ<sup>憂患セラル、処ノ、  
事情ハ後ニ記ス</sup>

二七四 市來ヨリ寺師へ通信

暖氣日々弥増候処、愈御清康被為遊御座奉恭悅候、母  
上様御事モ御壮健可被為在ト大慶此事ニ奉存候、次ニ  
才姉サマ・健殿・キセ殿・於ヨイ殿其外英之丞初、皆  
々無異玄機之筈ト存候、私ニモ至極之壮健ニテ、去ル  
十九日迄京師へ滞留下坂イタシ、当月二日ニ浪華安治  
川出帆、三日四時分讚州丸龜港へ着船、直様上陸象頭  
山へ參詣、同夜一泊、四日同所出帆、備後之内<sup>福山市</sup>碓  
泊中一日滞在、六日朝同所出帆、晩方ニハ藝州<sup>〔広島県豊田郡豊田町〕</sup>御手洗  
へ着岸仕候処、此内ヨリ彼役場村上中之介ト申入、先  
々月初ヨリ出迎ニテ、早速ヨリ万端都合克、御用向之  
談判ニモ昨日ヨリ取掛リ、米其外モ追々積入、最早老  
万石程モ相受取候、当地へ今三日モ滞在イタシ、夫ヨ  
リ廣島之様參リ中一日滞留、直ニ長崎之様出張之含ニ  
御座候、

一長崎へ極急ナル御用有之、被差越候旨於京師致承知、  
夫ユへ藝州へハ寛々罷在候儀モ不相叶、彼方ヨリ十五  
日程ハ是非ニ滞在、領分中見分モイタシ吳候様、且又  
海岸モ巡覽被相頼候へトモ、右通長崎之御用差急候ユ

へ、相断申含ニ御座候、

一長崎表之御用向ハ追々モ奉申上候通、大砲八百門・ケ  
へール並蒸氣軍船御取入、右ニ付テ之御代、弘練立ニ付、  
御商法向相開候事共、一々重大多端之御用致承知、尤  
軍艦之儀ハ御聞及通之世態ユへ、別テ御差急談判迅速  
ニ相遂ケ御届モ申上候賦、殊ニ主殿ニハ第一右等之御  
用ニテ、被差出候事ニ付、談判相付候上ハ直ニ帰国成  
行之御届申上候訳ニ御座候間、凡日賦イタシ候ニ五月  
十日前後ニハ、是非共一先罷帰リ候手筈仕度存罷在申  
候、永吉ニモ御国元ニテハ暫時之事ニ可有之候間、成  
丈舟登無之内ニ罷帰リ、時宜次第ニハ御供イタシ、出  
崎可仕哉ト存シ候事ニ御座候、再出崎仕候上ハ、彼地  
ヨリ又々上京イタシ、御届向等申上候事ニ可相成、就テ  
ハ御国元へハ、僅日之在家ニ可有御座歎ト相考へ申候、  
右之事ニノミナラス、鑄物方御用向ニ付、南部御交易  
之一条會津御取結之趣、濃州大垣へ通宝御貸渡産物御  
受取之事件、仙臺ト交易、備後輛へモ新錢御渡シ之条  
々、此等之事共ニ付、イツレ当秋ハ上坂不仕候テハ不  
相濟、旁多用ニ相成、殊ニ重大之事柄ニ御座候間、昼  
夜痛心仕事ニ御座候、

一世態之事共詳ニ申上度山々奉存候へ共、何分筆端ニ難

尽、唯々汗掌縮眉之外ハ無御座候、当夏中ニハ何欵混  
雜ハ必定ニ御座候、併シ長州御出張ハ此涯ハ迫モ有之  
間敷欵、御安慮可被成下候、何分京師ニテ事起ハ必定  
ト相聞へ候、其所ニヲヒテハヨモヤ養生ハ出来兼候半  
ト存シ候、イツレ罷帰リ万々御嘶可申上候、

一永吉ニモ十五日方ニハ多分着可有之候間、早々英之丞  
ニモ御遣シ被下候テ、御手前様ニモ御越被成、京坂之  
事情御聞取被下度、尤別ニ御用封モ此使ヨリ差上候付、  
彼是御聞取可被下候、

右ハ今九日極急之町使御手洗ヨリ差立候付、幸便ニ  
マカセ奉得御意候、私ニモ明後日ハ無相違当所引取、  
十二日中一日廣島へ滞在、夫ヨリ小倉へ、是モ中二  
日程ニテ着舟可仕、夫ヨリ夜白長崎之様出張リ候賦  
ニ御座候ハ、十八九日方ニハ無間違着崎可仕候間、  
左様御承知被下度、追々彼地へ御書状等被仰遣可被  
下候、時分柄御厭御精務專一ニ奉祈上候、母上様へ  
モ右之形行被仰上可被下候、以上、

四月八日

市來正右衛門

寺師次右衛門様

參人々御中

二七五 養田傳兵衛ヨリ大久保一蔵へ書翰

三月廿五日付之貴翰忝拜見仕候、於其御地 少將様益御機嫌能被遊御座、於爰許 太守様御機嫌克被遊御座、重畳恐悅之御儀奉存候、次ニ貴所様ニも愈御堅栄被成御勤仕、欣賞至極奉存候、然は諸郷御手当人数之儀、一先御差返相成候方可然と之 御内沙汰被為在、且三嶋下船之儀も早々相仕舞、為致出帆候様、是又 御沙汰之旨細々被仰越趣承知仕、乍恐御尤至極奉存、細事御問合之趣を以、攝津殿ニも則及御相談、初発御呼寄相成候、諸郷六組之儀一先御差返相成、已後急速御取寄之節は、早々駈付候様、尤今度被召呼候節は遠中近之郷々故、遅速は有之候得共、いづれも心掛宜速ニ馳集、格別抽他候郷も無之候付、一統心掛宜敷、奇特之旨被實置候方可然儀ニて及吟味、御家老衆より御書付を以、第一不失人氣様之書面を以御達相成、尤御城下六組之儀も諸郷被差返候付てハ、可致疑惑儀ニ御座候間、是又右之段今度被召付候御城下物主等、其外一統へも仰渡相成候、將又今度被相置候諸郷六組之儀は近比之

儀ニて、追々馳付候郷も有之、未致參着郷も有之候付、六組共御当地江參着相揃候上一先為致調練、就中大砲隊之儀は、実場第一係要之儀ニ御座候間、不取馴ては先鋒其任ニ不当訳ニも御座候間、調練之上六組之内より相撰申付相成賦ニて、其上前条通御達相成、一先在所之様被差返管ニ御座候、被留置候三島下船之儀は、追々順氣も取後候ては、当夏送砂糖運送も不相調、実ニ不容易訳合之事ニ御座候間、順季不相後内御暇ニて、為致出帆可然と之御吟味有之、都て出帆之筈御座候処、今度 御沙汰之趣被仰越、乍恐御尤之御儀奉存候、則御趣意通被計候間、御納可被下候、扱長州一条も、追々被仰下候通、何分御所置不致一定、殊 一橋公之所云々之儀、何共驚愕之次第、長歎息之至、旁御書面之趣を以得と致勤考候へハ、何分可恐訳ニて、天下之事益累卵之危ニ陥り、此末如何して御治定罷成可申哉、此御方様是迄不一方御尽力、すてに 御成功之場ニ臨ミ、右次第何共残念之至御座候、 少將様被遊 御配慮候御事、実以奉恐入儀ニ御座候、長藩之所浪花迄は御用召之儀相發候上は、兎角末家并大臣之内罷出可申、然時はいづれ之筋道理明白之御糺問も無之候て、不相濟訳

にて、其辺之所は前以疾ニ御治定有之候儀と奉存候処、未御応答御人体も不相分と之儀、中々御示諭之通何を以理解、何を以征伐可相成哉、返々も残懐不少候、万一も彼等暴戻に募奉逆 天意、其俥難被捨置不得止事、征討之御決議相成候上ハ、おのつから其御許より早々御下知も被下候御事と奉存候間、爰許御手当之儀は、弥厳整ニいたし、聊一統心弛無之様申談、尽評議隨御下知候心得ニ御座候、且又藝州より御買入之米三千五百石御差下之筋にて、御趣意之御旨被仰下趣委細承知仕候、右一条は別紙御問合ニ御返答申上候通ニ御座候、平運丸ニも大砲卸方六ヶ敷手間を取候由、乍然不日御方相濟不遠御差廻可相成と奉存候、本田彌右衛門儀も上京、御用向も細々御承達相成候由、不遠帰着可致と相待申候、御書面之趣は則奉達 御内聽置候儀ニ御座候、先は御用向貴答旁如此御座候、猶期後音候、恐惶謹言、

四月九日

義田傳兵衛(辰地)

大久保一藏様(利通)

追啓、大島氏御召返相成御同慶御座候、殊早々御軍賦役江拜命之由、定て元氣精勤之儀と存候、御面接

之折宜御伝詞可被下候、吉井(友妻)中殿江も書状行届不申候間、是同様御願申上候、高崎・税所江も実ニ疎音、いつ方江も宜様御伝声奉希候、以上、

四月九日

傳兵衛

一藏様

(大久保利謙氏所藏本にて校訂)

## 二七六 久光公御帰国之布告

四月十一日

伝奏野宮中納言定功卿ヨリ、御暇ノ御礼參

内アルヘキ旨伝ヘラル、仍テ同十一日參

内セラレシニ、小御所(御下段南)ニ於テヘ甘露寺左少弁(長勝)執奏

龍顔ヲ拜セラレ、進テ御下段ニ於テ

天盃御頂戴、畢テ虎之間ニ於テ甘露寺殿ヨリ左ノ

勅書及ヒ御扇子(三本)并白晒(五端)ヲ賜フ、

一昨年来格別周旋 公武御一和之基ヲ開、其功勞拔

群、且昨秋以来長々滞京參預等苦勞

思召候、依之從四位上左近衛權中將推任叙被

宣下候事、

右ノ報鹿兒島ヘハ同月廿三日到着、同廿四日御一門家

并大身分及ヒ諸士登城、於席々謁御家老 太守公

国父公へ恭慶申上ル、布告略ス、

二七七 久光公其他御叙任

子四月十一日

御加判之列

所司代

四月十二日

正四位上  
參議被任

叙從四位

從四位上左近  
衛權少將叙任

從四位上左近  
衛權中將叙任

任少將

稻葉長門守(正邦、老中、淀藩主)  
守(定敬、桑名藩主)

松平越中守

松平大藏大輔(慶永、前福井藩主)  
(慶順、熊本藩主)

細川越中守

池田茂政備前守(備前藩主カ)  
松平備中守

島津大隅守(久光、茂久)

伊達伊豫守(宗城、前子和島藩主)

二七八 元治元年四月十三日ヲ以市來正右衛門

藝州廣島ヨリ遣シタル書翰ノ写

日々暖氣ニ趣候処、其許母上様ヲ初奉リ皆々様御一同御無異ノ筈ト奉察候、健彦殿ヲヨヒ英之丞ニモ元氣ノ事ト想像罷在候、私ニモ至極ノ壯健ニテ、京坂御用向モ首尾能相濟候ニ付、四月二日大坂川口出帆、同六日藝州御手洗へ着イタシ、中村吉左衛門殿へ取合、則ヨ

リ御交易一件ノ治定ニ取掛、廣嶋ヨリ役人モ数人出張相成待居候ニ付、万事都合ヨロシク、同十二日迄滯島、十三日廣島へ着イタシ、御用達豊島屋儀平宅へ止宿仕候、明十四日御使者ノ式相勤候筈ニ御座候、尤中村氏モ一緒ニ罷在候、万事御手厚キ御接待ニテ恐入位ニ御取扱ニテ、近隣へハ役人衆数人出張、旅宿へモ輕キ役人三四人ツ、絶ス相詰、用弁ノ下知モ被致候筋ニ相見得申候、就テ明日御使者ノ式為相濟直ニ出立、宮嶋へ立寄り、夫ヨリ下ノ關へ船ヲ寄セ、長州ノ形勢ヲ視察イタシ、上京ノ時分強談判ニヲヨヒ候蒸氣船燒立ノ事件モ、猶覆察モ可致ト存候、夫ヨリ小倉へ立寄り、彼藩へモ引合長州ノ形勢ヲ探リ、夫ヨリ福岡へモ立寄り国情相探リ、夫ヨリ長崎へ急行イタシ、軍艦御取入ノ義又ハ西洋式ノ大小砲銃御買入方ノ義、於京都承知イタシ候ニ付、其等ノ御用相濟次第帰國ノ心算ニ御座候間、遅クトモ来月初二ハ帰着ノ心得ニ御座候、中村氏ハ別段御用モ無之候ニ付、廣島ニテ相分レ、兩三日滯在、諸所見物共被致、鶴崎ノ様通行帰國ノ由ニ御座候間、私ヨリハ格別早ク被帰候事ニ付、直左右御聞取可被下候、私ニハ段々小松家等ヨリ承知ノ御密用モ有之

候ニ付、長崎へハ漸ク十余日モ滞在、御用為相濟直ニ  
帰国可仕候間、来月十三四日比ニハ果シテ帰着可致ト  
存候事ニ御座候、母上様ヲ初英之丞杯嘸々御待兼ト想  
像仕候、将亦先刻柿本彦左衛門大坂ヨリ早船ニテ、当  
島へ着イタシ申出ル趣ニ、少将様御事モ去ル十三日  
御帰国ノ御発途ニ相成リ、大坂御屋敷へ例ノ通中二日  
御滞在ニテ、同所川口ヨリ蒸気船ニ御乗入り御下国被  
遊候由、此度モ早々ノ御帰国相成候モ、何分 御意通  
リニ参リ兼候処ヨリ、一往御帰国、天下ノ形勢御覽被  
遊トノ御内慮ニ被為在候由、朝廷・幕府ヨリモ御引  
止ノ御内達モ被為在候得共、程克ク御申取り何事無キ  
姿ヲ以、此度ハ御暇ノ御顔ニ相成候由、就中近衛家又  
ハ宮様ヨリハ頻ニ御止メ相成、今暫時御心房被成御滞  
京、天下ノ形勢御覽被成度、然ル時ハ第一 叡慮ヲ被  
安トノ訳共御沙汰相成タル由候得共、何分長州亦ハ浪  
人共ノ所業、今形ニテハ一ト破レ何レヨリカ破候上ナ  
ラテハ、到底治リハ付間敷トノ御見据ニ相成リ、京都  
ハ御警衛ヲ被残置候テ御曳取り相成ハ、其跡ニハ必ス  
何事カ起リ可申、其機ヲ以本途ノ治リヲ被為付候トノ  
御内慮ニ被為入候由、且亦私当所ニテ段々長防ノ形勢

ヲ探リ候ニモ、藝島重役方ノ見込ニモ、当分ハ先ツ割  
拠ノ形勢ニ相見得候得共、ツマリハ京坂ノ間へ出掛ニ  
相成ルハ相違有之、今度長府候・吉川監物其外萩ノ家老  
御用召ニ相成候得共、未御請モ不致、今ノ勢ニテハ上  
京致ス向ニハ無之ト、廣島役人ノ説ニ御座候、殊ニ水  
戸・因州等ノ士四十余人去ル三四日頃山口へ指入り、上  
京不可然旨ヲ論シ、夫ヨリ一層人氣強ク相成リタルヨ  
シ、右外一体割拠ノ手当ノミ専ニ被伺候得共、國中ノ  
固ヲ能クイタシ、其後ハ必ス京攝ノ間ニ押出シ、何事  
カ大事ヲ可為ニハ違無之ト廣島ノ説、此見居ハ誰モ京  
都ニテ小松・大久保氏杯モ其通りニテ、随分何時暴動  
ニヲヨヒ候共、混雜不致内実ノ御手当ニ相成リ、兵糧  
ノ手当ハ先達テ大久保氏ヨリ内々私へ被申聞、廣島様  
ヨリ玄米一万石早々相談ニヲヨヒ、内八千石余ハ相請  
取京・伏・坂ノ三ヶ所ニ御囲ニ相成リ、誠ニ氣強キ次  
第二御座候、偏ニ廣島交易ノ詮ナリト、小松・大久保・  
伊地知正治殿杯ヨリ被申候、唯差支氣細キハ、御金ニ  
テ候間、早々罷帰ルモ其御手当ノ義共モ承知致候カ、  
一日モ早ク罷帰リ申上候心得ニ御座候、亦今度軍艦御  
取入ノ義ハ、莫大ノ代金ニ候間、御宝藏ノ古金御引替



ニ相成度趣モ致承知候、其場ニテハ何ノ為ニ御困ノ訳ニモ無之候間、古金二三十万モ御出シ相成候得ハ、驍テ倍程ノ相庭ニモ御座候由、然シ此等ノ義ハ其許ニテハ御他言被成下間敷候、長州人モ追々二十人三十人計リツ、モ、密々ニ上方ヘ向ケ罷登ル由、是迄追々登リ居候モ、凡二千入程ハ決テ可有之トノ評判モ有之候、亦遠キ慮リ無キ輩ハ、此様物騒ノ勢ト存候、少將様御帰國被遊候テハ、天子ノ御危ハ勿論ニシテ、天下ノ事ハ倏チニ長州ノ有ト相成リ、昔楠公ノ足利尊氏ヲ憂ルト同然ナラント、頻ニ歎息致候人モ少カラス候得共、夫ハ一ヲ知リテ実ヲ弁セサル訳ニ御座候、深キ御遠慮アル事ト要路ノ人々ヨリ内々承及候間、御懸念ハ被成マシク候、何事夫辺ノ細事ハ早く罷下リ候上、御直ニ御咄モ可申上候、尤タトヒ長州ガ事ヲ起スモ、当月ヤ来月ニハ得起シ申マシク、多分ハ当年中ト思召可然哉ニ奉存候、時分柄ニモ趣候間、御愛養專一ニ奉存候、母上様ニモ宜敷ト被仰上、折角御元氣ニシテ御待被下候様、被仰上可被下候、健殿・英之丞・ヲマセドノ・ヲヨキドノヘモ能キ土産可遣旨モ、御申聞置可被下候、恐々謹言、

四月十三日夜、廣島桑原屋ノ灯下ニ記ス、廣和拜、

正名大人

奉呈

二伸、有川善左衆磯永善之介殿・吉村才之丞殿・大山格之介殿ヘモヨロシク御伝声被成下度、大山氏ヘハ重野厚之丞殿御手洗ニヨヒテ緩々面会致シ、探索ノ事モ沢山有之由、明日ヨリ廣島ヘ被參答ニ御座候、又長崎ニテ軍艦大小砲御調文ノ事モ御咄可被下候、軍艦ハ諸大名ニハ初テノ調文ニ御座候間、良船相撰可申、小銃モ此度ヨリ新式ノ処ニ、伊地知正氏モ目ヲ被開候間、三千挺ノ御調文ニ御座候、上京ノ折コツトルト申小銃、長崎ニヨヒテ柿本ヨリ三拾挺、ミニール五丁、本込ノミニール五丁ヲ断然自費ニ為買持登リ候処、折カラ中原猶介江戸ヨリ被參居、大歎ニテ候、小松家ニハ別テ被喜則御用ニ相成リ、打試方拾匁ト打タメシ有之候処、中々比類無く、夫ヨリ伊地知ノ先生モ目ヲ被開、一夜中原ト私ヲ彼ノ長屋ニ被招、段々ノ咄モ有之、其折昔嘶ハセンガヨキトモ被申、一笑ニタヘ不申、則三千丁速ニ御調文可申立トノ事ニテ、其翌日私ヲ御用部屋ヘ御用ニテ御調文可致趣、帶刀

殿ヨリ御直達ニ相成候、右等ノ細事ハ罷下り候上、御細話モ可申上トノ事共モ、大山氏へ御申伝可被下候、

二七九 久光公二條城へ御登宮

四月十四日

久光公ハ御叙任、且御帰国御暇賜リ等ヲ謝セラレンカ  
為メ、二條城へ 御登城、閣老ニ謁セラレ 御退城、  
尋テ久世三位通卿・坊城大納言俊卿・正親町三條大納  
言実卿・飛鳥井中納言典卿・正親町大納言徳卿・柳原  
愛卿・廣幡大納言礼卿・野宮宰相中將功卿・阿野左中  
將誠公朝臣等ヲ訪ヒ、御叙任并御帰国御暇賜リ、且御暇  
乞フ演ラレタリ、何レモ右ノ事件御口上書ヲ以テナリ、

二八〇 小松帶刀外二名二條城出頭ヲ命ス

〔島津茂〕  
松平修理大夫家来

〔清藤〕  
小松帶刀

〔五〕  
高崎猪太郎

〔正風〕  
高崎佐太郎

右明十七日四時二條御城へ罷出候様可仕候、

四月十六日

二八一 英艦ト戦争ノ褒賜〔藩令〕

四月十六日

各組頭宅へ召喚左ノ通り達ス、

金拾両

錢九百文

右ハ昨年七月英国軍艦渡来掃攘之節、御家中粉骨速  
ニ攘斥候旨、達

叡聞 御感不淺、依テ黄金拾枚御拜領被遊候段ハ、

一統奉承知候通ニ候、依之御城下御先手諸組御先手組へ

各所ノ台場ヲ守リタリ頂戴被仰付候条可申渡候、

但其節出軍ノ物主他行等ノ向ハ当分ノ物主宅、

少將様國父公 御旗本人數之儀ハ、同組ノ物主宅ニ於

テ銘々ハ可相達候、

四月拾六日

攝津 實久 高

右金錢各隊毎二分与ス、各隊ハ各酒肴ヲ拜戴シタリ、

二八二 日向国細島御預ケ所ニ被仰付

松平修理大夫家来江

日向国細島、松平修理大夫江当分之内御預所ニ被

仰付候間、可得其意候、尤右高并場所請取渡等之儀ハ、  
江戸表御勘定奉行江承合候様可仕候、

二八三 日向国細島御預り所達書

今度御預所被 仰付候日向国細島之儀ハ、御廻米津出  
之場所ニモ可有之候間、猶此上相達候品モ可有之候、

此段兼テ相心得罷在候様可仕候事、

一斯ノ如御達アリシ故、其筋ノ吏員ヲ派遣シ調査セシ、

意外ナルハ収入ノ額寡少ナル、有名無実ナルハ無論、損

アリテ益ナキニハ驚キ、調査モナサスシテ熄ミタリト云

(幕府カ從來ノ収入額僅ニ草高十九石余ナリシト)

二八四 大原重徳卿書翰

追日快晴薄暑相催候、愈御壯健珍重此事ニ候、陳は此

度御暇御願之通り相濟御帰国、今日ハ御發興御安慮可

被成、是亦珍重存候、猶海上無異御帰着、御吉左右御

待申候、長々御滞京聊無御障万事御周旋御勤功ニ付、

段々御昇進并ニ御拝領物等幾久敷芽出度存候、猶又不

相變御勤 王御尽力所祈ニ候、仍早々要用耳、御見送

迄呈愚札候、謹言、

四月十八日晴天灯下認

重徳

嶋津中将殿

副啓

此度御帰国之事、今日杯とハ実以思ヒモ寄ぬ事、先日

大久保ニ一寸承候、実ニ無拠御訳柄御むりならざる御

事なから、御帰国ニテハ迹之処、実以不安心如何相成

可申哉、小子一人御案し申上候も、所謂杞人之憂歟ニ

ハ候へとも、心配無此上候、御遺策ても御申上被置候

と存候、御面会申候得ハ、其辺も篤と御尋申承り度心

得ニ候得共、其期ハ不成候へとも、日月ハ不待今日と

相成実以残念千万ニ存候、且又献言之事披露之後ニ候

へハ、別ニ御存意不被示との儀、昨朝大久保より御念

示御尤ニ承候、従之披露後之事ニハ候へとも、猶又御高

評非難も承候へハ、後來之心得ニも相成候事故、何卒

矢張高評非難も御面働ニハ候へとも相願度存候、且又

去冬以市蔵内々被下物之事厚辱存候、御請申からハ夫

々相応之御挨拶御答札等も可致筈ニ候へとも、元来小

家ヲ御憐察ニテ之事ニ候へハ、左様ニいたし候てハ、

却て御心切ヲ空敷いたし候訳柄に候故、総て行と、か

ぬ事共、是亦御面会候ハ、心底可述尽之処、左もなく  
残念ニ存候、御量察御海恕可被下候、呉々もくだく敷  
候へとも、将来之処御案し申候、由も此俟平天下とハ存  
られず候、御勤 王御依頼無他念候、攘夷ノ御献言真ノ  
攘夷と可申上、実ニ感服仕候、何卒々々真実之事ニ相成  
候様祈申候事ニ候、是等之儀ハいつ迄申ても尽ぬ事筆  
留候、何も御量察候、追々暑ニ向時氣御自愛專要候也、  
重ての時をはいつと白溝を

へたてゝ帰る君をしそ思ふ

〔口上〕

尤即答ヲ不劳船中御徒然欵、御帰国之上ヲ期候、以

上、

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

## 二八五 柴山彌八郎通信

一越前敦賀行ノ事ヨリ起テ堂上方議論有之、四月十六日  
夜四卿ノ罪ヲ揚ケ申立相成、四卿 議奏広橋大納言・六条中納言  
久世前宰相中将・伝奏野宮  
御役被免トノ事、翌十七日相発シ候事、

一右堂上方ノ議論ハ、薩ヨリ専堂上ヲ差立候儀ト幕府相  
疑ヒ、委シク手ヲ付候向ニ被相聞候テモ、全ク水戸・  
備前ノ浪士堂上ヲ動シ立候段分明相分り候事、

一被退候四卿ハ全体幕府隨身ノ人々ニテ、全疑ヒ相掛り  
候事ト被相聞候、

一四月十八日昼時分ヨリ 將軍攝政殿へ参殿、暴論ヲ以  
テ相迫り、四卿復職ノ事ヨリ四卿ノ罪ヲ揚ケ申立候、  
堂上方幽閉ノ事ヲ申立候テ、翌十九日四ツ時分迄ニ〔後  
空白〕

## 二八六 久光公御帰国

〔二八六ノ一〕  
国交公京師二本松邸御発駕、御帰国ノ途ニ就セラレタ  
リ、從駕人員

当番頭兼御側役

伊集院平治久

御側御用人兼御側役

大久保一蔵通利

御納戸奉行兼御小納戸頭取

山本五郎右衛門良盛

〔二八六ノ二〕

同日大坂ノ藩邸ニ入ラセラレ、同廿二日同所ヨリ汽船  
〔空〕丸へ召サレ、同廿六日日州細島ニ着セラレ、五月  
三日佐土原城ニ館セラレタリ、此時淡路守寛忠殿ハ、御  
嫡又之進殿元服加冠ヲ願ハレタリ、其為メ一日御滞留

アラセラレタリ、○元服ノ式或ハ実名モ御撰定願ハレ、  
忠亮ト号ケラレタリト云フ、

二八七 久光公御帰国布達

四月廿日布達

少将様御儀、

朝廷御用向被為濟候ニ付、御帰国ノ御暇御願

朝廷并幕府へ被 仰上候処、御願ノ通去ル八日御暇被

下候旨被 仰出、近々御退京可被 遊、就テハ大坂又

ハ兵庫ノ間ヨリ御都合次第蒸氣船ニテ、細島迄御渡海

可被 遊旨被 仰出候旨申来候、依之海陸御手当向ノ

儀共於向々取調可申出候、此旨可承向々へ早々可申渡

候、

但京都御立御日限等ノ儀ハ追テ可相達候、

四月廿日 式部川上 但馬川上  
久美 久運

二八八 海江田武次ヨリ大久保一蔵へ書翰

尚々此平島江の一封乍恐御届被下ましくや、御屋し

き裏御門前ニ御座候、かへすく慥ニ御届被下候様

奉願上候、

弥御安業被成御座候よし、万々大慶奉存上候、下拙碌  
々罷在何も御放念奉願候、板倉候への御建白不堪感服  
御尽力之御次第も細微拝承、皆以天下之御為と奉祝候、  
就ては彼の方深心配之由、是ハ当然ニ御座候、形勢可  
憂欵、面白欵、又おかしひ欵、訳のわからぬ世上ニ成  
行申候、爰許至て淋しく親切ニ相交ル人も無御座、御

帰京而已を奉待候までニ御座候、当月中ニは御別条不  
被為在欵と奉存候、先は草々ながら奉得鳳意候、頓首、

四月廿三日 海江田武次

大久保一蔵様

〔利通〕  
〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

二八九 江戸知邸新納嘉藤次探訪報告

此節日光山辺江浪人致蜂起候段相聞得、事情探訪ノ

次第左ニ申上候、

一 四月初頃ヨリ筑葉山寺内江、浪人四百人位致屯集居候

趣、其勢盛ナル向ニ候由、

四月三日石橋ト申宿へ、筑波山ヨリ辺路ヲ通り差越シ

止宿、其人数凡百八十余人、小銃并鎗具足ヲ付、又ハ

呉座包ヲ為持長一竿為有之由、其内騎馬七八人白木作

ノ神輿ナル者ヲ守護致居、是ハ水戸烈公ノ木像ナル由、

〔持脱力〕

〔持脱力〕

〔持脱力〕

〔持脱力〕

- 一 右人数ノ内ニ田丸〔直允〕稻野〔異本稻之〕右衛門年頃六拾七八歳位野羽織白麻ニ葵ノ紋ヲ墨ニテ記シ、乗物ニテ候由、中村源〔真本藤年頃三拾四五歳騎馬、藤田小四郎三拾歳位〕騎馬、此三人頭立ノ由、其外ハ名未タ相分リ不申候由、
- 一 止宿ノ本陣ヘハ葵ノ紋付タル紫ノ幕ヲ打、城門ニハ白幕ヲ左右ニ竜虎ト書タル高張押建、夜分通行ノ頭ニ天地ト記シタル高張挑灯、其外皆葵ノ紋付キタル挑灯ヲ掲ケ、又往来ノ左右ニハ所々見張差出有之候由、
- 一 同四日右人数都宮迄差越止宿、則チ吉連川〔栃木県塩谷郡吉連川〕ノ方ヘ差越賦ノ処、被差止三日滞在之由、
- 一 同七日日光山ヘ差越賦候処、山中騒動イタシ、兼テ獵師共ヘ鉄砲渡付相成居候ニ付、其者共相集メ候処、大概千人余モ相集リ嚴重相固メ、尤御山内ハ戸田越前守〔栃木県宇都宮市〕忠人数相固メ、其故通行往来難出来、徳次郎〔忠〕申ス所ヘ止宿之由、
- 一 同八日今市ト申所迄差越止宿、日光山ヨリ道法式里位、夫ヨリ兩三人ツ、交代ニ致参詣、凡二拾組位ニ相及候由、三日滞在之由、
- 一 同十一日鹿沼宿ト申処ヘ差越止宿之由、〔同上〕
- 一 同十二日栃木宿ヘ差越止宿三日滞在、其ヨリ大平山寺

- 内ノ明キ寺ニ差越、今ニ滞在ノ由、
  - 一 毎日筑波山ヨリ大平山ヘ相掛致往来、鉄砲・具足其外荷物等致運送、尤モ先触等ハ水戸殿内某ト記シ、荷札ニハ水戸殿御用物ト記シ有之候、当分大平山ヘハ三百人程致屯集居候由、
  - 一 所々ヘ三人亦八十人位ツ、人数差出、様子探リ候由、〔徳川家〕
  - 一 水戸烈公ノ木像日光山ヘ相崇メ、其ヨリ横濱夷館ヘ攻入ルトノ説ニ御座候由、
  - 一 去ル十七日日光山御祭礼ニ付、
- 勅使今城宰相中将〔定〕殿下向ニテ、於道中何乎願筋申立ルトモ風説致候由、
- 一 来ル廿八日大平山下ニ於テ、勢揃有之筋ニ取沙汰ニ候得共、五月五日ニ相延シ候由、
  - 一 日光山御警衛公義ノ兵五百人位、外ニ戸田越前守〔忠〕秋元〔孟朝〕但馬守・秋田安房守〔季〕人数ニテ相固居候由、
  - 一 日光山ヨリ大平山ヘノ道法凡十四里程、
  - 一 筑波山ヨリ大平山迄凡十二里程、
  - 一 浪人ノ惣人数凡ソ千人内外トノ説ニ候由、〔天城〕
  - 一 去ル廿四日古河宿ト申ス処ヘ、三十人許差越止宿、問屋帳等相改候由、

四月廿七日

二九〇 久光公下向達

一此節 中将様御下向ニ付、前之濱へ被遊 御着船候段  
ハ、先達ヨリ申越置候通、去ル廿一日大坂 御出船、  
同廿五日佐賀關へ御入港、一昨廿六日日州細島へ御着  
船之筈ニテ、夫ヨリ高岡筋通行之段申来候条、 御通  
路筋諸御手当向之儀、去春御通行之節之通、早々取調  
申出候儀ハ其通ニテ、万端無手拔様可取計候、此旨向  
々へ可致通達候、  
但書略ス、

右中将ト御転任被為在候半ト存遣候、

一細島

美々津

一津野

高鍋

一佐土原

本城

一高岡地頭飯屋

去川

一都之城領主飯屋

福山

一國府

加治木

一蒲生

吉野 庄屋役所

一鹿兒島

右ハ此節 中将様御下向ニ付、右ノ通御休泊被遊御通  
行候段申来、此旨可承向々へ可申渡候、  
四月廿八日 〔欠巻〕 丹波〔島津〕

二九一 江戸知邸新納嘉藤次ヨリ大久保へ私翰

追啓、阿部様御内福村〔家次郎九〕金次郎、御鉄炮組中濱万次郎  
御拘之事承知仕候、先此度は御手切ニテ、御借人之  
手段運も早々可宜と考申候、被召仕候て御用立候ハ  
、其折御貰受之手数いたし安く、此方へ記付さへ  
いたし候ハ、其上はともかくも子細無之事と考申  
候、金次郎ハ訳も有之間敷、万次郎は板倉へ願書差  
出可申、いづれも私共方給存之事ニ御座候、近々急  
場之所ニ相働可申候、

去ル十二日之御翰相届、難有拜見仕候、向暑之節御座

候得共、愈御壮栄被成御勤務、恐悦之御儀奉存候、次

ニ小子無異相勤申候間、乍憚御安意思召可被下候、京

師之儀是迄精々御尽力被為在候かひも無之カモ無之云々  
幕府改正ノ実ナ

ク、却テ詐謀術ヲ以ヒ誑<sub>レ</sub>辱<sub>レ</sub>ナリシモ、敢テ用フルノ形勢カク、從テ一般稍難反ノ形勢ナルヲ概言シタルモノ、如シ時宜ニ成立、

終ニ御暇御願出ニ相成候処御免被成、十八日 御発駕

ニ相究、十一日御暇御參

内被為 在候処、

龍顏拜

天盃御頂戴、御拝領物等被為在、其上是迄之御功劳被

為褒、從四位上左近衛權中将推任叙被為

宣下候由、恐悦至極之御儀、

朝廷之御気色丈は実以難有御事ニ御座候、宇和島はと

く御立、越前侯・備前侯・細川公子夫々御推任叙被為

在候由、無是非事ニ御座候、此氣運長州之幸ニ候、一

橋始脚下一寸之明りヲ貪り、終ニ自ら夏虫の風情なる

事ハ察知無之や、いといたく浅まし、兎角、

皇威振ひかね候氣運之數ニ候や、此節如之好機會とて

も再期有之ましく、此上は埒もなく崩立候半欵、実ニ

初発御死力を抛せられ、

皇運已ニめぐり立むとせしをおもへハ、千載之遺憾此

事ニ御座候、爰許變許トハ五  
百ヲ云フ先無事ニ候得共、京師之模

様ニ就て段々六ヶ敷成立可申、板倉勝杯も頼れざるま

ゝニ成行可申候、水戸藤田虎之助勝と初、浪士込百八

拾人計、野州都賀郡山田村大中寺之直隣、大平山蓮乘

院と云天台宗之寺ニ押入て、屯いたし居候由、市來壯

七間合ニ出、大中寺よりも聞へ来申候、近日右之人數

勢揃致候由、夫迄も壯七見て出立、其御許江、御届申

上管ニ候、烈公齊昭位牌ヲ持立候て、横濱打払之地組

と聞へ申候、岩松万次郎殿ヲ新田之一流故、大将ニ取

立とかいたし候処、万次郎いやかり、逃て当地江被成

居候由、右之人數京之模様力ヲ得、人數も重可申、さ

らハ、終ニ横濱へ打出可申、此上は面々あたりて見る

か宜候、不調之体ニて初メ立候ハ、終ニ手袋引可申、

さりとは氣之毒ニ候、横濱夷人之情態涯々敷儀は不承

候得共、別冊南部聞合書差上申候、宮之城公子圖書久治  
君ヲ云フ

より御聞被成度被仰越候間、同案差上申候、佐次右衛

門殿尊昨日より横濱江被差越候、可申上御返事ハ私

より申上候様被申置候、今比は目出度

御光着被為在候半と奉想像候、先は御報効如此御座候、



尚可申上候、以上、

四月二十九日

新納嘉藤次

大久保一蔵様

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

二九二 江戸ニ於テ久木山泰蔵探訪報告

一日光山辺へ浪人致蜂起候ニ付、再度差越候テ聞合仕候成行、

一去ル五日於大平山勢揃有之筈候処、未人数不相揃延引相成、勿論千人ニ相成候テヨリ可有之トノ趣ニ候、当分大平山ノ内ニ、調練場切開キ方等最中ノ由ニ御座候、

一山田ノ内大中寺ト申ス寺へ、長州浪人四百人位差越居候由、当分修甫等ニテ候由、

一栃木町ノ内金龍寺ト申ス寺へ、頭立タル者一人致止宿、勿論一刀流千葉周作擊劍師門人十二三人相抱、隔日ニ稽古為致候由、

一於栃木宿陣羽織并着込数枚追々出来、其外武器類モ詔候由、

一字都宮并關宿・古河・栃木宿陣屋為借入由、

一大平山へハ四五ヶ所ノ張番所出来、通行ノ人ヲ改メ、入口ニハ下乗ト云杭相建、本寺蓮乘院ハ御殿水戸烈公ノ本殿アルカ故ナ

引ト唱、住持ハ当分上野へ相廻シ候由、

一諸所へ致周旋、追々其党ニ加リ候者多ク、中間ノ法令

モ至テ嚴重ノ由、

四月廿九日

二九三 四月廿九日将車へ賜ハル処ノ詔書

幕府ノ儀、内ハ 皇国ヲ治安セシメ、外ハ夷狄征伐可致職掌候処、泰平打続キ上下遊惰ニ流レ、外夷驕暴万民不安、終ニ今日ノ形勢トモ相成候事故、癸丑年以来被惱

叡慮、是迄種々被 仰出候義モ有之候処、此度大樹上洛列藩ヨリ建議致候モ有之候間、別段

聖慮ヲ以先達テ幕府へ一切御委任被遊候事故、已来政令一途ニ愈人心疑迷ヲ不生様被遊度 思召候、就テハ別紙ノ通相心得、急度職掌相立候様可致事、

但国家ノ大政大儀ハ可遂 奏聞事、

右

聖旨ノ趣謹テ奉畏候、家茂不肖難堪任候ヘトモ、尽精力職掌相立候様勉勵可仕候、此段御受奉申上候、

四月廿九日

臣家茂

右御受書ニ対シタル別紙左ノ如シ、

一横濱ノ儀ハ、是非鎖港ノ成功可有 奏上事、

但先達テ被 仰出候通、無謀ノ攘夷ハ勿論致間敷事、

一海岸防禦ノ義ハ急務專一ニ相心得、実備可致事、

一長州所置ノ義ハ、藤原實美<sup>條三</sup>已下脱走ノ面々宰相<sup>利毛</sup>

暴臣ニ至迄、一切

朝廷ヨリ御差凶ハ不被遊候間、御委任ノ廉ヲ以、十分

見込ノ通所置致ス可ク候事、

但先達テ被 仰出候奉 御旨意可致処置事、

一方今必用ノ諸品高価ニ付、万民難洩見ニ不忍次第、早

致勸弁人心折合候所置可致候事、

前文ノ条々謹テ奉畏候、横濱ノ儀ハ不及申、海防ニ於

テハ格別肺肝ヲ碎キ、

叔慮遵奉ノ微忠可相尽奉存候、長州ノ義ハ尚又別段

御沙汰ノ次第毛被為在候ニ付、寛大ヲ旨トシ、至当ノ

所置可仕候、此段御受奉申上候、

四月二十九日 臣家茂

右各通ヲ以テ藩内布告ニ付、添書左ノ如シ、

今般從幕府

勅書御受書写二通并

御奏聞ノ条々、

御所ヨリ御下ケ札ヲ以被 仰出候御書附御受書写一通

<sup>十八ヶ条御受書第三卷ニ</sup>御老中井上河内守様ヨリ御渡相成候

<sup>記シタルモノナリ</sup>条、此旨支配中・組中へ不洩様可被申渡候、

五月 日

丹波 島津

攝津 喜入

龍衛 久高

但馬 久運

式部 川上

此ノ御受書ハ、四月廿九日 將軍家・一橋公其他閣老・

守護職等ヲ從へ參 内親ヲ捧ケラレタリト云フ、○文中無謀ノ攘夷云々ハ、

幕府尤モ好ム処ニシテ、吏員ニ於テ

詔書中ニ記サレタルヲ見テ安堵シタリト云フ、

朝廷ニ於テモ斯ク記サレタルハ是ヲ初トス、 国父公

ハ壬戌ノ春ヨリ今ニ至テ、無謀ノ攘夷不可ナルノ旨屢

々建言、或ハ口述シ玉ヒ、加之今春小松帶刀カ名ヲ以

テ、外国ノ情実ヲ縷述シ、無謀ノ攘夷ハ却テ国威ヲ墜

シ、民力耗損スル理ヲ記サシメ、近衛家ニ就テ申暢セ

シメ玉ヘリ、是ヨリ

朝議一変シ、遂ニ如斯ノ

詔ヲ下サル、ニ至レリ、時勢ノ變更寒暑ノ来往ニ異ナ  
ラス、

二九四 久光公天孟頂戴ノ趣幕府へ届書

島津大隅守儀、去ル十八日

参内仕候処、拜

龍顔天孟頂戴仕拜領物被仰付、且又一昨年来公武御一  
和之基本ヲ開キ、其功勞拔群、且昨秋以来長々滞京参  
預ニ苦勞被

思召候、依之從四位上左近衛中将御推任

叙蒙 宣下候、右之趣可申上旨申越候、此段御届申上  
候、以上、

松平修理大夫内

新納嘉藤次

二九五 高割ヲ軍賦云々藩令

此節高割ヲ以御軍賦被相定、勤方有無ノ無差別、夫々  
応持高軍器等用意被仰付、殊ニ当分重出米ヲモ被仰付  
置、給地高二相掛候小普請銀ノ儀ハ、一往御免被仰付

候、此旨可致通達候、

四月

刑部（志）「新納久脩」

二九六 或来状ノ中ノ拔書（島津三郎云々）

島津三郎事、元来 皇朝へ周旋ノ砌ヨリ全動

王攘夷ノ一因ニテハ無之、一思惑有之候テノ周旋ノ事

ト、薩藩元来申立ニハ、日本ニ五大将ヲ相定 中国・九州・四  
國・北國・東國

之儀ヲ建議ニ被及候処、御取用ニ相成不申、且又

禁裏守護職被相願候処、是モ御聞濟無之、其後攝海警

衛ノ儀手薄ニテハ不相成ト申立、攝海御固ノ儀一手ニ

被 仰付候様、是又願立候得共是モ不相叶、大和一揆跡

御支配天草島拜借又々被願候処、何レモ建議不相立、然

ル所公武 思召ニハ数度ノ建議何レモ御聞届不相成、

左候テハ外不成薩藩ノ議ニ候得共、又々思惑ノ程モ如

何、何レモ御聞濟ニ相成不申候テハ、時勢ニモ拘り候

テハ御重大ノ事故、九州ニ……………島ト申島有之、是ヲ

此度被下候趣ニテ、則島津大隅守此度帰国懸ケ右島順

見致シ、帰国可致之由、列藩ノ風聞如何ノ勤功有之候

テ、五万石モ有之島ヲ大隅守へ被下候事如何ト、大不

承知ノ趣風聞有之候、

二九七 源忠毗ヨリ小松帶刀へ書翰

未接 警咳側承、風采不堪欽慕致書 左右、自吾祖受  
封迨寡人之躬立

徳川府始二百年、今際其式微之運豈可拱手而優逸、奈  
材力譎劣弗克以濟事念此歎歎暗唾見淚之交臆已、頃聞  
貴邦有匡救志鞠躬致力欲以維持

徳府、誠其如是者寡人雖已老余喘猶存冀執鞭而從之、  
既見轍三・新次両氏歎晤数次悉示微衷不復修飾願、  
執事与両氏付度寡人之意幸致之於

修理公及

大隅公也、

貴邦与寡人有通家之好故冒昧至此而已、時下酷寒為君  
為国珍重自愛、謹白、

(酒井 教實藩主)  
源忠毗再拜

帶刀君小松執事

二九八 薩州功罪案

二九八ノ一

當時京攝ノ間ニハ、浮浪ノ徒蟻集シ訛言囂々、中ニモ  
長藩ハ昨年八月堺町御門ノ警衛ヲ罷メラレ、三條實美

等ノ公卿ヲ誘ヒ、下長ノ後該藩士多ク京・伏・坂ノ間

ニ潜匿シ、浮浪ノ徒ト回復ヲ謀ランカ為メ、密謀奸策  
ヲ以テ煽動シ、其惡ム処中川宮ヲ初メ近衛殿其他、會・

薩・越ノ惡ミニ就テ、本藩ヲ惡ムコト最モ太甚シク、  
誹譏喋々、即チ左ニ記スルモノハ特ニ甚シキヲ極メタ

リ、素ヨリ離間ノ策ニ外ナキトノ言殊ニ多シ、則チ左  
ニ記スル処ノ書ハ當時流布シタル者ニシテ、我カ藩人

ハ忿怒極リタリ、然ルカ故嵌註ヲ加ヘテ事実ノ差誤誣  
説ヲ弁シテ、後世ノ疑惑ヲ弁セントス、

四月十三日ノ夜京師石山殿邸内ニ投書(基文)  
邸地新在家 西側ニアリ

今皇神武是周宣、誰賦南征北伐篇、四海一家天歷數、

西河百群宋山川、諸侯尚守和戎策、志士空拾少莊年、

京洛雪消春又動、永昌陵上草芊々、

(朱付書)「脱アルカ如シ、後日本ヲ得訂正スベシ」  
陸放翁詩

列藩之士

石山右兵衛佐殿(基文當時 伝奏席)

坊城右少弁殿後改

謹テ奉呈候、如別冊ハ世間ニ流布、是又夫謹微端可有  
之、誠是当今ノ勢、万靈一心奉仰

天朝不奉恐懼ハ無之、則其所以積年之

叙慮凛々確乎御貫徹時至、竟以

聖躬神明御祈願期限天下ニ御布告相成候事、

日月明々其証ハ如中川尊融モ、功名ノ為メ去年六月六

日攘夷先鋒ノ虚願ヲ率ヒテ出陣セラレシノ言ニシテ、其美ハ浪士ヲ除カ

シノ策ナリシト云々、○此事其主意ニアラシ平、一橋公ト讓シタルコトナリト後

八月十八日凶変以後モ、当二十五日被仰出、一層凛

然タリ、

勅諭天下烈藩へ下リ、難有モ一点ノ御撓無之事ハ、天

下ニ不知者無之、誠巧明赫ナリ、時ニ中川尊融隠謀謀

云々前巻ニ記ス、則天位ヲ望望マル、云々訛言ヲ云ナラン、成就一時ノ勢ヲ得テ、固質忽発姦

兇ヲ募リ、正義ヲ塞キ、竟ニ顯然高大之

叙慮ヲ廢閣シ、甚シキニ至リテハ薩州ノ大奸ニ計リ、勿

体ナクモ去秋八幡ノ呪咀ニ昨年十一月七日ヲ以テ列藩連署其宛ヲ

至ル天裁隠逆暴露、九月二十三日一劍忽兇憎忍海ヲ誅

斬兇憎忍海ヲ誅斬云々、中官ノ囑スル事実分明、于此不縷述而万

眼集視未能逞、其兇逆実ニ当今ノ入鹿・道鏡ナリ、然

ルニ当職歴々鹿・鏡ノ徒詭譎、自ら

天朝ノ冠位ヲ蔑ニシ、中川尊融服心ノ四姦四奸トハ中川尊

云々等ニ阿從シ、御失体ヲ

玉体ニノミ帰シ奉リ、千載ニ御失徳ヲ表シ、安々然タ

ル挙動古今実ニ例無ク、依テ近来滿朝ノ佞臣十余輩輩ト即

子宋付巻「名義」記入スベシ、此辺誤脱アルガ如シ、正本ヲ得テ訂正スベシ

叙慮ニ背反シ、勿体ナクモ朝命ト号シ、猥リニ姦兇ヲ

助ケ、神州ノ正氣ヲ尽滅スルノ所置自破ノ道理ニテ、

神州ノ為浩歎無窮奉存候ニ付、同士ノ者過日別紙議奏

方へ差出候由、三人編者云、三人トハ則チ尹官、ハ固ヨリ、大

抵利ニ向ヒ一ハ道モ義モ知ラサル人ニシテ、恐多モ

神州ノ大失体、列聖へ大御不考ハ総テ

今上御不徳ニ委託シ、只中川尊融ノ有ルヲ知テ、同心

合力日一日ト私利ニ趨走シ、固ヨリ人道ニ着眼、思モ

ヨラス腐敗潰爛致シ方ナシ、然ル処又窃ニ御苦慮被成

候御方有橋川官被為入候由、誠ニ感泣ノ至ニ候、実ニ志

士仁人ト雖モ好テ投溝壑候ハ決テ無之、人道潰乱姦兇

跋扈、

叙慮廢閣人民塗炭ニ苦ミ、実ニ憂憤ニ不忍、殺身為仁

者ニテ、今日又天下ノ正氣鬱屈ニ不堪ノ氣萌相見、是

又空不忍投溝壑也、嗚呼

叙慮決テ必不可貫之、目的先ツ其証ヲ挙ゲンニ、今春

ニ至リ、歳ト又新ニ一夷ト窃ニ新交ヲ結フニテモ知ル

ベシ、実ニ 神明ノ正氣日一日ニ消滅シ、醜夷ハ一日ヨ

リ一日ニ驕傲、

朝廷如此シ、必ス直ニ神州ハ醜夷ノ有ト相成候ニ無疑  
ハ、鏡ニ掛テ見ルカ如シ、天地神人豈ニ憂憤ニ可堪  
哉此際無上下千辛万苦、粉骨碎身只奉報 列聖之鴻恩  
之外無之候、仰キ願ハ正義ノ御方齊ク御忠心被合、天  
朝一日ニテモ倫道御維持奉歎願候、誠惶誠恐頓首百拜、

甲子四月

列藩微忠ノ者

河 鱒 右 少 弁 殿実文

石 山 右 兵 衛 權 佐 殿基文

坊 城 右 少 弁 殿俊政

又別紙

天朝ノ御為広ク正義ノ御方ニモ御示シ被為在候ハ、必  
ス高明正大ノ御処置可被為在奉存候、  
右切紙一通ニ

うたてやむものならなくに唐衣

いかてかあたに日を過すべき

右ノ御製ニテ

天意ノ凜然マシマス事、天下ニ知ラサル者ナク、何卒  
有志正義ノ御方々

天朝ノ御危急ヲ御輔翼、御忠力ヲ被為尺度奉存候、今

世上ニ申シ伝候ニハ、九條大納言道孝 殿ニハ大ニ御憤

発ニテ、父公ノ御大恥父公トハ前關白尚忠公ヲ云フ、一昨戊午  
鎌倉ヲ擊ラレタリ、其ヲ大恥ト云フ乎 ヲ雪

カレ度思召ニ被為在候ト乎、総テ忠誠ノ御方ト御合力

御尽力、万々被為助

天意候御事奉仰候、謹言、

別紙ニ

諸公可歎善謀身 誤国當時豈一港

不望夷吾出江左 新商対立亦無人

多年ノ

叡慮ヲ輕蔑シ、窃ニ夷狄ト結ヒ、内地億万蒼生ノ困苦  
ニ拘ハラス、自己ノ權柄ヲ専ラニシ其利ヲ貪ル、其余

ハ朝廷ヲ暗シ奉リ、今日益甚シキニ至リテハ、薩州ノ

高崎猪太郎五十六  
旧名カ綴リシ書面廣翰ニ非ラス、中川宮ヨリ建白ノ草稿  
ヲ命セラレタルコトアリシ是ヲ誤リ

タルナラ ヲ以テ、中川宮并近衛殿ヲ籠絡シ、勿体ナクモ

強テ從來

叡慮ヲ矯メ、

宸綸ノ旨ヲ以テ被

仰出候姿ニ取計候次第、委曲明白ナルハ、世間委シク

承知致居候通ニテ、不堪笑泣候折柄、名卿御当職ニ被

為在、如何被思召候哉、実ニ

今上ノ御失徳ヲ万世ニ御表シ被成候ノミナラス、第一  
天祖ヲ被為拜ニ不被安御事ニ候、戊午安政五年ノ年スラ  
八十八卿編者云、八十八卿トハ則チ三条妻方、徳大寺公純、久我、  
建通、中山忠能、万里小路正房、大原重徳卿ヲ首トス詣闕御  
抗疎、偏ニ 神州ノ御為メ

叡慮御補翼被為在、今日

朝廷無極ノ御醜体、手ヲ袖ニシテ御傍觀被為在候テハ、  
人臣ノ分可相立トモ難被存候、御在職ノ方此有様ヲ御  
洞見、纒ニ今日ノ利欲ニ御拘リ、其明白タル不道ヲモ  
不被匡、一日々々ト阿諛雷同被成候テハ、直ニ

朝廷ト夷狄トノ御媒ヲ被為成候、必當時事任千載無格

満

〔采付通〕此辺懸脱アルガ如ク、正本ヲ得テ補欠スベシ  
朝廷一人知恥ノ臣ナク、紀綱実ニ廢弛、茲ニ至リ天下

列藩微忠ノ者目ニ見ル処ヲ不覚、耳ノ聞ク処ヲ不知、

真ニ白日無光輝、乍恐御力被為及兼候ハ、責メテ三千

年代御報恩ノ一端、御当職近衛忠熙御辞退ニテモ被為成、

聊カ人道ノ端相立、蒼生ノ者纒ニ憤懣ヲ慰メ候事ニモ

可有之乎ト難有奉存候、多年

叡慮ノ往昔ニ依リ、今日迄投家父母妻子ノ饑寒ニ斃ル

ヲモ顧ス、 神州数千ノ膏血ヲ絞り候者ハ、何ノ為ニ

御座候哉、各卿方ニモ攘夷々々トハ御口述ノミナラス、

御自筆ニテモ

叡慮ノ御旨ヲ天下幾千ノ人ニ御示シ被成、今更姦狡ノ  
徒跋扈シ、

叡慮ヲ矯メ、多年ノ

宸念遂ニ不実内夷狄ヲ引キ入レ、夷狄ハ其機ヲ窺ヒ、

天日將ニ地ニ墜ントスルヲモ御慨嘆ナク、

朝議却テ彼ノ徒ヲ御賞募、或ハ夷狄同服ノ者へ社稷至  
重ノ官位其他会、越前ヲ指シタルモノナラン等ヲ猥リニ賜リ、実

ニ天地反覆言語同断

朝廷如此、誠ニ

王土六十余州訴フルニ所ナシ、今日ノ勢ハ素ヨリ

神州ニ生存スル者死ル迄奉報 神州外更ニ覚悟無御座

候得共、少々ハ被為対

天恩、堂々タル

天朝聊人道相存シ候様思召被顧度、憂苦悲泣伏テ奉歎

願候、誠恐誠惶頓首百拜、

甲子四月

世間窃ニ流布スル処ノ書世間ニ流布スル処ノ書トハ、這投書ヲ作リタ  
ル筆力記シタル者ナルハ、謂スシテ明ナリ

奉備高覽候、各卿方何レノ日乎必ス御悔悟ノ期被為在  
候事ト奉存候、

列藩微忠之者

正親町三條大納言殿実衷

六條中納言殿有容

廣橋右衛門督殿胤保

正親町大納言殿実徳

柳原中納言殿光愛

久世宰相殿通照

阿野前宰相殿公誠

右切紙一通ニ記シアリタリト云フ、

又別紙

追々世間ニ流布セル

御宸翰ト唱ヘシ写、実ニ癸丑・甲寅以來頻リニ被

仰出難有、

宸憂ノ御旨ト初メテ反对シ、志士集周深憂悲歎、全ク

薩藩近年ノ持論ト、乍恐符合同徴ノ事ト驚愕縮眉、綵

テ疑惑ヲ生シ、誠ニ神州土崩瓦解ノ前兆乎ト、上下

トナク憂国ノ者悉ク仰天伏地痛哭、号泣ニ堪ヘサリシ

処、果シテ薩州高崎猪太郎五六等カ勿体ナクモ綴リシ

モノニシテ、中川宮井ニ近衛家ヲ愚弄籠絡セシ事明白

ナリ、已ニ世人ノ普ク知ルカ如ク、紀綱廢弛上下解体

百姓塗炭ニ苦ミ、暴逆ヲ以テ国家ノ正脈ヲ絶チ、終ニ積年ノ

叙慮ヲ矯メ偷安苟且ノ説ヲ主張シ、

皇国未曾有ノ姦魁 島津三郎等カ如キ、横濱新聞紙ニ

明白ナル通り、癸亥十月以來外夷ト結ヒ甲子ノ夏英夷外ニ  
來港ヲ云フ乎

正義ノ名ヲ仮リ内ニ姦黠ヲ恣ニシ、実ニ夷狄渡來姦吏

畏縮私ニ通商ヲ許セシ、尔後姦吏姦商公然夷狄ト懇親

密結シテ交易シ、一倍ノ利ヲ貪ル一大姦商スラ、天下

ノ困窮ニ関ルヲ以テ、大姦商ノ策ヲ旋シテ其利ヲ収メ

好利在職ノ徒ヲ惑シ、勿体ナクモ高明ヲ暗ント計ル、

會津・越前・宇和島等此ヲ贊成ス、然シテ從來攘夷ノ

叙慮ヲ天下ニ主張セラレシ人々、亦世ニ阿諛シ方ヲ改

ノ面ヲ変シ、終ニ百官一人諍臣ナク、実ニ驕慮ノ凌侮

ヲ受ケタルハ宜ナリ、豈ニ紀綱廢弛上下解体塗炭ニ苦

マサルヘケンヤ、朕カ不徳ノ致ス処、癸丑以來

叙慮確乎、就中戊午ノ暴逆殆ント今日ニ至リ、姦吏尹宮及  
近衛

等ヲ天闕ニ迫リ奉リ、

朝廷ノ御危急実ニ寒心セサルモノナシ、然レトモ数度

ノ

天勅一点ノ御撓ナク、壬戌春尔來ハ固ヨリ、癸亥八月



十八日怪変謀御門ノ一挙ヲ云フノ以後モ難有

天勅下リ、攘夷ノ

叙慮益確然タラセラレシ御事、天下普ク仰キ奉リ、誠ニ

天祖ニ御孝順ノ厚キ御国体ヲ厭ハセラレシ 思召ハ、

中々口ニモ筆ニモ述ヘ尽サレ難ク、然ルニ遂ニ

叙慮貫徹セス、外夷跋扈国威益退縮致セシハ、実ニ

征夷府ヲ初メ列藩諸侯ノ大罪ナリ、而シテ今日恐多ク

モスル

叙意ニハ決テ無之、己レカ邪説ヲ遂ケント企テ、然ル

ニ一人回顧ノ廷臣ナク、滿朝悉ク傍觀諂諛ノ罪ヲ独リ

主上ニ帰シ奉リ、知ラサル者ノ如シ、戊午ノ姦ハ形暴

且疎ニシテ内患実ニ深シ、豈言フニ堪ユヘケンヤ、

一夫醜夷征服ハ国家ノ大典、遂ニ膺懲ノ師ヲ興サス

バアルヘカラス、是全ク一時ノ遁言譎謀ニシテ、外ヲ

責ヒ内ヲ賤メ、邪ヲ挙ケ正ヲ絶チ、安ヲ偷ミ難キヲ避

ケ、義ヲ廢シ恥ヲ忘レ、言行表裏百誦千詐

叙慮ヲ蔑如シ、外夷ト窃ニ親睦シ私ニ懇交ヲ求メ、日

用欠クヘカラサル品ヲ以テ交易ヲ專トシ、万民ノ苦ニ

拘リタルモ不厭、只一己ノ私利ヲ貪ルノ徒何ヲカ忠ト

云、何ヲカ実ト云フ、何ヲカ純ト云フ、何ヲカ厚ト云

フ、何ヲカ思ト云フ、何ヲカ慮ト云フ、何ヲカ宏ト云

フ、何ヲカ遠ト云フ、何レノ年カ膺懲ノ師興リ、

宸襟ヲ安ンシ奉リ、万民ノ急ヲ救フヲ見ンヤ、嗚呼、

(朱付書)「日札スベシ」  
甲子四月 日

右一帳一冊ニ記セリ、

二九八ノ二  
又別冊

薩州功罪判案

薩州今昔ノ挙動天下ノ議談紛々書キ著シ、薩藩ノ心情

事業其功勲固ヨリ不少ト雖モ、罪モ又甚多シト云フベ

シ、今窃ニ彼我ノ私見ヲ棄テ、細断分明其功罪ノ二案

ヲ分ツ、読者能々再読シ、前後本末ヲ照覽セハ格案ノ所

モ一定シ、人心ノ向背モ自ラ公然タル事アラント爾云、

二九八ノ三

薩藩功案

〔国勢衰弱から三月十八日島津三郎までは、  
第二卷番号四〇一と同文により削除〕

又所司代牧野備前守(忠恭 長岡藩主)ヘ被差出タリ書付ニハ、

此節攘夷拒絶ノ御厳令承知仕候ニ付、夷船一艘ニテモ

領内ヘ致碇泊候ハ、不及応接加誅戮候心得ニ御座候、

且時宜ニ依リ候ハ、夷賊為征討軍艦差出候儀モ可有之

候間、右ノ趣兼テ御聞置被下候様、可申上段申付候、  
此段申上候、以上、

三月

松平修理大夫内

(編註)  
本田彌右衛門

左候テ防禦嚴重ニシテ相待候処、七月上旬英船入寇ハ六月廿七日ナリ英艦七艘鹿兒島港へ入寇シ、前年生麥斬殺ノ一件ニ付、償金又ハ下死人等ノ儀色々申立候処、薩人凜然不惶利害申論シ候得共、不聞入乱妨ノ所業ニ及候ニ付、則発砲轟々、船将始メ死傷不少、直様横濱港へ引退キ候事夷人ノ新聞紙ニ詳ナリ、是ニ依リテ天下ノ人弥以テ力ヲ得、各掃除ノ功ヲ顕シ度ト日夜防禦ノ手当士氣奮興シ、其功赫赫ナル事ニシテ、天下ノ士悉ク国許へ差送り、或ハ薩藩へ寄居候者ヲ隱密ニ斬殺シ事實顛倒ス、国元へ差送りタルハ命ヲ以テシタルニ非ラス、同論ナリシ薩藩艦ノ航中、勅命等ノ事ヲ以テ意圖シタルヲ憤リ斬殺シタルモノナリ、将ヲ寄留ノ者ヲ隱密ニ斬殺シ云々尤モ誤レリ、寄留者トハ果シテ田中河内介等ヲ云ナラン、詳ニ前卷ニ記スカ如シ、○田中河内介等ヲ斬殺シタルハ吉田清右衛門、是枝萬助等其他ノ所爲ニ罷レリ、其願末ハ前卷ニ記スカ如シ、○斬殺シタル始末ハ他日中山中左衛門言上シタリ尊註、他藩浪士ハ追々各藩ニテ嚴重申付候由、諸浪士共ハ如何ニモシテ心事ヲ相貫度ト存候テ、国父上京ノ機ナカリセハ、烏合ノ衆ニテハ豈此機会ニ臨ムコトヲ得ンヤ、  
功業平野某カ上書併セ見ルベシ、當時ノ形勢世人ノ知ル所ナリ原註、故ニ其事ノ精粗緩急ハ有之候

共、同シク同心動

王ノ儀ハ公然タル事ニ候、

叡慮ノ由ヲ以テ無用捨斬殺ヲ加へ、鎮静ノ名ヲ仮リテ、

其功ニ為スハ豈ニ不情ノ甚シキニ非ラズヤ、

朝廷ニモ固ヨリ數回説論セラレン事ハ、壬辰(第一卷)ニ記シタルカ如ク、今茲ニ記ス処不情ノ甚シキ云々事實ヲ知ラス、外形度相ヲ以テ論シタ、ル者ナリ

鞏轂ノ下争乱ハ不被為好候得共、不得已時宜ニ臨ンテ

ハ無詮方次第ト被 思召候儀ハ、五月五日ノ御書取ニ、

浪士勤

王ノ志ヲ以テ蜂起セシヲ、被愠

叡慮候儀ハ勿論ニ候得共、自然暴発等ノ事有之候テハ

叡慮齟齬致候ニ付、御処置相待チ鎮静候様云々、又五

日ノ

(朱付箋)「此辺誤脱アルカ如シ、他日正本ヲ得テ補匡スベシ」  
勅諭ニ、山陽・南海・西国ノ忠士蜂起密奏云々、尽ク

雖出忠 誠憂国ノ至情事甚タ激烈使喻、薩長之業墜圧

其他云々トノ御文言ニテモ、浪士御愛惜ノ意信仰スル

所ナリ、

二九八ノ四

薩州罪判

然ラハ則チ薩州昔年ノ一挙ハ、専ラ 順聖公ノ遺志ヲ

守り、

皇威回復幕政更張、志士人心ノ向背ヲ定メ、多年ノ  
勲慮ヲ遵奉シ夷狄条約等破却スルニアリ、然ルニ右浪  
士去年随從ノ節、薩州ノ有志數十人ニテ申シ合セ、別  
策モ有之由ニテ、九條殿下へ推參シ、或ハ酒井若狭守  
ヲ討伐シ、更ニ人心ヲ決定セシメント計リシ由、其事  
狂暴ニ似タリト雖トモ、其志ハ忠誠ニ無相違、浪士ノ  
一挙ハ誠ニ不為叶

勲慮、鎮靜被申付候儀ニ候得ハ、国父ノ胸中能々勲弁  
ヲ加へ、心跡ノ処ヲ判断シ、丁寧ニ誠諭ヲ加へ、再度  
ニシテ肯ンセサル時ハ目ノ当リ懇切被申付候ハ、其藩  
人ハ勿論他ノ浪人ト雖モ豈不当ノ事ニ涉ランヤ、不然  
シテ押へ方ノ者ヲ伏見へ出シ、告諭不承知之由ヲ以テ  
忽チ誅伐ヲ加へ再ニ懇諭セラシ事実ヲ知ラス、却テ暴慢ノ舉、殘ル  
勲ニ及ヒタルハ壬戌年第三卷ニ記シタルカ如シ、殘ル  
諸浪士ハ 思召ニハ隔然文外ニ顯レタリ、事ニ緩急ア  
リテ取捨セステハ御勤考モ有之事ニ付、鎮靜ノ命ハカ  
リ下リ候事ニテ、此度モ亦無理不当ニ  
朝意ニ背反シ奉ランヤ、就中閏月廿日岡藩小河彌右衛  
門等へ御渡書中ニ、小河彌右衛門一列当夏以来罷登、  
島津三郎勤義孝録ニ  
記セリ

王ノ忠志ニ随從シ、戮力鎮居候段

勲慮 思召云々ト有之、右彌右衛門等モ入薩小河入薩ノ順  
未ハ文久二年  
三月ナリ、詳ニ  
義孝録ニ記セリ致シ、先年国父登上ノ節随從、伏見人数ニ  
相加ハリ候由、

勲慮被為 在候処奉推察候得ハ、伏見一条等ノ如キハ、  
如何計リカ難有キ 思召ノ御事カト奉存候故、八月御  
勲書中ニ或ハ櫻田東禅寺又ハ坂下等ノ一件、追テハ伏  
見一条ニテ致死死亡候者共、靈魂招集以礼収葬坂田東禅寺又  
ハ坂下等ノ一  
件、追テハ伏見ニテ死者靈魂招集礼収云々、通覽志ハ忠ニアルヘシト雖モ、舉  
跡ニ於テハ一ツノ乱臣賊子ニ外ナシ、然ルニ朝廷是ヲ礼収スルトキハ乱臣賊子ヲ  
誘敵勸壞スルニ同シ、道  
ヲ知ラサルト云フヘシ、令子孫祭礼候様被遊度、尤モ現存ノ者  
共ハ、夫々如旧相復候様ニトノ

勲慮ニ被為在候云々トノ旨ヲ以テ、長門世子公へ被命、  
其旨関東ニテ取計候様トノ儀ニテ、世子東下ニ相成候  
処、薩藩ヨリ伏見一条ノモノ共ハ主命ニ違ヒ、不忠ノ  
由ヲ以テ

勅使大原卿へ申立、矯

勅ニモ相当リ候哉、私ニ刪去ニ相成候由、薩藩ノ存慮  
如何成次第哉ト天下有志ノ人殆ント背反ノ阪令ヒ  
勅命ニ出ルトモ  
法ヲ曲ルノ理アルコトナシ、況ヤ当時大政改革ヲ建論シ、幕政ノ慈怒ヲ矯正セラ  
レントスル際ナルヲヤ、政事ノ得失ハ法ノ立不立ニアリ、法ハ國政ノ礎基ナル、  
多弁ヲ志ヲナセリ、夫不隨者ハ其事是非得失ヲ不問、敵罪  
要セス

ニ所シタリ、敬罪ニ処シタルニ非ラス、寛典ニ処シタルハ前巻ニ記シタルカ如ク謹慎ニ止リ、一年ヲ經スシテ放免各職ニ就カシメラレ

テ、堂之ヲ敬罪ニ上フヘケンヤ、寺田屋ニ於テ新殺セラレタル輩ハ、説諭使ニ向テ暴慢無礼ノ舉動ヲ為センカ故、止ムコトヲ得ス、新殺シタル者ナリ、其暴慢ニ向テ暴動ノ証ハ説諭使ト格闘シ、道島ハ闘死シ、鈴木・森岡等ハ重傷ヲ受ケタリ、是ヲ以テ説諭ニ服セス、却テ拮抗シタルカ故止ムヲ得サルニ出タルヤ明カナリ、又奈良原カ單身ニ階ニ登リテ衆ニ向テ説得鎮撫シ、或ハ当夜直チニ奈良原同行シテ京師藩邸ニ解リタルモ、唯々同行シタル者ニシテ、更ニ罪人ノ処分ニ非ラス、或ハ藩邸ニ於テモ二三ノ長屋ニ置キ、警吏タモ附セサルナリ、茲ヲ以テ美玉三平ナル者ハ脱走シタリ、此等ヲ以テ、敬罪ニ処セザリシヲ知ルニ足レリ、然ルニ三平ニ記ス所ハ其美ヲ知ラ、法令ニ於テハザル次第モアルヘク候得共、

忠節ノ魂ニ至リ候テハ斧鉞ノ能ク制スル処ニアラス、故ニ赤穂義人赤穂義士ノ所分ハ法ニ於テ至当トス、若其志ヲ取テ生ヲ与フルトキハ法ナキニ階ルヤ論ナシノ名モ今赫然ト新ナルカ如シ、

朝廷ニハ至大ノ御仁心ヲ以テ、此等ノ処深ク御案心被為成候テ、難有被 仰出候上ハ、薩藩ニ於テハ弥以テ感動シ、彼ノ者共一旦主命ニ相背キ不得已相果候得共、其志ハ美以テ可憐次第

御勅諭ノ旨不敢当候得共、彼者共地下瞑目ハ勿論、薩藩ニ於テモ実ニ難有次第ト言上ニ相成候ハ、道并ヒ行レテ不相悖ト被存候、然ルニ一旦嚴刑ニ処シ候上ハ、

徹頭徹尾罪命ヲ蒙ラセ、剩ヘ

勅諭再案ニ相成候次第ヲ執リ抑ヘタル、我慢ノ志ト云フベシ、加之現在ノ西郷吉兵衛隆盛薩藩同志中ニテ

モ巨擘ノ由候処、当時伏見一件ニ付、国許ニ差送り幽

閉未タ不相解由、是又天下人心ノ存スル者薩ノ極殺ヲ洞見セシ事言ヲヲ敬クノ策アリト云フ、原註ハ西郷ヲシテ天下ヲ籠絡愚弄シタルハ、何等ノ事ヲ演指セシヤ、独リ西郷カ一意成ハ己カ徒ト俱ニシタルナシトセス、則チ丙寅年冬〔朱符書〕月日見ルベシ、月日見ルベシ而シテ遂ニ戊辰ノ初メ討幕ノ事ニ及ホシタリ、

勅諭ニ扞格シ奉リ候様ニモ相見得候、且又當時国父登京ノ節、諸浪士見聞スル処意味違有之ニモ、合従ノ儀ハ天下ノ公論ニテ掩之、現ニ既ニ八月三日協坂閣老ヨリ留守居召出、松平修理大夫家来堀小太郎於京師浪士〔仲左衛門〕共ヲ集メ為騒立、公刃ヘ対シ不届ノ所業有之候ニ付、

急度御沙汰可有之処、格別ノ訳ヲ以テ修理大夫手限嚴重可取計云々ト有之ニテモ知ラレタリ、然レトモ国父ノ深意モ有之候哉、右小太郎事国父帰國ノ節、火輪船ニ乗セ本國ヘ連レ帰り、直様伊地知壯之丞トシテ伊地知壯之丞、後貞驥ト呼フ、幕府本文ノ如ク連シタル大ニ所以アリ、癸亥ノ冬、国父公御在京中幕吏永井主水正藩邸ニ来リ、拜謁種々ノ譯中永井曰、堀小太郎ノ者ハ現今如何ノ場ニ在リヤ、国父公曰ク、彼者ハ幕府ヨリ御運ノ趣アリテ亡命シタリ、永井笑テ曰、彼ノ事ハ其時限リニテ何モ今ニシテ關係ナシ、公曰、若シ彼依然タルニ於テハ如何ノ御処分アルヘキ乎、永井曰、其時ノ事実ハ全ク幕藩人ノ口ヨリ出、而シテ閣老ノ聞ク処トナリ、彼其筋ノ職ニアリカ故、斯ク連シタル者ヨリ御ニ公曰弊藩人ヨリ出タリトハ、如何シ、永井云ク、幕藩伊集院吉次ト云ヘルナリ、公曰弊藩人ニ依レリ云々、公モ初メテ聞クシ其事実聞セザレバ、而シテ伊集院ハ処刑セラレタル者ナリ、詳ニ親話記ニ記載ス、○改名申付内々堀カ藩邸ヲ焼キタル云々前巻亦ハ親話記ニ記スカ故茲ニ略ス

相用ヒ候由、必竟薩藩ノ拳ハ浪士憤怒ヲ以事ヲ起シ候

功案中併セ考、亥秋国父上京ノ節、九州諸藩ヘ懸合ノ文中秋フベシ原註、

九州諸藩ヘ懸合ノ文云々事実アルニ、鞏敵ノ下浮浪士掃攘不致候

コトナシ、蓋シ佐蘭ノ誤ナラン

様ニモ相見得、前後矛盾ノ次第不審ノ事ニ候、浪士ノ天下ニアルヤ草ノ地ニ生スルカ如シ、随テ掃ヘハ随テ生ス、癸丑尔来ノ事見ルベキノミ、今日輩下ヲ掃ヘハ明日他所ヘ生ス、他所ハ可ナリ、却テ肘腋ノ下ニ生ズルニ至ル、伏見一条其藩ノ人多キニテモ知ルベシ、今薩藩ノ中伏見一条其他尚多カラン、苟モ心ヲ是レニ用ヒスシテ、徒ニ輩下ニ着手スルハ内禍ヲ生センニ近シ、夫レ浪士ハ固ヨリ不逞ノ徒多シト雖モ、大半ハ慷慨激烈、生テハ取義死而就公

皇威回復夷狄掃攘ヲ期スルニアリ、其心ヲ不問シテ其蹤ヲ追ヒ、徒ニ是ヲ夷セントセハ、千万世ト雖モ豈掃蕩ノ期アラシヤ、故ニ肥前侯ヨリ薩藩ヘノ答書ニ条理ニ正ヲ踏ミ、只管

皇家ノ御為 公武一致ノ儀ハ、則チ御同意許リノ一言ニテ、浮浪掃攘等ニ不同意ノ儀ハ、文外ニ顯レタリ

肥前侯此等ノ照合曾テアルコトナシ、當時ノ斷説ヲ以テ斯ク記シタルナラン、類誌記ト欲セハ、其幽閉ヲ解クヘ百萬方端知ル

叔慮ヲ遵奉シ、攘夷ヲ促スニ如クハナシ、左候得ハ浪士輩ハ要衝ノ場所ヘ屯集セシメ、敵愾ノ志專一ニシテ、他ニ及フノ違ナク輩敵ノ下自ラ清浄ナラン、是ヲ治セ

スシ善ク治ルノ術ト云、是レ亥六月姉小路殿ヲ暗殺ノ

一条、其事隱密委曲分明ナラサレトモ、會津ヨリ薩邸

ヘ押掛ケ、藩士二人ハ自殺シ、一人ハ脱走等ノ姿ニ至リ、区

々藩人ノ力ヲ以テ未曾有ノ悖逆ヲ企テシハ、主謀ノモ

ノ適々ノ指揮ナカリセハ此事二可及トモ思ハレス、亦

可疑ハ案中ナレトモ、姉小路卿カ奪ヒ取ラシメ、薩州某五月六日帯ル処ノナナルコト分明ナリ、今又三条殿等ヲ暗殺セントス、悲愴邪ノ正ヲ庄スルノ甚キ而シテ臺上ノ一人ノ人々憤ル者ナク、却テ彼レニ阿護シ一時ノ欲ヲ滿テントス、名分地ニ墮テ倫理ヲ掃地、嗚呼如何ナリ

神州前キノ二姦後ノ四姦前後六姦ニテ、朝廷前ノ如ク九姦、久我ハ不可ナリ

原註】○前ノ二姦云々九姦尙志勇及ヒ所司代酒井若狹守ヲ云、後ノ四奸トハ

中川宮、近衛殿及ヒ越前、会津、攘夷ノ一事ニ至リテハ、

字和島及ヒ本藩ヲ指シタルナラン

叔慮確定ノ儀ニ付、薩藩ニ於テハ固ヨリ異同ハ無之儀、

強大ナル英国サヘ掃攘ノ事故、其後トテモ毫毛モ間斷

ハ有之間敷ニ、豈料ランヤ去七月上旬英夷退帆ノ後亞

米利加船繼テ入港セシトキハ、薪水食料ヲ遣シテ丁寧

ニ外夷狄ヲ引キ内正義ヲ掃ハントス、邪説逆賊ニアラスシテ何ソシヤ原註】○

去去七月上旬英夷退帆トハ、其後十一月月中旬米國軍艦入灣食料薪水ヲ乞ヘリ、是ヲ指シタルナラン、該艦ハ素ヨリ暴傲ノ所為アルコトナク怒

勢ヲ尽シ、欠之ノ品ヲ乞フニ依リ与ヘタルモノナリ、仮ヒ憐心ヲ懷キタルモ形ニ

頭ハレス、欠スルニ懸懸ヲ尽ストキハ、長藩ノ如ク暴ニ是ヲ掃攘スヘキニ非ラサ

ルハ多クテ要セス、是レ本藩ノ定論ナリ、長藩ヲ掃攘如キハ、勅諭守ノ名ヲ以テ

國ノ名ヲ稱シ職名ヲ字ニト云フニ外ナク、皇

新聞紙ニ見ヘタリ、抑甚シキハ十月神奈河ニ於テ薩藩

士官兩人藩士兩人トハ高崎重野ノ二名ナリ、此二人ニ止英夷ノ旅館ニ

至リ、双方談判ノ上償金渡シ方ノ期日ヲ極メ、戊八月生麥ニ於テ英人ヲ殺害セシ人ハ、探索シ得次第ニ英國役人ノ見分ヲ受ケ、目前ニ於テ劊首ノ罪科ニ処スベシトノ条ヲ印紙ニテ相渡シ、償金ハ幕府ニ借用シ渡シタリ、嗚呼此ノ一事ニテ天下ノ事終ニ地ニ墜チタリト云フベシ、抑モ近年天下ノ變動ハ何ニ依リテ起ルヤ近年天動ハ種々多端ナリト雖モ、中ニ就テ嘉永癸丑米夷來港ニテリ、粵子長藩カ私、意ヲ逞フセント百方計謀謀ニテリ、宜シク前後ノ事突ニ照シテ弁知スヘシ、勲慮ノ深憂ハ何ヲ以テ然ルヤ、必竟ハ幕吏上裁ヲ經スシテ五ヶ国ト条約ヲ結ヒ調印セシヨリ、斯ル切迫ノ時勢ニナリ行キ、四民困窮朝タタヘヲ不俟ニ至レリ、乃チ薩藩ヨリ壬戌四月ノ建言ニモ、幕役共勲諭ヲ遵奉不仕外夷通商免許云々、執政安藤嚴罰被仰付度、若シ違勲ノ廉相顯レ候ハ、速ニ可加誅伐旨被 仰下度云々ナトノ文ニテモ、夷狄拒絕ノ意ハ顯然夷狄拒絕ノ意ハ顯然云々、トノ御建言ニ、無謀ノ攘夷ハ不可ナル旨、記サレサルハアラサルナリ、朝廷ニハ浪士等ガ主張セル三条美美、姉小路等ノ各卿カ森謀ニ左袒シ、而シテ恐多モ主上ヲ稱フ事ヲ知シ召スト雖モ、如何セン御膝辺悉ク同森ノ者ノミナルカ故、止ムヲ得セザレザリシ事美ハ、癸亥四月尹宮ヘ下サレタル御密、彼ノ井伊・輒或ハ同年十二月 國父公ヘ切ニ賜ヒタル宸翰ニ明カナリ、安藤ハ何ノ罪ソヤ、必竟外夷ニ親ミ通商ヲ事トシ、勲慮ニ背キ夷人同様ノ姦賊共故、是ヲ惡ムハ則チ夷人

ヲ惡ムモ同様ニテ、宜シク可惡ノ理ナリ、今則チ頭ヲ低ケ面ヲ変シ、夷人ニ和睦ヲ乞ヒ親ミヲ求ムルハ、尤モ之レニ倣フニ非ラズヤ、生麥斬殺ノ節尚ホ去ル七月モ去三月 朝廷ヲ輕蔑シタル云々、癸亥三月召ニ依リ御上落、要路ノ方々ト近衛殿ニ於テ御論談アリシト雖モ、採用ノ勢ニ非ラス、故ニ僅々三日間ニシテ御指圖セラレタリ、其餘御届書等ニ攘夷云々ヲ記サシメ玉ヘリ、當時長藩カ三条美美等ヲ籠絡シ、天憲ヲ矯メシ横暴ノ舉動太甚シキヲ極メタルノ際ナルカ故、如此ノ事ニ及ハレタリ、其説ハ前卷ニ記スカ如シ、茲ニ記ス處ト長藩及ヒ公卿方ノ舉動ヲ照シテ當時ノ事突弁知スベシ、朝廷ヲ輕蔑シタルヲ如何カ可申說ヤ、英薩一件ニ付幕府ヨリ償金渡方ニ相成候儀サへ、殊ニ勲慮ヲ被為惱、違

勲ノ罪不輕共御沙汰下サレタルニ付幕府ヨリ英薩一件ニ付償金渡シ方ニ相成云々、閣老小笠原國書頭カ專斷償金ヲ渡シ、其後 將軍家東藩ヲ請フト雖モ、長藩及ヒ浪士輩カ隱ニ謀ル処アリテ允シ玉ハサルノミナラス、無謀ノ攘夷ヲ促シ玉フニ依リ、小笠原ハ大兵ヲ卒ヒテ上京シ、將軍家ヲ引戻サントノ策ニ出タリ、然シテ 朝廷ハ其事ヲ措ヒテ專斷償金ヲ渡シタルノ罪ヲ鳴ラシ、譴責スヘキノ命ヲ幕府ニ下サレタリ、幕府ハ已ムコトヲ得スシテ確實シタリ、事案前卷ニ、幕府ヨリ厚ク詳記ス宜シク彼我ノ間ニ就テ曲直或ハ情実弁スヘキナリ、御斷被申上候次第ハ衆人ノ熟知スル処、幕府モ攘夷ノ儀迫モ御聞濟無之ト存シ、公論ノ所在不得已御受被申上、鎖港談判ノ次第ニ立チ至レリ、薩藩ニハ始終ノ得

失承知シナカラモ薩・会・越・宇ノ四藩深入萬朝阿從面映鎖港談判ノ議忽チ破レ、森吏益美狄ニ親睦ス 原註、勲慮幕議一切頓着ニ不及、公然和ヲ乞ヒ皇國ノ事註、懇信ヲ求ムル次第、深謀遠慮有之哉ニ候得共、国是ヲ誤リ 勲慮ヲ輕蔑シ、先公ノ先公トハ順深意ニ悖リ、天

下ヲ掌上ニ愚弄致候次第、豈嘗舌ニ論説スルニ忍シヤ、是其罪ノ大ナル者ニシテ、天下万世ノ格案竟ニ不可掩

者也世間ニ夷人幕府ヲ責メシハ、於、幕府弥償金ノ渡サレハ先ヅ三郎カ首ヲ切テ渡スベシト云フ趣意ノ嘶モ稍見ヘタリ、又編、軼慮已ニ乞和有、幕府則奉、軼慮助幕府等征夷職矣、嗚呼薩藩ノ名族大業ヲ以テ、彼助幕府尙吏不助幕府ノ旨原註

カ如ク明著ナルハアラザルナリ、然ルニ一旦ニシテ利害得失ノ見胸中ニ交リ、緩急用捨ノ説左右ヨリ起リ、

終ニハ取利磨義不知不識調和ノ事実ハ前卷ニ記スカ如シ、外面ノ帝則ヒ無謀ノ義夷真ノ、勅意ナリトシテ是ヲ論セシニ、臣トシテ不可ナリト認ムルトキハ諷諭シ停メサルヘカラス、況シヤ黠薄液ノ徒私利ヲ逞セシノ口実ニ出タルヲヤ、國父公ハ先公ノ遺志ヲ繼繼セラレ、身ヲ犧牲ニ供シ七百年来緒々

受封ノ國家ヲ肩顧セス奮興セラレシハ、鎖鑰主義ニ非ラス、癸丑以來、國辱ヲ一洗回復シテ、皇威ヲ海外ニ輝サンノ一点ニテリ、遺ノ一点ヲ振振シシニハ名分ヲ正シ、大義ヲ明ニシ、尊王ノ道ヲ確立シ、匹夫匹婦モ愛國ノ情ヲ厚クシ、人材ヲ登庸シ、内政ヲ整理、武備ヲ充実スルニ外ナキノ定見ナリ、其定論ハ壬戌ノ春來、朝・幕ノ間ニ建言セラレシハ衆知ルカ

如シ、宜シク前後ノ事實ニ就テ明弁スベシカ

惜次第ナラスヤ、伏テ願フ天下在位ノ君子名義順逆ヲ基本トシ、

皇威回復 幕政更張、夷狄掃攘ノ大事業ヲ振興シ、

祖宗在天ノ靈ニ対揚セラレンコトヲ、是余等カ私言ニアラス、天下ノ公言也該而知薩大爺ノ一端也、越、宇等亦小異大同原註、神州ノ姦賊ナリ、而シテ多為彼役使セラレ、會ハ愚、越・宇ハ知、

而巧滿朝争而阿諛面従、嗚呼十年ノ

宸憂已哉、薩姦ノ大趣意只在姦謀、以矯

軼慮軼慮助幕吏、因循以遂私意、會ハ知有幕府不知有(朱付書)「此辺誤脱アルカ如シ、正本ヲ得テ訂正スベシ」、皇國、

一言ス、春嶽心得書十二ヶ条、奉 勅始末編者云、奉勅始末、甲子二月長藩井原主計上京シテ、主人大體父子ノ冤罪ヲ訴シト携帶シタル書ナリ、後卷ニ記ス 等合セ考ヘ見ル時ハ、

心得ニ相成リ可申候、

元治元年甲子七月十九日

此書何レノ人ノ記シタル者乎、当時世ニ流布シタルモノナリ、一説ニ長州人カ手ニ出タリトモ云フ、果シテ

然ラン、其頃長州カ薩・會・越・宇ヲ四姦ト唱ヘ中ニモ悪ムコトト云結シテ十分故、雜問ノ策種々ニシテナラス、百万讒説スルコト此書ニ止マラス、詭言ヲ用ヒ人心ヲ動シ、私意ヲ恢復セシコトヲ謀レリ、此書ノ流布スルヤ正議ノ者ハ目撃人ヲ所爲トシ、謂ハ実ニ婦女ノ争勸ニ戻レリト妄談セリ、如ク己レノ虧失ハ措キ、他人ノ欠漏ヲ唱フト云フハ則チ長人トシテ唱ヘタリ、又奉勅始末ト云書ハ、長藩奉 勅ノ顛末ヲ挙テ、己レ

ノ罪ヲ弁解シタル者ナリ、又姦ノ稜ト名ツケタル書アリ、此モ同シク己ノ罪蹟虧失ヲ論蔽シタル自負ノ甚シキモノニシテ、三條實美等ノ輩カ矯

勅ノ顛末ヲ自ラ著シタルニ等シキ者ナリ、

二九九 久光公御退京ニ臨ミ御訓誡

久光公ハ本年 月御退京帰國セラル、ニ臨ミ、公子圖

書殿治久及ヒ国老小松帶刀等ニ命シ玉フニ、将来他事ニ

巨ラス一向

禁闕ノ守護ニノミカヲ尽スヘシト令セラレシニ依リ、敢テ他ニ喙ヲ容レサルニ依リ、他ヨリ見ルル処ハ何カ包蔵スル旨アラン、或ハ因循ニ流レタリ、種々ノ誹評ヲ受クルニ至レリ、如斯ナルモ當時長藩及ヒ浮浪ノ徒堂上方ヲ籠絡シ、奸謀ヲ用ルコト甚シキカ故、洞見シ玉フ処アルカ故ナリ、而シテ長州征討ノ

大詔下リシカハ予テ斯クアリナント思召シケルカ故、此機ヲ失ハス討伐シ、禍根ヲ絶ツカ將謝罪スルトキハ、至当ノ御処分アルハ此時ニアリト直チニ出軍ノ部署ヲ定メ、進軍ノ期日ヲ俟タシメ玉フ、

長州ニハ京師敗軍未タ幾千モナク、國中ノ人心混乱、或ハ謝罪訴中何等ノ命令モナク狼狽ニ極リタル際、十八艘ノ夷艦英・米・仏・蘭四ヶ國馬關ニ侵入シ、遂ニ戦争ニ及ヒ敗潰、剩ヘ砲台ハ破壊大小砲ハ掠奪セラレ、戦フヘキ氣力尽キ、遂ニ城下ノ盟ニ等シキ和ヲ乞フニ至レリ、然ルニ長人ハ種々ノ遁辞ヲ以フルモ、親シク実況ヲ視タルモノ多キカ故一般笑柄ニ帰シ、大ニ不名ヲ取ルノミナラス、

皇國ノ汚辱ヲ千載ニ残セリ、然ルニ 国父公ハ内外ノ

困難同時ニ起レルヲ大ニ憂慮シ玉ヒ、殊ニ京師ニ於テハ長賊左袒ノ公卿寡カラス、動々モスレハ賊論恢復セントスル形況アリ、元來動搖變換シ易キ堂上方ナルカ故、百方苦心シ玉ヒ、寢食ヲ安ンシ玉ハス、其御心裏ハ此月十五夜ノ宵月モ朗カナラサリケレハ、実景ニヨソエラレテ左ニ詠セラレ、膝辺ノ輩ニ示シ玉ヘリ、  
夜るともみへぬ半バの秋の月

都の月はすむやすますや  
〔頭註〕「此歌ハスベシ」  
此意ヲ以テ苦惱シ玉フヲ知ルニ足レリ、



元治元年 (1864)

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
元治元年五月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」の記載あり  
(紙数四六枚)〕

## 目録

- 小倉滯在土持平八報告
- 五月初旬洛中ノ形況報告
- 久光公御着城
- 新納嘉藤次ヨリ中濱萬次郎へ照会
- 御城下各所礮台遠撃操練
- 五月十一日ヲ以テ井上大和報告
- 五月十二日ヲ以テ在京西郷ヨリ大久保へ書牘

五月十二日小松帯刀京師ノ事情大久保一蔵へ報告

長州征討軍隊操練

木場傳内ヨリ大久保一蔵江書翰

全上

江戸詰藩吏年限縮小達書

小倉滯在園田探訪報告

子五月廿一日天神橋へ張紙

折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ脇差ヲ贈ル

全上第二

大坂堂島張紙

江戸ニ於テ將軍家親書ヲ以テ閣老若年寄へ達書

在京国老小松帯刀ヨリ喜入攝津へ私翰

四月十三日長州ヨリ津和野へ返翰

三〇〇 小倉滯在土持平八報告 (汽船焼亡)

三〇〇ノ一

先月十五日暮時分、小倉領門司浦之内大久保濱江死体  
壹人流寄候を浦人共見当、直様形行同浦在番江申出、

先達て及焼失候蒸氣船乗組人数之者共ニては無之哉、

役筋より掛合之趣相達、翌十六日附役永田半次郎御用

達重松榮治郎・村上銀右衛門共召列差越、死体細々見

分等仕候処、數日相成候形にて、遺骸骨柄迄にて、面部人相等不相分候得共、衣類は常体にて、刀下緒を以上帯より掛結び付居、且小袴散々ニ相成、切々腰ニ巻付、愁傷之為体士分と致觀察懷中相披申候処、鼻紙入之内江大田小平次と書記候紙札七枚、外二同人江被相渡候御書付一通有之、未墨色も不相替致分明慥成証拠も有之、当人江別条無之形ニ相見得申候、然処最初見当候者共江猶又承合候処、右流寄候場所より青濱之沖蒸氣船沈場之間、海上差渡し凡七里余も相隔候歟、左候は一旦洋中江死体払出、海底何ぞ江掛り沈居候を、同十五日北東風にて海面吹荒候故、浪ニ巻れ地方江打寄たる共にては無之哉浦人共評議仕候、依て死体取置方ニ付ては、先々通田之浦真楽寺無常塔同所ニ葬置申度、其筋役々江曳合候処、田之浦江は、当分瘡瘡致流行候折柄ニ付、纒之村内他所より死骸持入候儀、畢竟愚昧之浦人共忌避色々苦情筋申立、段々人氣差障候廉も有之、何卒大久保濱流寄候場所江葬置可與旨無余義申承、勿論田之浦真楽と申ても、山之打越にて、汐干之時は浜辺より致通融、六七町程も可有之哉、格別遠方にも無之候得共、前条担越候儀頻ニ相拒無致方慮其意、其

場之墓所見分仕候処、右流寄候渚より式丁位相隔、山手江引上り、浦人共印塔場之傍藪原四五枚敷難払、無常地ニ借受、諸事は迄之通杉箱等相求、入棺為致結縁ニ付ては、一ヶ寺ニ四置候方、後年ニ至り可宜哉奉存候付、田之浦真楽寺住持性空江引導相頼、同夜五ツ時分致内葬、私付役并御用達兩人、問屋和泉屋三九郎等召列野辺致見送、跡取始抹旁堅固ニ取計、且卒都婆後江為後証姓名等書記置申候、且又別紙人相書通刀巻本懷中入一ツ金子所持品等江致封印、惣て親類共江差向送越置申候間、此段申上候、以上、

但別紙人相書并右取置方立携候役々浦夫人數、御用達共より差出候通御座候間、銘々式通相添差上申候、

小倉滯船

唐物締横目

子五月三日

土持平八

田畑平之丞殿

市來正之丞殿

三〇〇ノ一

小倉在勤土持平八報告前二記シタル重野カ報告ト大同小異

此節動靜等風評追々承合、去廿日附を以申置通にて、其後格別相変承得候儀無之、始終雜説紛々之形にて、突留慥成儀相分不申、然処先達て下之關伊兵衛、山口城下より諸所承合候儀御座候得共、虚実不分明之廉も有之、又々押返長府より山口諸所相掛、商人之姿ニ紛入、探索方仕候様申諭置候間、後日相分次第尚亦可申上候得共、先是迄承得候形行左条ニ申上候、

一先達て、幕役より萩様御大身方江御用召之御奉書到來、毛利九郎太江上坂被仰付候処断申出、直様同人押隠居被仰付、折角御評議之央、水戸様より為御使者、上下式拾七八人三田尻江致着、子細不相分候へ共、御召一条（山口県）、（山口県）之儀共ニては無之哉致風評、夫より御上坂之処御延引と申事にて、今度筑前様御下国ニ付、大膳大夫様御父子江御面会之上御示談之御訳筋有之、右御都合振ニより、御大身御上坂可相成欵、或は当月宇佐八幡宮江御旧例之奉幣使御下向之御賦ニ付、右御通行之節御待設、何欵御歎願之御訳有之、夫迄は御上坂御見合相成候御評決之哉ニも取沙汰有之、是以未突留たる儀は不相分、左候て筑前様事先月廿日小郡（山口県）

御着にて、中二日之御逗留、大膳大夫様御父子江御面会（筑前候、毛利家へ面会云々ハ、於京師申立シタル八前ニ記スルガ如シ）被為在、御談合振至極御機密之御訳柄と被伺、御内情之程容易ニ分兼申候、併是迄国内秘事仕候儀共洩易く、畢竟諸家之浪士或は凡下体取集之奇兵隊、剽軽之者共而已にて、追々奔走之者有之故、何ぞ付雜説諸所江流れ入乱候糸口を以、引出候道も可有之哉、段々品を替諸方手を付置申候間、

一先達て三條美殿一列、公卿之面々下之關諸所台場炮撃（筑前候、毛利家へ面会云々ハ、於京師申立シタル八前ニ記スルガ如シ）、（筑前候、毛利家へ面会云々ハ、於京師申立シタル八前ニ記スルガ如シ）被為在、御談合振至極御機密之御訳柄と被伺、御内情之程容易ニ分兼申候、併是迄国内秘事仕候儀共洩易く、畢竟諸家之浪士或は凡下体取集之奇兵隊、剽軽之者共而已にて、追々奔走之者有之故、何ぞ付雜説諸所江流れ入乱候糸口を以、引出候道も可有之哉、段々品を替諸方手を付置申候間、

但筑前様御通行（京師ヨリ福岡ノ路、次長防通行ヲ云フ）ニ付、藝州国境迄萩様使番惣頭にて、上下三拾人、小銃隊切火繩にて警固之武士被召附、小郡駅迄御見送、又々同所より馬關迄之間同断、左候て惣御供上下不残御酒肴御饗応有之、御会釈向至て御丁寧之由、

一先達て三條美殿一列、公卿之面々下之關諸所台場炮撃（筑前候、毛利家へ面会云々ハ、於京師申立シタル八前ニ記スルガ如シ）、（筑前候、毛利家へ面会云々ハ、於京師申立シタル八前ニ記スルガ如シ）被為在、御談合振至極御機密之御訳柄と被伺、御内情之程容易ニ分兼申候、併是迄国内秘事仕候儀共洩易く、畢竟諸家之浪士或は凡下体取集之奇兵隊、剽軽之者共而已にて、追々奔走之者有之故、何ぞ付雜説諸所江流れ入乱候糸口を以、引出候道も可有之哉、段々品を替諸方手を付置申候間、

早々山口江御申越相成、三條殿警固八拾人余之手廻ニ

て、御遺骸御迎として、同廿七日下之關江御発足、昨日山口之様御廻棺相成、彼表ニおひて御葬式有之御内定と申事ニ御座候、併弥昨<sub>レ</sub>日御立有之候哉、中途御行列立等之次第、未今日迄相分不申候得共、御病死之儀は相変無之由、

一長藩并浪士共事、追々申上候通、渠等之徒党各国差廻、就中京・大坂表之動静始終相伺、勿論肥前表、長崎筋江為主用通行、駅々人馬繼立罷通候者追々見懸、右は第一、外夷船聞合<sub>米・仏・英・蘭長州へ俄</sub>入合<sub>探訪ヲ云フナラン</sub>と相見得申候、然処此三五日下之關取沙汰ニは、近々既夷賊軍艦襲来と申觸し、商人共家財銘々遠在江持運、且山口より追々早打にて人勢繰出、商儀区々之形ニ御座候、此内之世評ニは、二月十五日ヲ限り夫より入寇不致候は参らすとの風説も先頃より相絶、一旦人数減少之賦にて、三田尻之兵卒曳取相成場合之処、先月中旬頃より幕命にて諸侯より御人数被差向との説起り、内心は不相分候得共、表ニは弥奮発激烈之勢ひと相見得、然折柄先日筑前様御通行已来、再夷船参るの説生れ、其風評何方より流込候哉不相分、左候ば前段御征罰之評ヲ夷人江表したる事共にては無之哉、虚実承合候得共何

れかいづれ兩件其筋と見居兼申候、併先方今之形容夷船ニ向候形ニ取沙汰仕候、左候ば長崎より洩越候歟、頗奇兵隊之衆儀近頃承るニは、不遠賊船渡来ニ付、長藩諸家之浪士ト交を結、

皇国之御為ヲ存、国家ヲ捨、攘夷之道を開んと尽力、炮戦せし時ニ臨、小倉藩去夏時分之如く、夷船江薪水等送り候ば、魚ニ水之勢ひを得候、増て傍觀ニ打過候ば、仮令夷賊と炮戦央たりとも、機ニ乘し、則彦島出勢之征兵三百人を押寄、追々千人余之奇兵を以取囲、城方江差向、火矢ヲ飛し、類火煙ニ紛切入候ば、風前之塵を払ふよりも心易く、手も無之儀と奸策いたし、小倉藩も其説風ニ致伝承、仰天之為体、勿論先達て長州御征罰<sub>之儀</sub>之御内命被仰渡候てより、俄ニ籠城之用意専と心得、當時外堀等土揚げいたし、左候て城擲外廻之作事、日々太粧之形ニ相見得候付、内々承合候処、万一諸侯より此表御出勢之儀共、防長江響合候ば驚破、渠等共田之浦より門司浦大里之間江押渡、要地ヲ踏へ候ニは別条無之、仮令其時機ニ至り、小藩之徵兵を以先鋒血戦之術無之、依て守城防禦之策ヲ大要と心得、十五日と廿日が間、必死防戦仕候ば、其内諸侯之御援

兵追々駈集可申哉と、一事ニ評儀相約候由にて、外ニ全策略無之段役筋より承届申候、

一吉川監物事、家来末々ニ至り萩様當御政事ニ致同意候哉否之儀共、去秋之比よりは迄、段々渠か内存之程探索仕候処、弥隔心之形ニ相見得、勿論大膳様より再三御使者被差立候節々、病氣と相唱始終面談不致、尤同人事折角

公武御合体之道致理解、去夏中山侍從殿来着之時分ニも、大膳大夫様御父子江屢諫言いたしたる儀共為有之由候得共、益田右衛門佐始一味列藩之輩傍より、勤王慷慨之暴論を以相拒候処、一己之宿意不相遂、御信用無之、依て自家之陣屋馬關江出来候を悉く取除、出勢惣て曳取、夫より近比迄は音信相絶たる形ニ相見得候処、如何様監物深意之訳も可有之歟、先月中旬比より御加勢として、凡七拾人出勢、主将名前等未相分候得共、關内西谷寺致陣所ニ、左候て前田と壇之浦との間江、台場老ヶ所築方被仰付、自金を以相勤候付ては、出勢之者共飯米・薪等ニ至迄、惣て岩國より差次相成候由、然ニ監物内情之儀は不相分候得共、当座御会釈向迄之事共ニては無之候哉との旨、萩藩中よりも見疑

ヲ相掛候形にて、奇兵隊等江は勿論、其外屏藩江取会候儀共曾て無之由、

一石川濱田龜井隱岐守様より為御援兵、五十人山口表江御出勢、且又当分藝州境小瀬川口江、萩様より炮台御築方有之、右御加勢夫八拾人被差出、左候て毎月一兩度ツ、隱岐守様より山口江為御見舞御參殿有之、至て御親ミ厚く、依ては先年来何ぞ御所縁も可有之哉、承合候処、十五ヶ年跡濱田之御城御焼失にて、武士小路市中不残及類火、数多之死人等有之、其節萩様より御米三千表・鎧五拾領、其外御番所備付用之武器類被進候儀共有之、勿論御領分之内、五穀無多事年々御払米相成、右旁之御訳柄を以、前条通御会釈宜敷形ニ相見得申候、

一先月廿日比、前田村台場堅之奇兵隊之内、名前不相分候得共、年比廿計之者、同所大庄屋之娘江兼て致懸想、追々馴染合、密通之段致露顯候を奇兵隊共聞伝、役筋等之指揮も不受、而三人申合詰腹為切、終ニ死体兵刃江担越、スタく切試ニ劔、右之首途中江晒し、合手(相)之女髪毛雉、行状不宜者にて、此通と申事を大庄屋兩親江申、送届候処、親類より遠島願出候儀共有之、又

或時下之關商人共而三人相會、酒肴取難し相給候中ニ、一人致酒狂候者を不意ニ奇兵隊共而三人列ニて通掛、無体ニ町家江踏入、子細も不聞入直様一人之首搔落、長府領高札場江持越、晒者いたし、尤右式取締ニ付ては、長府目附其外役々三拾人程混より出張、兼て右体之者は手を付置、糺明之上夫々役筋より取捌相成候風格之処、奇兵隊共政事迄立携候儀、役々不納得ニて、右兩件より段々互ニ毛ヲ曳キ疵ヲ求、双方非分申争、依て只今御両家御役々御評議区々之形ニて、右而已ならず様々異論差發、軍陣之法令不被行、不遠目前ニ味方之戦争曳起可申哉、上下懸念ニ存候者も段々有之由、右通御座候、以上、

小倉滯船

唐物締横目

子五月三日

土持平八

御家老座

奥掛書役勤

田畑平之丞殿

市來正之丞殿

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

此探訪ハ前ニ記シタル重野安縁ガ報告ト、大同小異アリト雖モ、

福岡侯立寄り云々ハ、重野ガ報告ニ見ス、○福岡侯カ京師ニ於テ、橋公及ヒ閣老ト密議シ、其主義専ラ恭順ヲ勸ムルニアリト、然ルニ大膳大夫殿父子ニ於テハ、承服セラレタリト雖トモ、家臣等取テ服セサリシト云フ、而シテ家臣等ハ、大膳大夫父子・三条実美等、上京允許ノ紹介尽力アランコトヲ頻願セシガ故、福岡侯頗ル困却セラレタリトナン、

### 三〇一 五月初旬洛中ノ形況報告

一 京都ニハ中国商人ト申者過分有之、右商人ヨリ京地ノ様子逐一相通申候哉、長洲へ巨細相知レ申候由、尤姿ヲ替へ京地へ入込候分ハ、右商人共ノ手ニ引合、何レヘカニ忍居ルト申風聞御座候、乍然慥ニ是ト見届タルモノハ無御座候へ共、頻リニ風聞ハ致候、尤モ入口々々御固メ所モ、帯刀人ノ外御改無之事故、商人杯ニ姿ヲ替罷通ル儀ハ差向ニ御座候、

一天龍寺ノ儀ハ表門柱へ長州旅宿ト書キ、大キナル板札打付有之、寺内ニ小屋向七八ヶ所其俣ニ相成居申候、昨年菊川大拂小松公へ引移リ、後ハ一人モ詰居候モノ御座ナク候、

一 旅宿札ノ儀ハ于今小屋向相掛居、其上方丈ハ申ニ不及、

寺中迄昨年之成リニテ、借請ニ相成候故、宿札ハ其俣ト申事ニ御座候、私寺内へ入込ミ、方丈ヨリ寺中迄相索リ候へトモ、一人モ詰居候様子相見へ不申候、

一寺内ノ者申候ニハ、是非近々御登御登リトハ大膳大夫父子ヲ云フ平、又他ノ長人ヲ云フ平

ト申事ニ御座候得共、ドウゾ止メニ成ルトヨヒガト申事ニ御座候、其段押テ相尋申候処、止宿中藩士共甚以不行儀ニテ、一統迷惑致ト申事、尤門前茶店モ同様ノ事申居候、

一近々ヨリ屋敷造営有之由ニテ、五六日已前ヨリ上嵯峨住居ノコビキコビキハ木挽五六人雇入、伏見へ召連候由、京屋敷カ伏見屋敷カ其所相分リ不申候、

一七八日前、錦小路殿分領徳七郎の一人ハ病死ノ頃ナラン乎此時御玄関へ士一人参リ案内ヲ乞候故、取次ノ者出合候処、右士小声ニテ長藩ノ由ニテ、国許ニテ殿様ニモ御無事ニ被為在候間、御安心可被成様、尤モ当御殿内御無事ニ御座候哉、国

許へ御左右申上度トノ事ニ御座候由、書面モ無之口上而已ノ由、奉公人ノ下女宿へ下リ相咄申候事ニ、懺成ル事ニ御座候、下女ハ六條寺内茶屋ノ娘ニ御座候、一川原町屋敷長州藩邸ノ儀ハ、用心堅固ニ御座候、天龍寺同様ニハ参リ兼候付、何レ近々懺ナル儀承届可申上候、

右風聞申上候、

五月四日

伴 左衛門橋口矢郎 変名

三〇二 久光公御着城

五月八日 国父公御着城、太守公ハ前日御乗切ニテ、

加治木迄御奉迎、同夜御帰城、久光公ハ一本ニ備生トアリ加治木島津

又八郎殿宝久邸ニ御一泊、本日未ノ刻二ノ丸へ御着城、

依テ御一門家并大身分、其他諸士・諸組・与力ニ至ル迄

登城、席々ニ於テ御家老ニ謁シ、御一門家及ヒ国老・

若年寄・大目付等ハ、大奥へ罷通り御祝儀申上ル、

三〇三 新納嘉藤次ヨリ中濱万次郎へ照会

江川太郎左衛門組御鉄砲方手附

中濱万次郎殿

右ハ蒸氣船運用高其外教授之為、三ヶ年間御貧人奉願候様達テ申越候、右ハ是迄相心得居者共惣テ、旧臘於長州沖ニ、長崎製鉄所拜借蒸氣船焼失之節行衛相知レ不申、然ル所追々蒸氣船相求候得共、差テ熟練之者無之、運用相整程之事ニテ、解逅所持仕候得共、急事御用向相弁不申候、別テ心配仕申候、就テハ当時御用繁之御

央奉恐入候得共、前件之次第御汲留、出格之御評議ヲ以何卒御聞濟被成下候様、偏ニ奉願上候、以上、

松平修理大夫内

五月九日

新納嘉藤次

### 三〇四 御城下各所礮台遠擊操練

五月十日御城下各所礮台遠擊操練催サレ、太守公祇園礮台ニ御出馬アラセラレタリ、

### 三〇五 五月十一日ヲ以テ井上大和報告

副啓

御立後（中山宮元延也）即議伝両職之家々へ投書、尹宮・陽明

家之御事も為有之由、又今之国事掛御免ニテ、九條・

鷹司等へ被仰付可然との事、然処右ニ就て欵一昨日有

栖川御父子（德仁親王）・一條様（実良）・九條大納言（道孝）・鷹司大納言（輔政）へ国事掛

被 仰出候、議伝之面々ハ御辞職御願立、是より先 尹

宮 陽明家も御辞職之事有之候得とも、無名之投書ニ付

御辞職トハ余御残念之御事ト、（光親王）山階宮様より御差留

ニ相成申候、 官方御初是迄之国事掛へハ昨日より十

人ツ、交代、一橋・會津・諸司代之三家より守衛被差

出候、去月廿九日 將軍參 内之筈候処、浪士相集り

候風説有之、參 内延引ニ相成、 尹宮ニハ早々御退

出、 陽明家御召ニ相成候へとも、御父子とも御不參、

尹宮ハ夫より御所勞于今御參 内なし、 山階宮ニも

其日暮時分御退出、御用心ニテ御馬ト申事故笑てのミ

も不被居、御列外御供たる心掛歩行仕候へとも、あや

しき者一人も罷居不申、誠ニ嘆息之至ニ御座候、

將軍も七日ニ御発駕、一橋ニも一昨日より攝海巡見の

ため下坂ト申事、其外小路（小路ハ巷路ノ誤ナルベシ）ノ取締旁日々相交申

候、右申上度乱筆真平御有免可被下候、以上、

五月十一日

大和井上

一蔵様大久保

貴下

此ニ記ス投書ノ趣ハ、尹宮

天位ヲ奪ハント逆謀年久シク、之ヲ輔ケテ私慾ヲ恣ニセントス

ルハ、近衛家ヲ初メ二三ノ公卿或ハ薩・會・越ノ三藩ニアリト記

シタリト云フ、是ヨリシテ民間ニ於テハ、會・越・薩三藩ヲ憎ム

コト甚シク、長藩ヲ望ムコト慈母ノ如シ、○此際洛中各所ニ投書

日トシテナキハナシ、從テ訛言囂々、僉人声ヲ吞ミ今ヤ砲声轟ク

ナラント、恟々トシテ避乱ノ準備ニ外ナカリシト云フ、

（會津忠承氏所藏本にて校訂）



三〇六 五月十二日ヲ以テ在京西郷ヨリ大久保へ

書牘

中将様益御機嫌能細嶋御光着被遊候段被仰越、御互恐  
 悦此御事ニ御座候、陳ハ御当地京都ヲ之形勢日二月ニ衰  
 へ立候次第ニ御座候、堂上方ニおひて例之驚怖之御病  
 症相起暴客之畏れ甚敷、稍暴論行れ候半欵と申勢ニ御  
 座候、陽明殿ニおひてハ御父子様共、守衛人数之内より  
 御番相勤呉候様と之御事にて、両御殿江每晚御人数此  
 本藩士一昼夜交代ニ  
 テ十人ツ、宿直セリ  
 宿直  
 スニおひてハ、尚更之御恐れ悪評も甚敷事ニ御座候、  
 武田武田耕雲  
 斎ヲ云フ一条ニ付てハ、先便ニも申上越候通、伊丹大  
 キニ被悪候塩梅にて、申さハ小児の老婆を失ひ候と申  
 す御心持にて、其怨ハ皆々伊丹ニ参り、迎も仕やう無御  
 座処より、引退候事ニ成立申候、尤幕府より頻ニ相悪  
 ミ、刺客ニても行候半欵と申程之危ニ迫候様子と申評  
 判も有之、彼も些弱り立候塩梅ニ御座候、武田逃出候  
 より行衛不相分、坊主ニ相成たるとの趣ニ御座候処、近  
 来承候へハ、會津屋敷江潜匿之哉ニ世評いたす事ニ御  
 座候、會藩薄情の次第ニハ右等之手数致居候て、此御方

様御屋敷江ハ是非行末御結合いたし置度との事にて、  
 出會いたし呉候様との儀故、小松大夫を初私共五六人  
 出張候処、有志会にてハ全無之、俗会之上通と申塩梅  
 ニ御座候、御笑察可被下候、○土州之儀此挙ニ乘し、  
 大発可致との世評有之候処、迎も大挙出来候様子ニ無  
 之、今で持張候処さへ六ヶ敷勢ニ御座候由、長州ハ勿  
 論暴客輩も、近来一橋を頻ニ疑ひ出し、異儀紛々之様  
 子ニ被相聞申候、段々作略之次第も相頭れ、水人杯ハ  
 籠絡いたされ候姿にて、決て攘夷之腹ニ無之、別ニ一  
 物有之一物有之云々ハ、當時ノ街説ニ一橋公ハ將軍職候半、其の趣ニ  
 ニ望アリテ謀ル処アリト、此説ヲ指シタル乎  
 て一向探索ニ打掛候由ニ被相聞申候、○大樹公ニも去  
 ル七日御下坂ニ相成、三拾日位ハ浪花城ニ御滞在と申  
 評判ニ御座候、夫より関東へ御帰城相成候ハ、必ス  
 夷船長州江参り可申と、勝麟太郎も相咄候由、長州破  
 立候ハ、決て浪花江突掛、開港之説を起候半との咄  
 同人申居候由ニ御座候、麟太郎ニも近来之処、尚更幕吏  
 より被忌候由ニ御座候、○閑老水野江是非滞 京いた  
 し候様  
 朝廷より被 仰出候処、水野ニは是非大樹公江付添不参  
 候てハ不相濟候間、稻葉候被為残置との事にて、淀滞

京之賦ニ御座候由、水野と一橋ハ余程合居候様子ニ御

座候幕吏中紛転事情アリ、後ニ詳カナリ ○近比御座敷御座敷トハ藩邸ノ通唱ナリ之悪評甚敷

起り、畢竟幕府幕府ノミニ非ラス、長藩及ヒより出候事多く有

之向ニ被相聞申候、上海ニおひて茶等之品を以、盛ニ交

易相始候当時上海等ノ海外ニ於テ貿易開タキルコト曾テアルコトナシ、商人等長崎ニ於テ充販スルノミナリキ 杯との説

を申触し候由、是等皆々幕奸之隠策と相見得申候、当

分ニ相成候てハ、御遺策國父公御遺京ノ時西郷等へ之通頓と手

ヲ引、岡崎之調練等追々有之、色々探索ニ心を用ひ候

計ニ御座候処、暴輩も至極疑を生し、挙動不相分、深

く吟味いたす様子ニ御座候、当時態にてハ迎も一家中

一体いたし居候訳無之、議論紛々ニ可有之候処、頓と

異議無之、不思議之事と且恐れ且疑迷之由と被相聞申

候、長州より頻ニ合せ度長州ヨリ頻リニ合せ度云々、彼ヨリ本藩ト合從連衡セントスルノ意ナルベシと

の腹と相見得申候得共、手之付様無之塩梅ニ御座候、

暴客も參候得共、最初より因循を出しニいたし、何も

是で出来不申との返答にて押通シ居候故、議論迫掛て

參兼候次第ニ御座候、只今之暴客と申もおかしなもの

ニ御座候、来月とも相成候ハ、異船長州江參候半欵、

余りニ威張居候て、一面の悪き者共ニ御座候異船長州へ參候半云々、四分國連衡侵入ノ説アルヲ云フ、果シテ八月英、(行脱丸)故、雲を見候て暴威衰へ

候半と相考居申候、筑後久留米藩之応援も勢ひ弱候との

風評ニ御座候、始終根の居らぬ事計ニ御座候故、持張

て通られぬ様子ニ被相聞申候、此旨風説之俟申上候

間、御推考可被下候、恐々謹言、

大嶋吉之助西郷旧名

五月十二日

大久保一藏様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

開港以來長崎等ノ開港場ニ於テ、日本商人ト貿易盛ニシテ、争フ

テ長崎へ出タリ、本藩モ浜崎太平洋如キノ買入ハ盛ニ貿易セリ、

此時未タ上海等ニ渡航シ交易スルモノナシ、然ルニ記ス所ハ全ク

道路ノ説ナルヤ疑ナシ、其他記ス所ハ僉其実ヲ得タル者ナリ、

三〇七 五月十二日小松帯刀京師ノ事情大久保一

藏へ報告

御立後御立後トハ、久光公御備國後ヲ云フ 当地之形勢去ル三日迄之形行は、

先便申上越候通、其後之形行左ニ申越候、

一何そ別段相替候事ハ無之候、先無事ニ御座候、乍毎流

説等は不相替御座候、申上程之義は無之候、

一大樹公去ル七日早天御出立にて下坂ニ相成申候、日數

三十日計は浪花滞留にて、海岸見分等有之由、左候て

蒸気より御帰府之由、橋公橋公トハ一橋公ヲ云フも八日ニ下坂相

成候よし、何御用と申事ハ存不申候、定て海岸巡察

大樹公江御伺等ニて可有之と相考申候、

一閣老水野様滞京ニ相成候段、先便申上置候得共、水野

ハ御供ニて淀淀トハ淀川ヲ云フ残りニ相成申候由、

一大樹公

朝廷江御請書跡便より差上可申段、先便より申上候、

左候得共、右は大島大島トハ西郷ヲ云フより差上申候間別段不差

越候、九門外柵出来之図面ハ、内府公近衛忠より拜借

写取差上申候図面は三二〇・三二頁にあり間、御差上可被成候、未取掛りニは

不相成候得共、御治定為相成哉ニ被聞申候、乍併

近衛両御所様は御不同意之由承知仕候、二條様折角

御取締ニ可宜と一橋辺と御談判有之候事ニ被伺申候、

一尹宮之処三日便ニ申上候通、其後相替候事も無之、于

今御不参之様ニ被伺申候、竹下武田ノ誤乎彦条ニ付伊丹伊丹殿人ヲ云

も被悪候、両三日は不参と申事ニ御座候、定て引入心

得ニて候半と存申候、竹田ハ會津潜居候由ニ御座候、

先日会人ニ取会候得共、為何咄もいたし不申候、

一御屋敷中無事仕合之至御座候、  
一宮之城宮之城トハ圖書久治君ヲ云フニも御煩末寸切と御快気無之、御痛

ミハ御快由候得共、御歩行等被遊候義、御出来不被成

候間、御引移も不調候、御駕籠へ被召候義共御出来兼

故、彼之御方ニて御養生ニ御座候、しかしもふハ御宜

敷方ニ御向被遊候間、近々之内ニは御引移も被相調候

半と奉存候間、御懸念被遊義ニは無之候國父公御退京ノ後ハ二本松藩邸ニ引移ラ

方トハ旅館ヲ云フ、彼之御

一昨日は岡崎岡崎トハ岡崎村藩邸ヲ云フニて調練有之、我々共ニも出張早

朝より昼迄ニ相仕廻候、

一久留米御船彦条御挨拶之義、大坂へ申遣し置候へとも、

只今家老有馬監物参り申候付、当人江細々申述置申候

間、左様御承知可被成候、

一江戸表一騒之義筑波山ハ本戸浪士籠居セシヲ云フ乎も巨細相分不申、取々之

説ニて突留候事兼候間、儘ニ承出次第ニは早々可申

上候、長引合長引合トハ長藩ヲ云フ之事ニは相違無之向ニ御座候、

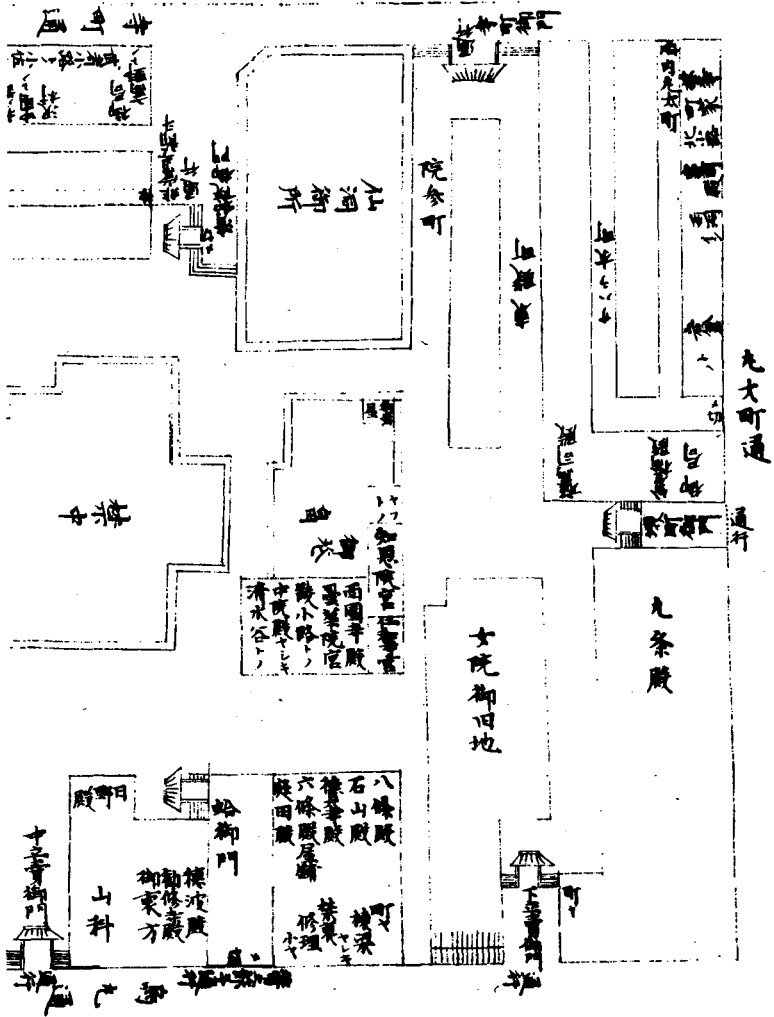
桂小五郎本戸孝允同名罷越候義承申候、爰元外方之義も細々手

を付置候間、追々可申上候、岩下下方より一騒彦条之一

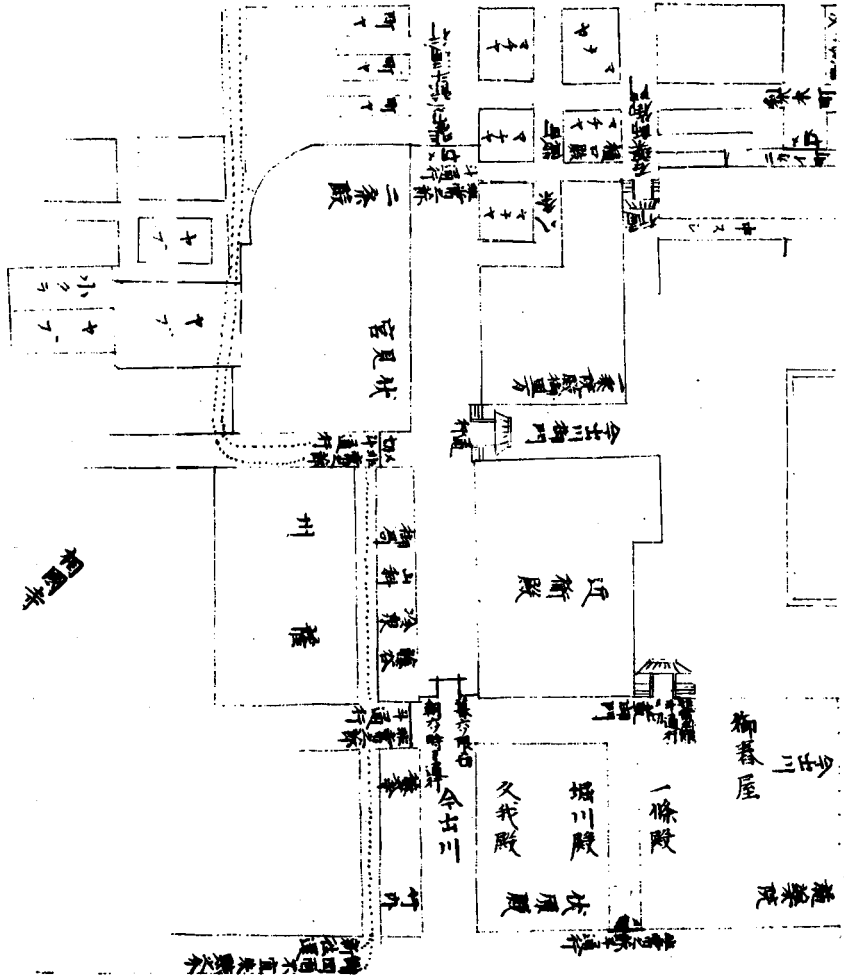
鉤後ニ記差越候付、差上申候、

一 大脇彌兵衛・倉野直右衛門・國分次郎兵衛三人、長沼

長沼了藏方江入塾被仰付置候得共、先生と少々議論いたし、  
とふも夫成召置候てハをかしな者故、大島西郷カ一名採談判



元治元年 (1864)



之上、江戸表江被差遣候方可然と之事にて奉伺筈候得共、差掛之事故、其通申渡申候間、其段御申上置可被成候、此方之人数之説何そあしき事ニ無之候間、其通取計申候、

右ヶ条書を以申越候条、而御前兩御前トハ太守  
國父カラ云フ江御申上候義共、可然様御取計可被成候、此旨御内用を以申越候、已上、

五月十二日

小松帯刀藤清  
島津忠承氏所藏本にて校訂

### 三〇八 長州征討軍隊操練

五月十五日操練場ニ於テ、長州征討出軍奉命ノ大小砲隊調練ヲ催サレタリ、朝ヨリ大雨車軸ヲ流スカ如ク、瞬時モ熄ミ間ナシ、然レトモ実場試験ノ為メナリトテ厭ハズ操練セリ、此時火繩銃携帯ノモノアリシカ、一発モ放ツコト能ハス、雷管機銃ハ其憂ナカリシカハ、是ヨリシテ雷管機改制スルコト、ナレリ、此日御名代島津忠盛周防殿初諸役者モ僉出場セリ、

### 三〇九 木場傳内ヨリ大久保一蔵江書翰

大久保一蔵様

木場傳内

要用

其後御不沙汰申上候処、愈御壯健奉賀壽候、別紙申上候通、大坂中之混雜御遠察可被下、此勢ひを醸出し候ハ全ク此節上納金より相起り候事之様被察申候、上納金被仰出候以後出銀相掛り候富家とも都て普請等取止候処、大工・日用左官・畳屋・立具や等仕事無之、毎日長町乞食仲間へ落候もの引もきらすとの事ハ早く相聞得、何致事ニ可相成と咄居候処、案中此事ニ相成候、唯今ハ大坂中一軒も米や職いたし候もの無之、錢のあるものも大ニ込居候由御座候処、今日御救之達方いたし候処、歎喜踊躍無申計由御座候、これより諸屋舗も勿論富家ともニも救相始メ可申、志人ニ付米三升も被成下候へハ、過分之由町役共申出候間及算面候処、都合人数式千人余にて七拾石ほとニ相及申候、就てハ何済之上取行可申筈候得とも、今日が明日ニ延候てハ倍々の御救ニても詮薄キ機會にて、独断仕候間、其許御都合向宜様御合御取計可被下候、長防等之儀も何も其後承り得不申、当分之所にてハ長州所でハ無之様被存申候、取静として召捕候へハ、殺さるゝ方かよいの、牢舎して御賄ニあふか楽ぢやのと悪口申シ、或ハ此張本人ハ御城の内ニ御座なさるゝなと、も申候由、最早世間ニ

てハ上納金御免、其代りニ窮民取救被仰付候など、  
既に申達も為有之趣ニ申居候由御座候、巷説禿筆のお  
よふ丈ニ無御座候間、闇筆いたし申候、半鐘どの・達  
磨さんなどへよろしう御伝言奉頼候、私ニハ夜な〜  
ハなきてのミ明し申候、其御元ハワらうなど御座候、  
かしく、

(慶応二年九)

五月十六日

清生

利通君

玉机下

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

三二〇 木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰

(兵庫窮民云々)

大久保一蔵殿

木場傳内

先達てより兵庫湊川江在町之窮民共屯集、同所米屋職  
其外富家之者共店先打潰し、三拾軒余相毀候処、警衛  
人数取静として空砲相発候処、空発之儀を致推察、いよ  
〜狼藉相募候ニ付、無是非夷丸にて六七人打倒し、手  
負數十人生捕等も有之、夫にて先相静候へとも、夜分ニ  
ハ諸所江屯集、全ク静謐ト申訳ニも不至、其後西ノ宮、  
(兵庫真)  
伊丹・池田等ニも相始り、去ル十三日頃より、大坂近在  
福嶋・九條・難波村等一時ニ蜂起、十三日ニハ、大坂

中米屋江押入、最初ハ数百人位も差出シ候振りにて、  
銘々手計りにて持参之入物一盃押取、数百人之男女東  
西江奔走、米屋々々江闕込、売米之有限りハ一日ニ奪  
取、右往左往之混雜何共乱世之姿無是非世振ニ御座候、  
依之盜賊方勿論巡邏等より取静方いたし、乍漸相静候  
へとも、又住吉・堺へも相始り候由、右狼藉にて大坂  
中之米屋職一日ニ閉店いたし、是よりハ一日買之米ニ  
て生命を繋ぎ候、良民とも、心ならずも悪事をたくミ  
候様可罷成や、最早世の中もかくよと、存候計りニ御  
座候、然処御屋鋪近辺之貧民ともにも、御屋鋪江御救  
可願出哉之内評もいたし候哉ニ相聞得申候間、彼方よ  
り先をこされ候てハ取救候詮も薄き事御座候間、上中  
下御屋鋪掛り之町内并南御屋鋪百間町御屋鋪掛り之窮  
民共江、一人ニ付五升位之救米差出候筈致吟味、今日  
人数取調方等申付置申候間、相知レ次第施行いたし可  
申間、御家老衆江被仰上置被下候儀共、可然御取計被  
下度、此段申上候、以上、

(慶応二年九)

五月十六日

大久保一蔵殿

木場傳内

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

### 三二一 江戸詰藩吏年限縮小違書

江戸詰之儀諸御役人ヲ始一身者迄モ、以前ハ一ヶ年詰之処、文化度ヨリ当分通二ヶ年詰ニテ交代被仰付来候、然処当時ノ詰人数格別相越、殊更諸色高料ニテ、詰居候面々難渋之由相聞得候付、御目相掛事ニ候へ共、旁別段之御吟味ヲ以前ニ被復、来丑春ヨリ以来一ヶ年詰ニ交代被仰付候、乍併依御役場不連続カ、又ハ交代線、故障之向ハ形行次第可被仰付旨被仰出候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可被申渡候、

五月十七日

攝津(悉)「喜入」

### 三二二 小倉滞在園田探訪報告

長防当分之形行承合申候処、去ル十五日より当廿日比迄ニ相掛、外国人申合、幕府并御国様より之征兵多人數乗合、軍艦廿七艘程差向可相成との由、長崎又は對州江兼て手付相成候者共より、去十日比より追々早打を以注進相成、夫故山口表之人數下之關江出張、神社之旗或は町家之昇都て取揚、右は異船襲来候節谷合等江相建、多人數群集之姿ニ奇術を用、右近辺江地雷火數

多取拵、陸戦用意は勿論、昼夜台場等江出張、且町家之儀は病人老若は勿論、家財等も当用之品迄残置、其余は都て遠村江為持運、左候て元山崎江も当分台場築立最中にて、國中備向日々嚴重相成、一統今哉遅しと待設候由、専取沙汰仕候得共、只今迄は其儀も無之、然共長崎表之模様も有之、決て近々可致侵入は相違無之向ニ承得申候間、此段御届申上候、以上、

但小倉領大里江先年より久留米様御船困場地面御借

入相成、同所江去夏時分正親町桑安正親町殿長州へ下向  
殿へ泊セラ殿御来着之砌より炮台等取拵、久留米よ

り上下式百人余出張、追々致交代、近比ニ至り百

五拾人程出勢相成候処、去十二日より同十七日迄

ニ相掛都て曳払、然ニ是迄備付之大炮凡十二三挺

有之、右は如何様俄ニ取除候儀不相叶候歎、一旦

預置との事にて、未其俛有之、左候て当分以前之

通御屋敷在番一人頭役にて、御船番人等より末々

水夫共之家部、纔ニ拾軒程も有之候半、身輕者共

と相見得申候、依ては此節柄引取相成候趣意何様

候歎、旁之次第未相分不申候、

小倉滞在



子五月十八日

園田彦左衛門

(以下包紙)

小倉滯在

御家老座

御裁許掛勤

奥掛書役勤

園田彦左衛門

田畑平之丞殿

市來正之丞殿

(島津忠家氏所藏本にて校訂)

三三三 子五月廿一日天神橋へ張紙

逆賊薩摩三郎、會津肥後守・越前春嶽・宇和島春山ト  
 結ヒ、井伊・安藤如キ酒井雅楽・水野和泉ヲカタラヒ、  
 大ニ天下ノ姦兇ヲ誘ヒ、モトヨリ御困体ノ事ハ思ヒモ  
 ヲラス、犬羊ニヒトシキ夷人ト、ミツく心ヲ合セ、  
 万人ノクルシミヲカマハス、精放アタ・アフラ・キヌ等海  
 中ニ取出シ、内々ニ交易ヲ専ラニシ、過ル癸丑ノトシ  
 夷人渡来ノコノカタ十二年ノ間、一日モ御タクミナク、  
 実ニ日ノ本ノ大變、上ハ伊勢大神宮ヲハシメ奉リ、御  
 代々様へ濟セラレスト、下ハ万民ノクルシミトナケカ  
 セラレ、マコトニ有カタキ 天子様ノ思召ヲ、姦術ヲ  
 モツテモツタヒナクモクラマシ奉リ、將軍家へ無道ヲ  
 ス、メ、遂ニ不忠不義ニオトシ入、正義ハ一切相フセ

キ、終ニ日ノ本ノ人ヲシテ、夷人申コトク下女下男モ  
 同様勝手次第ニ致サシメ、実ニ日ノ本立ハシマリシヨ  
 リノ大患大憂ニ付、必誓テ右姦賊トモヲコトくク誅  
 伐シ、

天子様ノ思召ヲ助ケ奉リ、將軍家ヲシテ其職分ヲ守ラ  
 シメ、三千年來ノ御困恩ニ報ヒ奉ラントス、依テ姦吏姦  
 商御困恩ヲカヘリ見心改メスンハ、一々天誅不免モノ  
 也、薩摩ヨリ内々夷人ニ渡セシ品ノ高タケ此ニシルス、

精放あた 二十四万本余

あふら 十五万丁

きぬ 十二万ノ目余

右之外姦賊トモノミツく交易セシ処シルヘカラス、

三三四 折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ脇差ヲ贈ル

(第一)

口上

御脇添一刃

右は近比龜略ニ奉存候得共進上仕候、御差添於被下は  
 別て難有仕合ニ奉存候、内実は昨年七月以來聊奉呈寸  
 志度念ニ御座候処、終不得其意、然は於京攝間も種々

配意仕候得共、同断之仕合にて誠ニ不本意ニ奉存候、就ては此一刀持合ニ任進呈仕候、余品ニ候得は些如何ニ奉存候へ共、刀劍ハ抑武門有用之器にて、殊更昨年来之配意を被思召、是非御野差ニても御用被下候得は、私夙志之程も相達義重々も難有仕合奉存候間、何卒御受用偏ニ奉願上候、恐惶拝言、

子五月廿一日

折田要藏〔年秀〕

大久保一藏様

二白、御萱堂様御病氣如何被為在候哉、昔進呈之御薬御用之上、御相応も御座候は、即差上申度奉存候間、被仰聞度奉願上候、

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

### 三二五 全上第二

毎日御精勤御安祥奉敬賀候、然は昨日は愚存之次第奉申上候処、又々只今雷音驚駭仕申候、御意之趣実ニ可奉畏管ニ御座候処、何と推考仕候ても心中安し不申、夫故失敬之筋は打捨侵貴意候、何れ近日中拝顔上御所存之訳筋奉承知可申管ニは候得共、夫迄ハ是非御膝下江被差置被下度、其節御理非ニ随、幾重ニも御請ケ可申上候、凡通常之事件ニ付、御教諭違背可仕存念は死スと

も不仕之決心ニ御座候処、此度別段寸志を表ニ至り御返却於被下は、何様之顔面を以參様可仕候哉、私心中之程あわれと御推察可被下候、仍之今日は又御使江相渡し申上候間、御膝下江被差置、近日拝顔之後、篤と奉承知度奉存候、恐々拝言、

折田要藏

五月廿三日

大久保一藏様

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

### 三二六 大坂堂島張紙

子五月廿三四日頃堂島寄場前ニ、中買之惡説書張紙致、又浪花橋へ天満組与力并同心之名前多ク認メ、罪之条認メ張紙致候へ共、右二書トモ虚説ニテ取ニ不修候ニ付認メ不申候、

惠比須三郎ハ鯛力有ル

島津三郎ハ鯛ガ無イ

右京都ニ張紙致候事、

### 三二七 江戸ニ於テ 將軍家親書ヲ以テ閣老若年

寄へ達書〔藩内布達〕

横濱鎖港之儀ハ兼テ決定ニテ申出置候処、猶今般

観旨之趣モ有之、旁以是非成功ニ不相成候テハ難相成儀ニ候、就テハ一同ニモ格別奮發致シ、武備厚可心掛

候、鎖港之用向ハ大和守川越候云云フヘ委任申付候事ニ付、一同ニモ見込之品モ候ハ、大和守ヘ可申聞候、

五月廿八日・

閣老連名添書左ノ如シ、

横濱鎖港之儀、御別紙之通被仰出、大和守ヘ御委任被成候事ニ付、万石以上以下其外末々ニ至迄見込有之族

ハ、大和守ヘ可申立候、尤武備之儀ハ尚更厚相心得、実備專ニ可被心得候、

右之趣早々不洩様可被相触候、

五月

別紙ニ通従公義被仰渡候間、早々不洩様向々ヘ可申渡也、

六月 御家老座印

三一八 在京国老小松帯刀ヨリ喜入攝津ヘ私翰

日ニ暑氣相増来候処、御而殿様御機嫌克被遊御座恐悅至極奉存候、二ニ貴所様弥御壮栄欣然奉存候、随テ私

ニモ兎哉角ト元氣在勤罷在候間、乍憚御放念可被下候、然ハ爰元之形勢ハ追々申上候通ニテ、長藩又ハ浮浪ノ

輩益々横行致シ、近頃ニハ憚ル処ナク伏・京ノ間ニ入り込ミ、様々ノ謀計ヲ以テ人氣ヲ惑シ、又ハ町家ナトニ

ハ悪業ヲモナシ候由相聞得、兎角遠カラス事ノ破レニ相違無之、又近日ノ世評ニハ、三條初脱走ノ人々長門元徳

守大兵ヲ卒ヒテ上京致ストノ趣、是ハ虚説トモ不相聞得、其外嵯峨・伏見ノ間ニハ三四千ノ人数屯ストモ申

ス事ニ候得共、夫丈ケノ人数ニハ有之間敷、現実ハ上下人足類迄千人位ノモノニ可有之ト申ス事ニ御座候、其

上彼方ノ目的ハ、尹宮中川宮・近衛家並會津、此御方、越前等ヲ追ヒ退ケステハ攘夷鎖港モ行ハストノ主意ニテ、宮並

近衛家ノ処ハ御身モ御危キ事ニ有之、此御方ニモ御在京ナラハ、其一ツ目途ニ可有之欵、會津ハ御在京故、

専ラ其目当ト相聞得候ニ付、彼藩中用心嚴重ニ致居候ト申ス事ニ御座候、其上如何様ニカ致シ、

主上ヲスカシ出シ奉リ奪ヒ奉リ、何方ヘカ御幸ナシ奉リ事ヲナサンノ策ニ相違無之、長門守上洛シテ兵威ヲ

以テオドシ謀ランノ企ト相聞得申候、依之此御方ニハ御下国前分テ被仰付候通、

禁闕ノ御守護ノミニ心ヲ用ヒ罷在候間、二千ヤ三千ノ人数ニテ上京致候トモ、見込通ニ長州

御幸ノ長州へ御幸云々、当時中國・九州辺ニテモ專唱へタルコトナク、果テ其計謀モ施シタルナラン

場ハ、決シテ為致申マシクト申合セ罷在候事ニ御座候、何分官方堂上ノ内ニ彼方ガダマシ切候方之段々有之、此ノ方々ヨリ事情直ニ相洩レ候由ニテ、

主上モ誠ニ御心配被為成候由ニ、尹宮へ御内談モ毎々被為在候由、実ニ恐入タル事ニ御座候、兎ニ角ニ遠カラス大事ニ成立可申ト覚悟ニ御座候、一橋ノ処ハ別テ御心ヲ用ラレ、毎々御召相成リ候間御召相成云々一橋公ヨリ小松ヲ召喚ル、ヲ云フ

罷出申ス事ニ御座候、偕又此内モ内々申上候通、御在京中私へ雅楽頭姫路侯様其外様トハ關ヨリモ、御預ケ老ヲ云フ

処之儀御内沙汰有之候ニ付、其段 中将國父様へ申上候処、御笑被成、夫レハ幕府力此方ノ機嫌取リニ云フ訳ナリ、此方ノ主意ハ領地ヲ弘メル等ノ利欲心ヲ以、初

初ヨリトハ壬戌春御上京ヲ云フヨリ上京等致シタルニ非ラス、

順聖公ノ御遺言尊 王ノ一筋ニアリト段々被仰聞候間、其旨一橋公並姫路侯へモ申上候処、如何ニモ御感服被成、一言モナシトノ御事御座候処、御立前猶又一橋公ヨリ重ネテ被仰聞趣ニハ、會津・桑名等モ御加増被仰付

ニ付、其上ニアル中将殿力其様被申居候テハ、於公義ニ不被相濟、

朝廷ヨリモ毎々御沙汰之趣モ有之事故、兎角分家分家トハ公御別家立ラレ不被致候テハ、ヲ云フナラン

朝幕トモニ取扱向致シ、若シ是程ノ大功アル以上ハ、御沙汰通承知被致、天下ノ人何ント云フ事モアルマシク、必ス承知被致様分テ申セトノ御事ニテ、其時仰ニ豊後日田ヲ初日向國公領公領トハ幕領ヲ云フ 一円カ、又ハ天草一

円カ、両方何レニテモ望ノ方申セトノ御事ニ御座候、右之段申上候右之段申上候トハ久松公へ言上セシヲ云フ 前同様ニ御笑被遊、分家ナトハ思ヒモ寄ラスト御取合モ無之程ノ御事故、

私ニモ其時ハ御世帯方モ御不練合ニ成立、御宝蔵御宝蔵ハ九内ニテル金庫ヲ云フモ度々御開キ相成リ、此後臨時之御入費出兵

等差見得候世振ニ候得ハ、御加増之処ニテ、御内意ニ被応可然御事ト奉存候、天草ハ肥後熊本藩以前ヨリ所念ヲ掛ケ、段々手ヲ入レ候由、日向又ハ日田ハ所念ノ方モ無之、差障モナキ様被存候旨重テ申上候処、其様強ヒテ度々被申、且會津・桑名等へ差支モアラハ、挨拶ノ為メ細島位ヲ一ヶ所預リ候ハ可然トノ御沙汰被為在候、尤モ細島ハ鹿兒島ヨリ日州路上京ノ要所ニテ、御

飯屋ニテモ被建置候ハ、便利ニ可有之トノ御事承知致シ候、其後右之段姫候・一橋公へモ申上候処御笑被成、細島位ニテハ有名無実ニ可有之、御受アルニ於テハ日田辺モ、日向御領ト一円メニ可宜ト被仰候、然レトモ先ツ細島ノ所御沙汰被下候ハ、其後私共ヨリ御内意モ可申上旨申上、左候テ御所帯方御不練合ノ趣、殊ニ多人数先年来上京為仕、又ハ前之濱戦争ノ成行入費莫大ニ御座候旨モ、両公へ委シク申上候処、夫ハ厚ク察入候事ヨリ、此様 御内沙汰モアル訳ナリ、此末万事不差支様ニアリテ、 輦下ノ御用モ不滞様ナクテハ不相濟、拾万位ノ地所ハ何時モ相当ナリトノ御咄ニテ、日田・日向・天草辺迄モ御都合可相成候間、此機会ニ御預リ置キ相成度奉存候、其後両三年モ致シ御分家ト相運ヒ候ハ可然ト奉存候、右旁篤ト御勘考被成、御都合宜敷キ折被仰上、御納得被遊候様御合被下度、何分御無欲ニ御辞退被遊ニハ込入事ニテ、御世帯向モ誠ニ懸念之至、世上ハ是ヨリ乱世ニ無相違ト奉存候間、時ヲ失ハレス御受相成候方可然、

禁闕御守衛モ、此後絶ヘス千人位ツ、ハ御出シ置キナクテ不相濟、其サへ御入費何程カモ難計、其外ノ事臨時

ノ儀ハ量ラレ不申、旁以テ可然被仰上被下度奉願候、尚追々当地之形勢可申上候、恐惶不尽、

五月廿九日

帶刀小松清殿

攝津様喜入久高

追啓、御屋敷中大無事併物前物前トハ職争前トハ謂ノ心持ニテ、守衛人数外出等モ程能為致、日々調練為致候事ニ御座候、宮公子島津圖書久治、モ別段御心懸宜シク難有事ニ御座候、乾御門ニモ人数相増シ、スハト云ハ、御屋敷ヨリ御所へ走セ付ノ手当等無手拔、一カラ十迄相調申候、何程之事到来候トモ、奪奉奪奉ラントハ長藩カヲ主上ヲ奪奉ルヲ云フレ候儀ハ此御方ノ一手ニテ、御受仕ル者モ尹宮・近衛家へハ口ヲ切り申上置候、尹宮・近衛家へモ臨時走セ付之手配モ仕置候、此段ハ被仰上置可被下候、今ノ向ニテハ彼方ノ探リ行届キ候故、粗忽ニ手出シハ不致カトモ被存候、會津モ手当ハ十分ニ行届キ申候、一橋モ同様、其外余多ノ御大名在京ニ候得共、皆風並ヲ見候ノミニ御座候、長州人モ會津ト此方ヲ離サントノ手段致候向ニ御座候、可笑次第二御座候、茲ニ記シタル小松カ書牘中、豊後国日田亦ハ日向国内ニ在ル各所ノ幕領預リ地云々、 久光公ノ御功蹟ヲ賞

セラレ、預リノ名ヲ以テ加増セラレントノ事實ハ文意ノ如シ、然ルニ 国父公固辞セラレタルハ、実ニ功名利達ヲ求メ玉フノ意ナク、全ク 順聖公ノ遺志紹述セラレ、数百年來

皇威衰頹政權將門ニ帰シ、從テ一般幕府アルヲ知り、朝廷アルヲ知ラス、剩ヘ幕府僭僭倨侈、近頃ニ至リテハ井伊直弼ヲ首メ暴吏統出、甚シキニ至リテハ、御讓位ヲモ促シ奉ラントシ、北條・足利ノ惡逆モ管ナラサルノ形勢顯ハレタルカ故、 久光公奮然家國ヲ顧ミ玉ハス、身ヲ犠牲ニ措ヒテ、壬戌ノ春、三百余侯ニ率先上洛セラレ、上疏建白交々辛勤遂ニ天下ヲシテ、尊王ノ大義ヲ鼓舞シ、鬪藩ノ醉迷ヲ醒覺セシメ玉ヒシニ依リ、

皇威復古ノ緒ニ就キタリ、茲ヲ以テ幕府モ旧來ノ習弊ヲ革メ、

皇威循奉庶政維レ揚ラントスルニ至レリ、如斯ノ功績衆諸侯比肩ナキカ故、位級ヲ進メ禄ヲ増シ其成績ヲ表賞スルハ、上タルノ職掌ナルカ故、位禄ヲ加ヘントスルノ内旨ヲ下シタリト雖モ、固辞シ玉フコト再三ナルニ依リ、百方説解懇諭シテ熄マサルカ故、止ムコトヲ

得ス細島一所ヲ預ラント肯許セラレシニ因リ、左ノ如ク達セラレタリ、

三一九 四月十三日長州ヨリ津和野江返翰

(重野探偵)

方今時勢御同様、御苦心之義申モ疎ニ存候、然ハ今般朝廷幕府ヨリ弊藩江 御沙汰之趣ニ付、御高議之趣朝廷幕府江御建言被成度、御相談トシテ委細御使者ヲ以被 仰下候趣、具ニ致敬承候、御建言之写ヲモ熟覽仕候処、聊氣付候筋無御座、貴藩御精忠之程、不始于今深致銘肝罷在候、

皇國之御為トハ乍申、弊藩之義ニ付斯迄被配貴慮、御尽力被成下候段不堪感謝候、猶御使者へ申含候、

(追記略カ)

甲子夏五月

重野厚之丞

(安傳)  
〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

元治元年 (1864)

御城下諸所操練  
当時ノ物価  
議政所創立ノ達書  
議政所取建上申書  
在京小松ヨリ急報  
在江戸久木山泰蔵達行探訪書  
勸農布達

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

元治元年六月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
(紙数五三枚)の記載あり〕

目録

子六月五日夜京都騒動之一条本田様御家来ヨリ薩州御家  
来へ之来輪写

江戸知邸新納嘉藤次ヨリ大久保一蔵へ報告

水戸殿家来筑波屯集ノ輩取締

淀辺へ人数差出云々

海江田彦之丞京地騒動一条見聞覚子六月初旬

長藩暴発ノ形勢切迫ノ事実小松ヨリ大久保へ通信

長藩京師暴動ノ形勢報告

大島吉之助ヨリ大久保一蔵へ贈ル書牘

道嶋正亮存寄書

鹿児島米価

六月下旬大坂藩邸探訪届書

近日雑報

三三〇 御城下諸所操練

六月朔日

本日御城下諸所砲台操練催サレタリ、放発ノ式従前ノ如  
シ、○本日ハ御出馬アラセラレス、御家老(久通)馬出役ス、

三三一 当時ノ物価 (鹿児島)

六月朔日

當時全国一般米価ヲ初メ諸品騰貴、上下挙テ困難ニ迫リ、中ニモ本藩ハ米価非常ニ沸騰シ、加之虧乏大ニ困ミタリ、価格凡左ノ如シ、

一米尅俵三斗三升八リ

凡拾六貫文内外

尅石代四拾七八貫文

一赤米尅俵三斗三升八リ

凡拾四貫五六百文

尅石代三拾五六貫文

一小壳ニテ真米尅升代

五百四五拾文

一大豆尅升

三百八九拾文内外

一味噌尅斤

百三拾式文内外

一醬油尅盃

百式拾四文内外

一酒尅盃

四百文内外上中下アリ

一焼酎尅盃

上百式拾四文

中百拾七八文内外

下七拾式文

一燈油尅盃

七百四拾八文内外

一薪尅高五尺横六尺

上式拾貫文内外

中拾七貫文内外

下拾三四貫文内外

一塩一升

八拾五六文

一麻苧尅斤

上三貫式三百文内外

中式貫三百文内外

下尅貫八九百文内外

一茶尅斤

並ノ品ニテ尅貫八九百文内外

此外諸品沸騰、貴賤困却セリ、京・伏・坂ノ間ハ殊ニ虧乏、飢餓ニ迫レルモ寡ラス、強盜押買等ノ惡徒多ク、此等ノ輩ハ兪ナ浪士ノ形状ヲ為シ、長刀ヲ帶シ、鉄杖ヲ提ケタルモアリ、或ハ多数群ヲナシ、民家ヲ襲ヒ、金錢ヲ奪掠スルモアリト云フ、如此キハ大和・河内等ノ地ニ多シト云フ、或ハ浪士等カ豪農商ヲ脅迫シ、強借スル等ノコトモ又尫カララスト云フ、

### 三三二 議政所創立ノ達書

三三二ノ  
議政所

右ハ別段ノ以 思召、御書院三間へ被 召建候 御趣意ハ、今体 中将様一昨年来尊 王ノ 御奇誠(マツマ)不被為 止、三度 御上京、十分ノ御尽力被為 在、殊今般 御上京ニ就テハ、從來ノ 御趣意ヲ以被為碎 御肝腦 候共、不可行其時機被遊 御洞察、被為及 御帰国次



第二候処、内外ノ勢日ニ月危殆ノ姿ニ成立、如何様事  
變ヲ難計、万一

朝廷御危急ノ節、断然 御守護ノ思召候、然処不可闕  
之儀ニハ候得共、昨年非常ノ御入費ニ被為及、国力堅  
固士氣強盛ト云場ニ至兼、実ニ御配慮一方ナラス御事  
ニ候、依之今般右掛被仰付候人数、右趣意ニ基キ厚懸  
評議、其本末順序ヲ弁利シ、時勢相当ノ処置ヲ以テ国  
体相立、永久ノ御治定相居候儀肝要ニ候、追々御変革  
向ヲ被仰渡置候得共、当座枝葉ノ場ニテハ難被行基ニ  
テ、本意<sup>立カ</sup>道生ノ大体能々致熟考、各尽力奉安 尊意候  
様可有之旨被 仰出候、此旨各方へ致通達、奥掛・御  
勝手方へ可相達候、

六月 (川上久賢)  
龍衛

三三三ノ二  
議政所

右別段ノ以 思召、御書院三間ニ被 召建候ニ付、掛  
り人数三・六・九、其日ニ致出席候様被仰付候条、此  
旨掛り面々へ申渡可承向へモ可申渡候、

六月 龍衛

右ノ通子六月七日被仰出候事、

御小姓与番頭

川上 (久賢)  
右膳

田尻 (種賢)  
務

川上源次郎

御小納戸

山之内作次郎

岸良七之丞 (正義)

松方助左衛門 (務)

奈良原幸五郎

右本丸ヨリ

谷村愛之助 (昌武)

木藤覺大夫 (昌純)

森岡善助

右二ノ丸

右ノ通掛リ被仰付候由、

子六月七日

三三三ノ三  
議政所掛

榊山主計 (久賢)

右之通被仰付候条、向々へ可致通達候、

〔善入久高〕

攝津

六月

三三〇

議政所掛人数ノ儀、三・六・九ノ日致出席候様被仰付置候得共、以來九ノ日御三卿御側御用人・御側役可致出席旨被仰出候条、此旨掛御役々其外可承向ヘモ可申渡候、

六月 攝津

右ニ付御側御用人島津織部、御側役島津求馬・大久保市藏、御家老座出役田畑平之丞、御軍役方八田中治右衛門、御勝手方御家老座八日置半兵衛、御勝手方御側御用人座ハ中村吉兵衛・中村吉左衛門ニテ候ヨシ、

三三三 議政所取建上申書

議政所ノ御取建事、

右被召立候段被仰渡趣承知仕候、右ハ夫々遂吟味候上御政府ヘ申上、御政府ヨリ御命令有之筈ニ付、格別其弊ナキヤウニ候得共、向々ヨリ大小ノ御役ニ掛被仰付候ヘハ、自然<sup>〔正カ〕</sup>權モ相付申サバ、御政府両立ノ姿ニ流レ、ヲノツカラ其弊萌シ可申哉、右等疾ニ御吟味モ被為在、決テ御掛念可奉申上御筋ニ被為在間敷、素ヨリ大頭御名目拜聞仕候、自己ニテ猥ニ得失ヲ奉論哉ニ相

當、如何ニモ多罪至極恐怖ノ至ニ候ヘトモ、連ニ御掛ノ御役々入代有之、汲受ノ厚薄ニヨリ実意ヲ失フトキハ、必其弊生シ候ハ和漢古今ノ通情ニ候ヘハ、新ニ御取替ノ御義ハ、能々御吟味被為在度御事候ト奉存候、就テハ御決定後ニハ候ヘトモ、本立テ道生トモ御座候得ハ、御眼目ノ御政府夫丈ケノ正權屹ト相立、御命令一途ニ出、無大小ト御用筋御重ミ有之ヨウニアラマホシク奉存候、然ルニ向々ヨリ掛タク、自然彼是混雜イタシ、諸向疑惑ヲ生シ候様罷成候ハ、実ニ御政道ノ御大事不容易御義ト奉存候、右ニ付同シ道理ニ落可申カモ難計候ヘトモ、試ニ申サハ是迄通階級ヲ經登庸セラレ候奥掛ノ面々ハ、御規模ヲ標ノト仕、御吟味ヲ尽シ可申候ヘトモ、時世ノ形勢活道モ有之義ニ候得ハ、御家老衆・御談合役トカ申ヘキ非常ノ人才ヲ御撰挙、十人位モ奥掛被仰付、時勢相当ノ吟味ヲ遂、一座和熟治乱興廢ヲ論弁シ、格ヲ正シ経緯ヲ立、双方合体シ、幾重ニモ練熟ノ上申上、猶亦御熟考 御前ヘ御披露相成候様御座候ハ、条理相立両立ノ弊生候後患モ薄、御政府嚴然ト重權有之、御政道一新シ、名分大義モ明ニ相成、序席追々其風ヲ習候ハ、頗ル人傑モ出可申カ、

右通ニカマヘ厘ンモ私ヲ構候ハ、二場ノ気味相興候

ハ自然ノ勢ヒ、況ヤ席ヲ二ツニ被為分、重キ御名目ニ候

ヘハ、其弊可興ハ眼前カト深恐懼ノ至ニ御座候、是非

一途ノ御政道ニ被召替被下候様、謹テ奉歎願候事、

一御両殿様被為揃 御出座云々ノ御事、

一御両殿様御附御打込ミ云々ノ御事、

一御直伺云々ノ御事、

此三ヶ条荒増奉伺、実ニ御美事、是非トモ御懸力御  
成功幾重ニモ奉願度候事、

三二四 在京小松ヨリ急報 (長藩多人數出京)

此節長藩多人數出京いたし、御老中稻葉美濃守様正邦 城州從

江差出候事情之成行、別紙因州様より廻達有之、尤明

日辰之刻迄ニ、御留守居江致出會兵候様、掛合も有之

候得共、夫迄ニテ為何儀無之候処、已ニ今晩洛中及騒

動、右一件は別段申越通ニテ、夫々手当向等之儀は、

嚴重申渡置候、別紙三通相添此段申越候条、

太守様

中將様可被達 貴聞候、以上、

子六月廿七日

小松帯刀清 藤

嶋津丹波殿久敏

喜入攝津殿久高

川上龍衛殿久齡

川上但馬殿久運

川上式部殿久美

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

三二五 在江戸久木山泰藏行達探訪書

水戸

京師ヨリ川越ニ被命候ニハ、鎖港之事水府ニ專任故、

問合碇ト一定可致被仰、夫故川越可問合追々鎖港之方

ニ相決候所、当月朔日六月水府侯登城之節、忽開港之論

ニ相変シ大ニ陳論被致、諸老若一同同意之体ニ有之候、

是ヨリ先、水戸(藩力)封ヨリ開國論之徒余程小石川屋敷ニ出

来リ、中納言公(徳川斉昭)ヘ向ヒ大ニ説論有之、終ニ其論ニ定、

猶他諸侯有司開港説モ多分応接有之候様子竹田掛雲等其  
鎖港家西三藩押

シ込候位之事故、開港家之勢当今甚盛、  
開港論家ハ市川、朝比奈等ノ輩ナリ

川越

元来京師ヨリ先般之御請故、一々水府ト問合断然鎖攘

之論ニ決候故、諸老若衆内実ハ不服ニハ候得共、外ハ

同意ニ相見ヘ候所、朔日之議ヨリ一同水府ニ同意之事

故、当今鎖港家川越一人ニ相成、無是非前日断然可被遊鎖港ト、數ヶ条書立献策致置、幕府御評定御決答迄ハ引込、其上出勤次第其方二片付可申事ト相定、頗銳意之様子、尤川越藩諸士挙テ碌々家老山田太郎右衛門其外公用人様ノ者二人名忘専ラ翼賛致候、

先達御達シノ野州浪士追捕之義、全ク老中ヨリニテ川越更ニ預リ不申、尤其節迄ハ川越専ラ鎖港議論ニ掛リ、御廟算一定之義折角幕府ニ御勸申上候折柄、幕府至極御決着ニ相成候事故、是一決ニ相成候ハ、浪士共名ト可致事無之所、追捕シテ自ラ消散可致、不然ハ仮令追捕有之共、浜ノ真砂古ト申議故ト是迄ハセリ詰候ヲ、水、府ノ為一朝ニ被朋候由

板倉周防守勝齋、備中松山、当時閣老

京師ヨリ之御請鎖攘之所ニ候得共、無謀ニハ不仕、固是一定之上追々其方ニ運ヒ可付ト申事故、断然鎖港之義始ヨリ不承知故、今日迄別段其手数モ不相見、矢張此節ハ諸老若同様外鎖内開外鎖内開トハ、口ニ鎖港ヲ唱、内心開港ノ意ナルヲ云フナラント被存候、

井上河州正直、遠州浜松

始ハ鎖港一辺、中ハ外鎖内開ニテ一家中不服、若断然鎖港之論ニ御決定無之ハ、家中不殘引込可申ト申張、

先達テハ一人不殘引込候故、他方ヨリ使者參候テモ取次者モ無之、甚困リ被迫不得止攘鎖之論ニ決心、此節出勤被致、夫故此節川越へ御使者御文通頻ニ參候由此節川越ト同意ハ、先河州而已

野浪士野浪士トハ田丸等ヲ云フ

大平山ヨリ追々近辺剽掠致、既ニ去五日夜ヨリ六日朝ニ掛、栃木ニテ宇津ノ宮戸・吹上有馬、日商陣屋アリ両家之勢打手ト小セリ合有之、尤死傷ハ格別無之様子、沼田ヲ被奪候事ハ全ク虚説、

浪士川越始之所置振ハ、諸藩ヨリ出候者ハ其藩ニ引渡シ、渡場無之者ハ、本庄番丁浪士組ニモ可入置取計之模様故、追捕トハ大ニ異議、

幕府

一昨十日御居間御居間トハ、將軍家ノ居間ヲ云フ乎ニテ、御自分ニ御政事御評議有之候由、

礫川邸水戸邸ヲ云フ

水府ヨリ馳集候魁首ハ朝稻彌三郎・齊藤圖書、是ハ皆結城寅十十八余党、武田耕雲齋へ賜死候得共、武田党類數十人起リ、右檢使參候節打果覚悟、夫故右之議止、水府公ハ太田道準へ事々相談、夫故太田毎日礫川へ出

入、

右事情探索仕申上候、以上、

六月十三日

久木山泰藏<sub>運</sub>

岩下佐次右衛門<sub>平</sub>方様

新納嘉藤次 様

三二六 勸農布達 (藩達)

六月十三日布達

勸農之儀ハ從 御先代様分テ被 仰出置、近頃ニテモ別テ御沙汰之趣モ有之候ニ付、追々申渡候趣モ有之、其段ハ郡奉行等承知之通ニ候、然処近來京都其外物騒ニ成立、諸所へ兵隊等多人数被差出、此後モ長州等へ出兵ノ御内定モ有之事候ニ付テハ、不容易世態ニ相成就テ諸郷ヨリモ多人数出兵被仰付、農業モ自然手違ニ及ヒ、殊ニ跡家内女更子共等ニテ手入旁、手後ニ相成候モ可有之候付、左様之向ハ郷内組中又ハ村中ニテ合力致シ、手入レ・草取り・取上等一切無手拔取計候様郷内頭役ヨリ気ヲ付、郡奉行地方検査等<sub>(當也)</sub>行廻り下知可致候、且又当時柄之事候ニ付、無用ノ費筋無之、一向稼業無油断相勤候様、是又郡奉行等ヨリ厚可申渡候、

此旨申渡、地頭其外可承向へモ可相達候、

六月

(頭註「日札」)  
攝津喜入久高

但馬川上久運

式部川上久美

三三七

子六月五日夜京都騒動之一条本田様御家

来ヨリ薩州御家来へ之来翰写

此間御尋難有奉存候、当方皆々無事御放可被下候、其節御尋之儀左ニ申入候、

御出張御人数

京都御所代 松平越中守様御人数

与力内 六人即死

五人怪我

井伊掃部頭様御人数

老人即死

五人怪我

松平肥後守様御人数

十一人即死

六人怪我

内壬生浪士式人死

兩町御奉行御人数

四人怪我

三人即死

十八人怪我

曉頃出口御固メ

會津家 肥後家

郡山家 因州家 是両家ハ御頼ニ付

榊原家 井伊家

本田家 右七家へ被 仰付候、

此出張ニ相成候頃ハ、皆々相濟候跡ニ御座候、

外御出張ハ何事モナク候、

則浪士凡七八人程之内皆々退散仕、ノテ十三人程ハ  
打捕候、名前左ニ

桑名様御手ニ

坂本磯太郎廿才計リ

王川市之助十八九才ナレ共カ士ノ如シ

郡 甚 内本名兼節四十才計リ惣髪

ノ三人生捕ニ致候

モノ共、

御所司代手ニ

荒井三十郎頭ニカスリキズ有リ

三木與兵衛

但村官 蔵ウデニカスリキズ

大橋 漣

ノ四人ハ生捕候ヨシ、

井伊様御手ニ

森 生一 郎廿四才計リ打死

岩崎勇 輔四十一才計リ打死

今井幸 蔵廿八九才計リ

中川外 記三十一才計リ

三个村長兵衛十九才計リ打死美男ナリ

ノ五人打取

外ニ此内ニ居申候、

神村室十郎廿八九才計リ

此者殊之外之強勇、壬生浪士卷

人打殺シ、其刀ニテ三人打取、

式百人計リノ人数ヲ切ヌケ退去

申候ニ付、明方ニ出口々々御固

被仰付候へ共、相知レ不申候、

會津様御手ニ

小田 要三十四五才計リ

戸田 武助五十七八才計リ  
其場ニテ打死

岡田 仲之進廿三四才計リ

跡武人ハ召捕相成候

御町奉行御手ニ

白井 與三郎廿七八才

佐々木 一貴四拾五六才

武人生捕ニ相成候

外ニ浪士之家来五人程

町奉行へ召捕相成申候

武家方死人怪我人トモ

五拾五六人

浪士生捕九人

同 打死五人

其余ハミナ〜退去致候、

外ニ土州侯御家中屯人御座候

ヨシ、此段相分り次第申上候、

御人数皆々殊之外見事ニ御座候、

會津侯御手ニ生捕ニ相成申候

小田要ト申者殊之外強勇、宿屋

戸口ノ大手水鉢苦モナク打付ケ

又ハ大石カル〜人数之内ヘナ

ゲ申候、誠ニ力者ニ御座候、

岡田仲之進ハ其内ニテモヨハキ

モノニテ、會津物頭ニ生捕相成

申候、

御町奉行御手ニ生捕ニ相成候佐

々木一貴ト申者、長刀之名人三

人程是カ為ニ手疵受申候事、

井伊様御手之内三个村長兵衛、

殊之外之美男、業平モ是程ナラ

ンカト思ヒ計リ候、其上勇氣モ

有之、打死致候ハオシキ武士ト

一統噂致候事、

岩崎勇輔殊之外之手者四五人手

疵ヲオ、セ打死致候、

御所司御手ニ郡甚内、此者奇代

之鉄棒遣ニ候、浪士之内ニテモ

此外ニ皆々オシキモノ沢山御座

候、

右之外死人・怪我人モ無御座候、誠ニ大取込未タ最一  
通り相分り不申候、相分り次第跡ヨリ申上候、先ハ取  
アヘス御礼、後便ニ委細申上候、以上、

本田内

葉月十三日

大塚頼之丞

薩州様御内

村上信太郎様

右之書ハ、本田様御家中ヨリ薩州様御家中へ来り  
候来翰之写、他見無用ニ致シ呉候様呉々モ申居候

事、

三三八 江戸知邸新納嘉藤次ヨリ大久保一蔵へ

報告

尚々細島一件之事、大概道付候て、田中清之進今日  
帰京いたし、小松家より致承知来候事故、右江申上  
候上、其御許には委敷御問合ニ相成可申候、いつれ  
清之進直ニ不罷下候てハ、能分兼可申、多分清之進  
被差下事ト察申候、尤其後格別かわりたる儀も無御  
座候間、別段不申上候、

一筆啓上仕候、

太守様益御機嫌好被遊御座、

中将様國文ニも益御機嫌好被遊御下着、恐悦之御儀奉

存候、次ニ貴所様御清駕御安着被成、愈御壯健御精勤可

被成奉欣賀候、随て私ニも無異相動申候間、乍憚御休意

思召可被下候、然は当地之形勢其後ハ別紙久木山藏聞

合書通ニ御座候、野州屯集之浮浪輩戸田長門守忠行、下野足利

陣屋江、金作之強談ニ成候て、終ニ炮発少々せり合有

之候得共、手負等ハ無之程之事、先日松右京亮大内、高橋上

様・牧野越中守貞明、常州笠間様江討手御達ニ相成、小頭小頭下

之御賦之事、近辺之大名江も大形討手被命候儀、大目

付書役より通候事筋々江首尾いたし候間、其筋より申

上ニ可相成候、戸田家と浪士輩炮発之事、将討手被仰

付候事など事々敷ハ聞へ候得共、為指儀ニても無之候

半欵、横濱鎖港之事も此内ハ涯々敷聞得候得共、到頃

日聞合通埒明事とも不被察候、板倉侯杯先達てより登

城無之候処、昨日より出仕之筋ニ見得申候、攘夷ても

開国ても一方ニ片付、死力ヲ抛所置有之候ハ、神明

之愛護も可有之候得共、左様ニも参兼候と見得歎息之



至ニ候、攘夷ヲせよ、無謀之攘夷ハするなどの

朝命を承事候得共、当春一同御出会之御大策瓦解と相成候ては、方今ニ至リ有謀之攘夷といふは、いかなる名將も可施道可有之とも不被考候、此上ハ行形ニまかせて打破れ申外有之ましく欵、打破々々と是迄きめくしく為申面々も今ニ至りては、即決と申場ニも至兼候半欵と考申候、さてハかく中ニ下りたる様之姿にて、暫は時日を経可申候、

中濱万次郎 中浜万次郎ハ土州ノ産ナリ、年少ノ時漂流シ、米國ニ在テ捕鯊本藩ニ届ト航海術ノ教師トセント、及航海ニ達シタリ、帰朝、後幕府ニ登庸、江戸ニ居レリ、故ニ如此勝氏ニ依頼セラレタル者ナリ、事先ニ申上候通、海江田信頼よりも委敷申上候半、其后勝阿波守殿安房ノ殿、江も壯士、本藩在江戸廿年輩、衆より頼被申候處、鯨取ニ長崎より万次郎ヲ望ニ来候由、さてハ双方争勝之様ニ相成候ては如何、拙者

今三十日程経候て帰府いたし候間、其上程よく世話可致候間、夫迄待候ては如何と被申候由、依て可待や如何と今吟味仕事ニ候、若鯨取之方ニ取付られ候上はいたし方無之候間、其内成丈手ヲ付候方可然哉と考申候、いつれ近日決議可仕候、此儀無口能ハ參かね聊心配仕候、先達て奥御右筆久野氏分上之所口辺なと、最初よりちと六かしうハあるまいかとおもふたと被申候、何之訳

にて御勘定方なと拒申やさたかニ分かね、折角其元筋

ヲ探申事ニ御座候、白川・福村白川・福村二名トモニ幕府旗ノ下ニテセントス事、先達て御断ニ相成候事ハ、其御口上書なと其筋より御問合ニ可相成候、夫形にて閣候ハ、不心得事候間、今朝又御留守居へ面会寛座いたし篤と申込候、是ハ此上いやと申事候ハ、もうハ私手前にてはいたし方無御座候、此節は三ヶ月計滞在教示方いたし被呉候様申置候、かく迄事を分て申候ヲ、多聞いやとの御返答ハ有之ましく被考申候、今日井上直左衛門急ニて出立候間、右方々形行申上候、以上、

六月十四日

新納嘉藤次

大久保一蔵様

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

記ス処ノ細島事件トハ、前ニ記シタル同地御預リ地ノ違アリシ故、授受等ノ事ニ関シタル者ナリ、

三二九 水戸殿家来筑波屯集ノ輩取締

板倉周防守勝殿御渡

大目付江

浮浪之徒取締ニ付テハ、追々相触候趣モ有之候處、先達テ以来、野州大平山・常州筑波山等ニ多人数集屯罷

在、所々横行致候者有之、右ハ水戸殿御家来并御領分  
之者共重ニテ、既ニ贈大納言殿之遺志ヲ継候杯ト申唱  
候由ニ相聞、難捨置筋ニ候得共、水戸殿ニ於テ御手限  
ニテ御取鎮被成度趣被仰立モ有之候間、御任セ被置候  
処追々増長、此程ニ至テハ右場所而已ニモ不罷在、異  
形之体ヲモイタシ、二三十人位宛群リ、歩行中ニハ無  
宿惡党者モ相加里、金錢押借等致シ、百姓共難渋不少、  
依之大平山・筑波山等ニ罷在候者共、速ニ水戸殿御領  
内江引取候様可罷成、其余異形之体ニテ徘徊致シ、軍用  
金杯ト唱へ押テ金銀為差出候類之儀ハ勿論、都テ旧臘  
相触候趣ヲ以往来相改メ、浪人体ニテ怪舖見受候分ハ、  
仮令ヒ水戸殿御名目相唱候トモ召捕、手向等致シ候者  
ハ切殺シ、又ハ打殺シ候トモ可致旨、嚴敷相触候段水  
戸殿江相達置候間、右之趣相心得、銘々領分知行限家  
来差出、時々為見廻、万一不法之者有之候ハ、搦取り  
又ハ討取、多人數之節ハ隣領申合相互ニ助合ヒ、差掛  
り候分ハ村々之者共申合セ、搦取候様ニモ致シ、尤モ  
手ニ余リ候者は又打殺シ候トモ不苦、御料・寺社領并  
小給所等ニテ家来詰合無之分ハ、最寄領主・地頭ニテ  
別テ相心得、注進次第早速人數差出シ、浮浪之者之為

メ村々難義不致様厚ク世話可致候、

但關所取締出役廻村之節ハ、相互ニ打合候様可致候、

右之趣、關八州並越後國・信濃國領分知行所有之

面々江、不洩様可被相触候、

五月

別紙之通從公儀被 仰渡候条、不洩様致通達、若怪敷

者見当候ハ留置、早々届可申出候、此旨諸所境目<sup>略</sup>辺道

番人等へ急度可申渡候、

六月十六日 御家老座印

右達ニ付、照会左ノ如シ、

筑波山浪士御取締等之儀ニ付、別紙差越候条

太守様

中將様被達 貴聞候儀共、何分ニモ可被取計候、已上、

子六月十四日

小松帶刀<sup>廉清</sup>

島津丹波殿<sup>久高</sup>

喜入攝津殿<sup>久高</sup>

川上但馬殿<sup>久運</sup>

川上式部殿<sup>久美</sup>

三三〇 淀辺へ人數差出ニ云々（藩達）

長州人出坂追々多人数相成、東下致候趣ニ相聞得候得共、此度ノ挙動難計候間、淀辺へ早々人数不目立差出、御警衛ト相心得候様可致候、万一龍暴ノ所行モ有之候ハ、嚴重ノ所置可致候、

一淀辺へ早々人数差出、御警衛相勤候様可致旨被仰渡趣承知仕、然処当四月 御別紙ノ通、從

朝廷被 仰出候付、相当ノ人数残置、大隅守ヨリモ奉護ノ儀堅申付置候<sup>也</sup>赴モ御座候得ハ、不容易形勢看々、地方へ人数分配難相調御座候付テハ、不都合ノ赴モ相聞得候へ共、禁闕御警衛一円ニ存込遵奉仕度無他急御座候間、形行ヲ以無抛御断申上候付、被 聞召被下候様仕度、此段申上候、以上、

松平修理大夫内

三三一〔海江田彦之丞京地騒動一条見聞覚〕

海江田彦之丞

子六月初旬京地騒動一条見聞仕候覚

一五日之昼七ツ時比ヨリ、市中方々へ會藩士分數隊為浪士探索致往来、不審成場所へハ草鞋掛鎗刀拔身ニテ踏入、戸壁等打崩輕俄人沢山有之段相聞得、翌六日朝ニ

相成、三條大橋之東小路ニ死人四五人其俣有之、會藩印之挑燈ヲ立有之、是ハ會藩捕手之士分ニテ候由承り申候、当日モ於所々捕方有之、浪士拾余人被打殺、或拾余人ハ被生擒候由、何方ニテ候哉、甲冑帯者一人被召捕奉行所へ列行候由、折柄当夜錦御邸近所ニ失火有之、物騒之時ニ候間、人々相驚候得共、五軒程焼失取鎮申候、是ハ付火ニテモ無之候由、七日ニ相成祇園祭礼モ如例年有之、見物人中ニ時々警護之者拔身着込ニテ通行候得共、五日・六日之如クニハ被捕候者モ無之候由、八日ニ相成先々鎮静之模様ニ候間、私共ニモ發京被仰付候次第ニ御座候、

一右ニ付御留守居方杯ヨリ聞合ニ相成候処、最初此節長州へ夷艦襲来之説盛ニ有之、其上自

公辺長州へ御達相成候ニハ、襲来致候ハ、輕忽之応答無之様トノ事候得共、長州不肯致返詞候ニハ、夷艦ト申受候ハ、不及応接、打払可申段申出候由御座候間、自此前京都へ致潜伏候二百人程之長藩士、今更国家之大事ト存候哉、早々大坂迄馳下り候処、国元ヨリ飛脚到来、二百人位馳下り候テモ左迄用ニモ難立候間、當時別テ京地大切ニ候間、皆々如元可致帰京旨申来候間、

右ニ致同意引帰リ候由、然ル処伏見街道之水口加藤様御固御番所へ参掛、暴言ヲ以無体ニ入京仕候間、早速其段所司代方へ被申出候処、直ニ被達

奏聞候処、浪士洛中ニ潜伏イタシ候説有之、早々可探索旨被仰出、一橋公ハ勿論會津・加州・彦根・桑名之五家ニテ、所々致探索警護候由承申候、

一前以會藩ヨリ御届相成候ニハ、浪士潜伏ニ付テハ捕方仕候間、若哉人連ニテ召捕并斬害仕候テモ、相構ヒ不申旨被申出候間、此節之一条抜解<sup>群</sup>尽力被致候様相聞得申候、

一右ニ付テハ・

御屋敷ニハ一向御構無之、御人数被差出候処モ無之、宮様方へ御加勢可被差上旨被仰遣候得共、先其場ニ不及旨ニテ、当分至極御寧謐之御事ニ御座候、

一長州士桂小五郎ト申者モ、右之騒動ニ付被打殺候由御座候、長州人国元へ飛脚立候テ、益田<sup>親施</sup>彈正<sup>家老</sup>へ頼ニ可上成旨申送候由御座候、今月十九日朝私共上之關へ入港仕候処、早船四十艘計へ長州人大勢乗入居候間、近辺之者へ承候処、家老何某六百人召列、俄ニ上り方有之段申事ニ御座候、

一小倉ニテ承候、先比長州北海之方へ夷船壹艘参リ薪水ヲ求候処、陸ニ打砲イタシ候処、彼ヨリモ打放チ浦家三十間位焼失仕候由、

右ハ私承リ合候丈御座候間奉申上候、已上、  
六月廿六日

三三三 長藩暴発ノ形勢切迫ノ事実小松ヨリ

大久保へ通信

此節長州多人数押出之形行ハ、一昨廿五日極々急キ便ヲ以申上越候得共、昨今切迫ニ相成、既ニ今夕之処ハ變ヲ引候様之向ニ御座候、天龍寺江ハ昨夜ヨリ人数多人数繰込、外人數福原<sup>元禮</sup>越後主宰無理ニ押入候形ニ御座候テ、未事破レニハ不及申候得共、何分不唯向ニ御座候、諸家之人数ハ諸方へ相堅メ、必死之形ニ御座候、洛中之騒動不一方九門モ都テ占メ切りニ相成候、此方之人数モ一隊乾御門へ繰出シ、為相堅メ申候外惣勢之所ハ今一左右次第ニ繰出、  
禁闕警衛可仕人数モ相揃へ、一左右相待居候事ニ御座候、此節ハ定テ暴挙イタシ候ハ案中、今晚ヨリ明日共ニ相掛候テハ決テ戦ニ可相成候、最初ヨリ

禁闕警衛文之所ニ決居候処、段々

朝廷ヲカラクリ、有栖川<sup>仁</sup>・正親町大納言<sup>徳</sup>様等之所

取込候テ、去年八月十八日已前之所、真之

叡慮ト申所ニ立替候向ニ御座候間、左様相成候テハ、

我国ハ第一番ニ<sup>本藩</sup>打崩サレ候ハ無相違、勿論

神州夫限之事、被惱

叡慮モフハ氣張兼申候、先日ヨリ度々幕命等ヲ以、人数  
差出候様ニ被相違候得共相断置申候、シカシ此節ハド

チラニイタシテモ事破ニ相成訊ニ御座候間、征討之勅

相下り候ハ、戰申候決心ニ御座候、一橋・會津辺ヨリモ

頗ニ征討之 命相下り候様申出候由ニ御座候、右通之

形勢故早々人数被差出度、其為メ翔鳳丸差返申上越候

条、大坂辺迄早々被差出度御座候、御家老座書役井上

直左衛門並川上助八郎へ形行申含越候条、御聞取可被

成候、何分急々申上候事ニテ、巨細事情相認兼申候間、

旁可然様御推計可被成候、此旨早々申越候、已上、

六月廿七日夜五ツ時詔

小松帯刀<sup>清</sup>

大久保一藏<sup>通利</sup>

再白、差イソキ居乱筆能々御推覧可被下候、軍配最

中ニテ不連続之文面等平ニ御免、暑中随分御保養可

被成候、尚追々形行可申上候、已上、

右副書ニ

因事掛御人数ハ、今午之刻比ヨリ御參

内ニ相成、御評議中ニ御座候、九門内ハ諸所ニ人数モ

繰出シ、誠ニ騒動ニ御座候、余リ外方騒動ニテ突留候

説モ分り兼候間、今晚中共ハ破ニハ不相成哉トモ存申

候、或百人計ノ賊山崎之方へ引候由、シカシ是モ夫ヨ

リ天龍寺へ繰入候向ニ被聞申候、京都ハトウシテモ此

節ニテ一破ニハ無相違御座候間、人数ハ早々御繰出シ

相成度御座候、

### 三三三 長藩京師暴動ノ形勢報告

長州人多人数出坂不容易形勢可成立ト之趣は、一昨廿

五日極々急飛脚を以申越置通ニ候処、今日ニ相成殊之

外洛中騒立、夫々諸侯御固人数も被差出、只今ニても

異変到来可致も難計ト之形勢ニて、当春被召残候人数

も有之候得共、何分手薄訊ニも有之候付、早々諸郷人

数之内五組 御城下よりは一組被差越候様、其為翔鳳

丸<sup>船</sup>被差返、委細之趣は、井上直左衛門・川上助八郎

江申含差遣候間、右翔鳳丸乗船ニて可被差越候、尤諸

郷之儀は当春長州一件当春長州征討ノ為メ出軍命セラレタルヲ云フ之儀ニ付、御城下江出張調練等いたし、熟郷之内より被差越可然と存候間、此段御内用を以申越候条、

太守様

中将様被達 貴聞、何分急速可被取計候、以上、

但右人数之儀は、大坂辺迄被差越候所にて被仰付候

様有之度、此段も申越候、

子六月廿七日

小松帯刀清

島津丹波殿久徴

喜入攝津殿久高

川上龍衛殿久齡

川上但馬殿久運

川上式部殿久美

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

這報鹿兒島二達スルヤ、即日長州征討予備諸隊ノ内ヨリ、至急上坂スヘキ旨達セラレタリ、然ルニ是ニ洩レタル諸隊ハ不平ヲ鳴ラシ、一同出軍冀望シ、或ハ令ヲ俟タス出発セントスルモアリ、或ハ壮年ノ輩ハ脱出出軍セントスルモアリテ、鎮靜頗ル困ミタリ、因テ左ノ如ク論達セラレタリ、

今般大坂辺迄御人数被差出候ニ付、兼テ長州辺へ出軍被 仰付置候人数之内ヨリ差分被差出候儀ハ、深キ

思召之訳被為 在候儀ニ候処、一同出軍致度申立候儀

殊勝之心得ニ候段、御両殿様別テ 御満足被 思召

上候、乍然当時不容易形勢ニモ立到候ニ付、此後之模

様次第ニハ、太守様御出馬可被遊 思召之御事候間、

一同 御趣意之程奉汲受、此涯不騒立相鎮リ、何分之

御下知可相待候、此上ナカラ承服不致者ハ不被得止事、

御軍法ヲ以御取扱可被仰付候、至其期後悔致間敷候、

此旨不洩様早々可申渡候、

七月二十八日

攝津喜入久高

式部川上久美

### 三三四 大島吉之助ヨリ大久保一蔵へ贈ル書牘

先便申上越候通、

禁闕御守護丈之処一筋ニ可相勤賦ニ申上置候処、今日

ニ到リ候処、長州暴横相顕レ、有栖川宮並正親町等ヲ

相カタラヒ、

朝廷ヲ八月十八日八月十八日以前トハ、癸亥八月十八日據町御門ノ事件以前ト云フ義ナリ已前

我意ヲ働クノ趣意ト相見得申候次第ニ御座候得共、イ

ツレ

勅命ヲ以、征討之旨相下リ候得ハ、長ト不相戦候テ不

相叶時機モ可有之決心致居候ニ付、蒸氣船之儀ハ大坂  
へ相滞候テハ、懸念ハ勿論之事ニ御座候間、早々御差  
返シ相成候方可然事ト吟味イタシ居候処、既ニ今日ハ  
九門御差固相成、長州勢伏見ヨリ押来候段相聞得、大  
騒動之事ニ御座候間、早速援兵御差出相成候処、蒸氣  
船ヲ以表通御問越相成候ニ付、荒増大意迄申上候間、  
左様御心得可被下候、成丈相忍ヒ可申含ニテ罷在候処、  
暴威ヲ以

朝廷ヲ取崩候仕方ニオヒテハ、モフハダマリ兼候次第  
ニ御座候、八月十八日已前ヲ真ノ叡慮、其後之処ハ都  
テ偽謀之モノニイタシ成シ候事ニテ、堂上方モ過半長  
州同意之向ト相見得申候、此上ハ何様相コラヘ候テモ、  
必ス我国<sup>我國トハ全圖一</sup>打崩サレ候儀無疑、イツレ朝命ヲ  
奉シ相戦ヨリ外<sup>マコ</sup>ハ無致方事ニ御座候間、能々御合点可  
被成下候、恐々謹言、

六月廿七日夜認

大島吉之助

大久保一藏様

(大西郷書翰大成にて校記)

三三五 道嶋正亮存寄書

子弟西伯二三策ヲ献ス、一ニハ天ヲ敬ス、二ニハ民ヲ愛

シ、三ニハ賢ヲ親ム、西伯然ル時ハ天下何ニ、カスル、  
子弟日王君ノ国ハ民ヲイタシ、霸王ノ国ハ士ヲイタシ、  
僅ニ存<sup>タモツ</sup>ノ国ハ太夫ヲイタシ、無道ノ国ハ倉廩ヲイタス、  
今ノ世ハ民ヲイタスカ、賢ヲ親ムカ、士ヲイタシ太夫ヲ  
イタスカ、世挙テ倉廩ヲイタストオボユ、

議政所トイフ名目被召建候付、存寄ノ輩ハ何分可  
申上旨被仰出候間、左ニ申上候、

此節議政所被召建候ニ付、広ク御採用可被遊候間、存寄  
ノ輩ハ建言可致旨被仰出、依之右被召建候御趣意ヲ深ク  
奉洞察候時ハ、近年国家衰弊士氣不振ニヨリ、時世変革  
ヲ以国力并士氣強盛ナサシムルノ御盛業、是ハ誰ガナサ  
シムル過チニ御座候哉、下人力ノ可及儀ニ無御座候、兔  
角四季ノ草木其節ヲ不失ヲ以克ク見玉フヘシ、天地陰陽  
ノ順環スル、造化ノ造化タル任ヲ不失故ニ御座候故、国  
家ノ政事ヲ手近ク申サハ、君ハ天地陰陽ナリ、太夫有司  
ハ造化ナリ、士農工商ハ草木ナリ、左候得ハ下人力ノ可  
及ニアラス、管子ニ礼義廉恥ハ国ノ四維ナリ、四維不張  
ハ其国乃滅ト御座候儀、今其礼義廉恥ノ道被相行候哉否  
ヤヲ能々御聖察被遊候テ、造化ニ命シテ造化ノ任ヲ不失  
様ニ叱鞭不被遊候テハ、決テ君道ニ不叶儀ト奉存候、国力

不足・士氣不振モ君ノ言行ヨリナサシムル業ニテ、決テ下ノ過チニテハ無御座候、剛將ノ下ニ弱兵ナシトイフ事御座候付、君道ノ不被行故ト被思召、深ク御探リ広ク御採用ヒ被遊候ハ、其弊決テ御見出可被遊候、和漢ニ其先蹤多ク御座候、今造士館ノ職分ハ何ノ為ニ被召建置候ヤ、和漢ノ歴史孔孟ノ道ヲ以當時世ニ引当、其過チヲ糺シ其足ラサルヲ補フタメノ職業ニシテ、寔ニ歴史孔孟ノ書ヲ闡稱シ、詩文章ヲ翫弄シ、初生ヲ引立教導スル迄ノ職掌ニテハ有御座マシク、必スウカ／＼ト一日モ御過シ給フ時ハ、寔ニ御攘夷ノ至リト御座候、

一 礼義廉恥ノ弁

一文武大道ノ弁

一 聚斂士臣ノ弁

一 異端ノ弁

一 質素節儉ノ弁

右ヶ条當時第一ノ急務ト奉存候、聖人ノ格言万古不易ノモノニ御座候間、得ト御聖慮被遊候テ造士館へ被命、當時世ニ抑移シ、其大本ヲ突居候御施行相成候儀有御座度候付、如何被成候テ可被相行ヤ、早々取シラベ可申上旨被仰渡、右ヲ以御政事ノ題目ト被為成、君公御德行御用

ヒ被遊候ハ、令セスシテ国力足リ、士氣強盛可罷成儀ハ數口ヲ不待無疑儀ニ御座候、

甲子六月廿八日記ス、

### 三三六 鹿兒島米価

六月廿八日記ス、

一 当分米相場三斗入七貫八百文位ニテ候由、真米ハ無之程也、諸色不相替マス／＼高料ニテ候、殊ノ外諸色何モ無之程也、薪杯ハ全ク無之程ナリ、松薪諸所方々へ相頼候処、拾本ツ、ニテ候、シカレトモ私四所ヨリ取入候ノハ拾壹本ニテ候得共、殊ノ外細ク珍敷世上ニテ候、

### 三三七 六月下旬大坂藩邸探訪届書

六月廿二日、大坂ヨリ伏見迄長藩ヲ漕送候三拾石船之船頭共、大坂於町奉行所同廿五日問糺之処、伏見江着船之節、備前・筑前・藝州・因州・仙臺當時加・因・備・筑・久留米等ハ長藩左祖ノ説アリ中ニ加・筑ノ二藩ハ文弱ナル力故、恐懼阿媚ニアリ、仙台モ果シテ然ラン、外芸ノ如キモ又然リ、表ニ本藩等へ往来シ、内ニハ長藩へ通シタリト云フ、  
ニ式ヶ園様御家中ト承リ、御出迎ヒト相見得乗組、長州様江御苦勞之御事ト、至テ丁寧御挨拶有之候旨船頭為



申出由、

一於大坂先達テヨリ長州ハ米買入方、一日ニ金千兩程ツ、凡拾万兩程ニ相及申候半、小判金モ過半ハ繰替候由當時小判金ハ外國人渴望、由ス故ニ高値ニ及ヒタリ

一六月廿三四日方ヨリ長之人数追々山崎天王山江集リ、幕張之由、宮ハ相ヨケ野陣之由、其幕ハ幾重モ打張候テ、籠居候人数千人ト之世評ニ候得共、凡五百人位カ往来ノ双方ニ大砲式挺ツ、四挺、又南門之方江向ケ式挺、山之上ニ式三挺砲門相見得、其内主將ト相見得候モノ兩人、壯年之者ニ候由、

一伏見辺江四百人程出張、諸寺々旅込屋江籠居、別テ静ニイタシ候由候得共、町家ノ者ハ戸ヲ占メ居候由、

一天王山近辺百姓共ヲ長人雇人ニ付テハ、總計之事ニテモ式朱金、小兒召仕候速モ老朱銀ヲ与ヘ候由、錢百文位ノ品買入ルニハ式百文位払候由人心ヲ取ランカ為メ如此ノ事枚挙ニ遺アラスト云フ

一天王山ヨリ伏見辺江物見ト相見得、騎馬兩人程ツ、不絶追々乘廻リ候由、

一兵糧ハ大坂屋敷ヨリ送越候手筈ニ候半、同所屋敷江四百人籠リ居候由、屋敷外廻リ不絶行廻候由、

一天王山野陣江五六丁相隔郡山藩之堅メ場有之、俄二人

数手当、追々固メ人数相増候由、

一廿五日朝四ツ時分、長人三人列立山崎ヨリ京街道筋京江向ケ通行之処、麻田出張固メ場ヨリ目掛、老人連モ差通候儀不相成、我々役分ニ候間、一往夫々江相伺候上通行可被成一向相断候処、然ハ尤之至、明日四ツ迄差扣居、其刻過キ候得ハ押通ル連立帰リ候由、外ニ同所辺之固メ場モ各目ニ掛リ候訳ハ不分候、

一長藩五六百人江戸江差向候段、何角ニ同藩云ヒ触シ候ヨシ處説ナ、ラン

一長ヨリ所司代淀並會津江用談有之ト申シ、是ハ伏見辺風説之ヨシ、

一廿四日大坂御城代ヨリ諸家屋敷江有合之人数、依時宜被差出候様達相成候処、筑前・肥後・藝州ハ国許江間越之上、人数可差出段断切相成候由、

一定町辺合図次第ニハ、人家銘々立退候様触渡相成候ヨリ連ヲヨシ、

三三八 近日雜報

六月十八日長州藩士千五百人計ノ兵ヲ三分シ、奏状ヲ捧ケント家老益田親徳右衛門介ハ幡迄出張シ、國司信濃親相睦

峨天龍寺へ屯集シ、又福原越後〔元圃〕ハ伏見辺へ屯集ス、

訴ノ旨趣大膳大夫父子

勅勘御宥免、五卿復官帰洛、或ハ昨年八月十八日以前

之政令ニ被復候様トノ二条ニシテ、右輩押テ入洛セン

ト致候処、守護職〔松平容保〕會津侯兵ヲ出シ、之ヲ押へ入洛ヲ許

サス、故ニ不止得事長兵時宜見合セ候云々、將軍家ハ

先達テ下向相成リ、一橋公並御老中稲葉長門守〔正邦、淀藩主〕殿在京

ニテ、京坂之騒動不大形、依之

禁門之堅内外之兵備嚴重、各藩兵ヲ出シテ諸所ヲ警衛

ス、

此報知鹿兒島へ達シタルハ、同月廿七日大坂ヨリ蒸氣

船ニテ報シ来ル前小松方報告ニ記ス、井上・川上等、即日御先手人数並諸郷

兵六隊上下四百余人、同八月二日蒸氣船翔鳳丸ヨリ大

坂ニ向テ発向ス、

元治元年 (1864)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編  
元治元年七月ノ一

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
(紙数六五枚)の記載あり〕

目録

道嶋正亮家記抄長州人入京ノ説ニ就テ藩兵上京等  
在京小松帯刀ヨリ大久保一蔵ヘ書牘  
西郷吉之助ヨリ大久保一蔵ヘ報告  
小松帯刀報告  
大島吉之助書牘大久保一蔵宛  
七月四日  
伊地知正治書牘大久保一蔵宛  
七月四日  
園田彦左衛門鈴木壮七防長之事情探訪之届

大坂辺へ被差出人数へ太守様御盃被下

天龍寺在陣ノ長州藩へ説得

彈薬賦銃薬局上申

小松帯刀ヨリ大久保一蔵へ照会

大島吉之助書牘大久保一蔵宛  
七月九日

木場傳内長州人上京云々ノ書翰大久保一蔵宛  
七月十日

木場傳内書翰大久保一蔵宛  
七月十一日

木場傳内ヨリ大久保一蔵へ楠公社御造立ニ就テ書翰

黒田嘉右衛門書翰

木場傳内書翰大久保一蔵宛  
七月十二日

御軍賦役大山格之助徒浪華來翰写市來広實宛  
七月十三日

天龍寺討手配

木場傳内書翰大久保一蔵宛  
七月十八日

天龍寺へ楯籠ル長軍乱入

勅使九州御下向ニ就テ云々

三三九 道嶋正亮家記抄長州人入京ノ説ニ就テ  
藩兵上京等

甲子七月三日

夜八ツ時分大砲三発打蒸気舟入津、翌四日朝迄ニ不相

知候処、廿八日出帆ノ度御舟長州ノ者共、會津侯ヲ可

打果トテ大坂・伏見ノ間へ追々出勢イタシ、城ノ内へハ不入入、モハヤ伏見ノ寺々或ハ八幡ノ辺へ勢ヲ相集、何分物騒ノ由ニ候、右ニ付八時分ニハ五番兵一手・諸郷五手藩兵編脇・殿之出役被仰付、明後六日蒸氣三艘・大和船二艘ニテ出帆被仰付、物主ハ川上右膳殿・島津頼母久寶殿、仕長中原七之丞ニモ出張ノ人数ニテ候、未何様ノ訳トハ不存候得共、察スル所七月六日・七日會津・肥後ト參会、無楯ニ相成候訳ニテ、此節一橋抔征伐スル疑説ヲ顯シ、諸役人并長州ノ者共、洛中ニ立入居候モノ共ハ惣テ捕方イタシ、段々互ニ怪我人等モ有之、夫故無実ノ罪ニテ右次第憤激ノ余リ、決テ出勢イタシ候半ト吟味イタシ候、然処竹下藤助殿へ手并マツ、其人ノ嘶ニ増田修理大将ニテ一橋ヲ可打果意趣ノ由、其訳ハ一橋ハ奸腹ヲ以 天子ヲ蔑如シ候、將軍ニ据へ今様ニ有之、天下ノ權ヲ取ラセ候儀不相濟トノ趣意ニテ、是非一橋ヲ可討取トノ出勢、又ハ天子ヲ奉取候テ、外ニ京師ヲ設ケル抔トノ嘶ニテ候、夫ハ長州カ甚暴意ナリ、諸兵員ヲ初人心共ニ市橋カ奸謀ナルヲ知りテ、左モ可有之候得共、最初長州モ市橋ト同盟ナリシヲ、今ハ離間有之候間、長州一國一橋ヲ憎ミ、奸謀ナリト申候テ市橋

ヲ討抔候テハ義理ニ不当、左様ナル事スル長州ニテ無之ト拙者ニハ存セリ、内実ハ六日・七日ノ抔方ニ憤激シテノ出勢ニテハ無之ヤ、奸謀等トイフハ不攘夷家ノ流言ナランカト存候、其後見合ノ為テ通記置也、  
子七月十五日

### 三四〇 在京小松帶刀ヨリ大久保へ書牘

御安康被成御座奉珍重候、然ハ爰元騒動之形行ハ、別紙ヲ以テ申上候通御承知之上ハ、彼是御配慮被成候半ト奉存候、其外別段相替儀無御座候、先ハ折角時下御保養被成御勤仕度奉存候、匆々以上、

七月四日

小松帶刀藩清

大久保一蔵様利

再白、御屋敷中人氣余程差ハマリ勢盛ニ御座候、御推察可被下候、

### 三四一 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ報告

尚々動も不動も、信義名分上ニおひて間違ハ不仕出候間、是丈ハ御安心可被下候、

別紙、伏見ニおひて服部政二郎より探索いたし候書付

差出候、与力方より之書面狀と相察申候、長州江御達相成候儀無相違、一橋より一昨日 朝廷にて申上候口振とハ相違ひ候付、如何之訳狀と聞札候得共、其辺之処委敷不相分候得共、御達相成儀ハ、間違ハ有之間敷哉と相考居申候、就てハ返答振ニ依り御所置之品も可有之、不遵之儀申立候ハ、速ニ征討之命相下り可申事と相待居申候、直様人数を引払候て、此節迄ハ戦ニ不相成儀狀と相考候得共、つまり戦ニ不相成候てハ不濟勢と相考居申候、今明日之挙動只相待計ニ御座候、恐々謹言、

大島吉之助

七月四日

大久保一藏殿

追啓上、段々一橋之処疑念起勝ニ御座候得共、長州

江組し候訳とも不被思候、乍然心体不被計候 此時西郷一橋公

ノ胸中ハ探り得サリシコト、書中ヲ以テ知ルニ足レリ、同公、ノ深慮ハ、戦争後同公母堂へ贈ラレタル書牘ニ明カナリ、

(大久保利謙氏所藏本にて校訂)

三四一ノ一  
(別紙) 探索書左ノ如シ

貴墨拝承仕候、如命暑気凌兼候得共、益御壮栄御勤務奉拝賀候、御申越之通今日ハ大目附永井主水正、御目付 (尚志)

戸川 鉉三郎・同小出五郎左衛門其外御徒目附等、当御役所 (安忍) 行所ヲ云フナラン 當御役所トハ伏見奉へ被差越、長藩福原越後御役所へ被召寄候処、同人儀不快之 (有札) 虚病ナルハ後ノ事 趣ニテ、明早朝迄延シ呉候様申出候ニ付、其段役々モ承知ニテ、孰レ明朝ニハ御役所へ越後罷越可申儀ト奉存候、罷越候ハ

應接之模様相分次第御洩シ可申上候、将又即今之動靜等其外模様御洩シ可申旨、差テ相変ル儀モ無之、実ハ過刻ヨリ暑邪ニ当リ、在宿罷在、孰レ明朝早天ヨリ出動可仕候間、猶相变候儀ハ從是可得貴意候、右御受匆々、以上、

七月三日

上封ニ政次郎様常助ト記ス、苗字詳ナラス、

此時福原ハ呼出ニ応シ出頭、応答之事ヲ、嵯峨又ハ山崎ニ在ル国司・益田等へ示談センカ為メ、病ヲ以テ延日ニ及ヒタリト、

三四二 小松帯刀報告 此書前文アリ、腐燻見ルニ由ナシ

一朔日ニ一橋公ヨリ拙者御召ニ付罷出候処、伏見へ大小監察出張人数曳取候様、  
朝命ノ趣相達候間、若自然不承知ノ節ニハ誅伐ノ賦候間、人数差出候儀如何ト御丁寧被仰聞候、此方人数ノ

儀ハ、兼テ非常ノ節

禁闕警衛ノ為メニ残置候間、一橋ヨリノ御達ニテ人数差出候儀ハ、出来兼候段申出候、

朝命相発候上ハ差出候段断切候処、夫ニテ相濟申候、

橋邸ニハ橋邸トハ一橋旅館ヲ云大小監察等出仕ニテ、騷動ニ御座候、

一両宮両宮トハ尹宮・常陸宮ヲ云フ・内府公近衛殿ヲ云フ之所一往

御達之上、不承知之節ハ、

勅命ヲ以御追討之御決定ニ相成居候ヨシニ御座候、其

処ニ相成候ハ、兎角我兵モ不発ニテ不叶義ト、手当

等イタシ居申事ニ御座候、昨夜伏見ニテ、大小監察等

ヨリ

御沙汰之趣御達ニ相成候筈ニテ、出張ニ相成候得共、福

原病氣ニテ前書探訪説ノ如シ今朝迄御待被成下度申出候ヨシ、今

朝御達之上如何之答ニ可相成哉、未否相分、

一昨夜モ四ツ時分ヨリ一橋公参 内ニテ、関東表川越〔檢正直〕

公モ退役ニ相成、久世〔前老中久世広周、同安藤信隆〕安藤再勤之向候間、川越公ハ

再勤、水戸公ハ慎ニテモ被仰付候様有之度段及言上、

御評議之上御書付等出来ニ相成候ヨシ、未右之御書付

ハ拜見不仕候、

一去月廿七日夜ハ既ニ戦ニ可及勢ニテ、御屋敷中モ必死

ニ決心イタシ居候処、其後昨日迄モ只々因循ニ流レ、

色々説モ有之候由、併今朝ハ御達シニモ相成タル筈御

座候間、明日ニハドチラニモ決シ可申、若追討之

勅命相下候ハ、我兵モ繰出シ之賦ニ御座候、先便ヨ

リモ申上候通、一度戦ニハ大義相立候様可致賦ニ候、

此方江モ討手之命相下リ候ハ、天龍寺江向可申候、

一翔鳳丸〔六〕ヨリ申上越候通、人数御差出シ之義ハ、早目

ニ御差出有之度、此末ハ日本中大乱ニ可相成義ト奉存

候間、兎角備ハ嚴重ニ有之度御座候、

一伝奏衆ヨリ

中将様〔國父〕江御書、昨日御留守居御呼出シニテ御渡〔本文〕

良之助〔江モ相下候由、外無之ト之事ニ御座候〕相成候付、御召共ニテハ無之哉ト、

内々 内府公江相伺候処、若変事ニ相成候ハ、命ヲ

御待無之 御出京有之度、御内命之由承知仕候、自然

早々御召ト申事共ナラハ、如何様ト歎尽力イタシ申合

御座候得共、右之形行故今日岩下正左衛門急キニテ差

立差上申候、此節ハ誰ソ差下シ事情彼是可申上候得共、

此方モ人数差支等ニテ、其上別ニ相替候事モ無御座候

付、此上相替候形行等ハ誰ソ差下シ可申上候、先ハ此

旨申越候条被達

貴聞候義共、可然様御取計可被成候、以上、

七月四日巳ノ刻認 小松帯刀

大久保一蔵殿

三四三 七月四日大島吉之助ヨリ大久保一蔵へ送

リタル書牘

去ル廿四日長州之大臣福原越後多人數引連着伏之次第ハ、追々申上越候処相達候半、漸々六ヶ敷勢ひニ成立候付、最初より之始抹細々不申尽、急々之事故ニ御座候間、得と申上越候付、深く御勘考之上御申上ニ相成候儀共、宜敷御計可被下候、扱越後より歎願書差出候儀共ハ、蒸氣船便より写差上置候通之事御座候処、去月<sup>六</sup>廿七日晩方長州勢より伏見ニおひて、會津之堅人數を驚かし、押て踏通上 京可致との趣ニ御座候処、京地大騒動いたし九門御鎖閉ニ相成、各藩堅人數相増、甲冑ニて切火繩・拔身等ニて出張之形勢、直様戰爭之姿ニ御座候間、早速物見として三手差出候処、為何儀も無之、

御所辺騒動不一方次第ニ御座候、堂上方ハ勿論一橋・

所司代・守護職も、大病なから<sup>大病トハ守護職</sup>押て參 殿いた

し候事共ニ御座候処、正親町三條公<sup>(実愛)</sup>より之御議論之趣ハ、長門宰相父子上 京被仰出、其方御不審之廉ハ無之事ニ候得共、家臣之者共三條等江相迫候趣も有之、夫故御勘氣を蒙り居候得共、

勅勘御免被成候段被仰出候ハ、平穩ニ可相慎、七卿方之儀ハ如何ニも御免被仰付筋も無之、脱走之罪不輕候付、其辺は御許容被遊筋も無之段御達ニ相成候ハ、無事ニ可相済との趣ニ御座候処、

朝廷其儀ニ決し居候由、然処一橋夕方より參 内いたし申上候ハ、此節長州歎願之筋御採用相成筋ニハ無之、兵器を携来り

朝廷ニ相迫候儀、臣子之分を越甚以不遵之事ニ御座候、朝威益衰候御事ニて、断然と御採用無之、長州江は歎願之筋も有之候ハ、夫々歎願之いたし様も可有之、繩ニてもかゝり至誠ヲ開き申出候ハ、如何ニも善き筋ハ御採用相成廉も可有之事ニ御座候得共、兵を引て相迫候儀ハ決て御取揚無之、早々人數引払候様御達相成、至当之御事と申上候由、若此儀を御採用御座候ハ、今晚會津を始一橋ニも御役御断可申上候間、長州を被召入、御勝手ニ如何様共可被遊と演舌ニ及候処、

朝廷駭然たる事にて、一言を被吐候御方も無之由御座候、其夜四ツ時分ニても御座候哉、内府様内府様トハ近御殿ヲ云フより御所江早々罷出候様私西郷自ラ江御達有之候付、早速罷出候処、右両様之議論何致至当ニ候哉、無伏藏申上候様承知仕候付、一橋より言上之趣如何ニも尤之議と奉存候付、其処を以御達相成、若不奉承知候て暴発いたし候ハ、其節ハ長州之罪状を明白ニ相記し、朝廷より各藩ニ追討之勅命相下り候ハ、名義正しく朝威も相振り、速ニ攻滅し可申儀と御答申上候て罷歸候処、

朝議一橋之論ニ相決し、和戦共一橋之見込を以所置可致旨、御委任一橋へ御委任後ニ記スカ如シ相成候由ニ御座候、是より先因州より廻文を以、長州之歎願筋御採用相成候様、周旋致し可呉との趣此歎願書も有之候得共、一円不取合、會津よりハ是非援兵差出呉候様偏ニ申來候得共、此御方様此御方様トハ本藩ヲ云フ御儀ニ付てハ、禁闕御守衛 朝命を以被 仰出置候て、夫丈ケ之人数残し置候間、迎も分配いたし候儀、不相調処を以、無抛も御受合出来兼候趣を以相断、朝廷遵奉之筋屹と突立可申一筋ニ御座候処、御屋敷中ニても、長州を救ふ

かよりの(註)會津を助けんにやならん杯との議論も、紛々と相発り候得共、名義正しく 朝廷遵奉之道不相立候てハ、決して不動義と絶て立て切候処、もふハ御屋敷中一体之義論と罷成安心此事ニ御座候、何様議論沸騰いたし候ても、筋合を乱し候てハ不相濟儀とひどく持張候事ニ御座候、一橋殿より長州江 朝命を伝へられ候儀ニ付てハ、幕府之大小監察を以被相達、幾時限ニ伏見引払候様、其時を過し候ハ、弥 朝命を不奉ニ相決し、違勅之罪を正し可申と相達シ、諸方江人数繰出し、堅め付置、急速ニ不相掛候てハ、敵方より先をいたし、却て害を引候も難計候付、堅人数差出候様一橋より小松家呼出し、直達ニ相成候得共、定論通筋を正しく致し、名義を不乱処を以被相答、何分ニも各藩江 朝命を以追討之命を下され候ハ、堅陣を此方一手を以引受可打破段も被申述候儀ニ御座候由、右等之処ハ大夫大夫トハ小松ヲ云フより直ニ御申越ニ相成候半、文略仕候、然処長州江御達之筋今日明日と相待居、此上ハ 朝命を奉し征討可致事と明め居候処、昨日之 朝議今日 内府様江相伺申候処、昨夕四ツ時分一橋參 殿いたし申述候趣ハ、関東ニおひて混雜之儀到來いたし候、



其詔ハ水戸中納言殿より〔補題〕藤江被仰越候は、大和守〔久世広周〕様水戸殿江何之相談も不致、閑老始小監察迄九人之人數退役申付候次第不束之致方ニ付、早速退役申付候段申来、已ニ安藤・久世之兩人再職之向ニ御座候由、就てハ水戸殿ニハ屹と御譴責相成、大和守覆職被 仰出度との儀にて、即夕御書付等も相調候処、得と勤考之上明日言上可仕との趣ニ御座候由、就てハ長州江相違候儀も出来兼候、其詔ハ攘夷鎖港之儀を相尋候節、答様無之と申居候由ニ御座候、前夜一橋より御義論申上候事と甚以相違致候、攘夷等之儀可相拘詔ニも無之、此節之儀ハ、両事ニ相成候詔ニ御座候へハ、是等を以相延候処、一橋之意底不被計、長州江組し候欵、又ハ 勅命を以尾張・越前・阿波・土佐・藤堂等之諸侯御召相成居候由御座候間、其辺之処待合候儀欵、関東之破れを聞て既ニ我身も被退候間、暫見合候賦欵何分不相分事ニ御座候、いつれ大乱ニ傾き候半欵相察居申候、私共之吟味此度長州挫け候ても、此末之処一橋ニ兵権相帰し可申候間、是非筋を正しく致し、

何卒御深察可被下候、長州勢も嵯峨天龍寺ニ三百計、伏見ニ四百余、山崎天王山ニ三百計と申事ニ御座候、多くハ浪士輩と被相聞、破る日ニハ忽ち踏禿ス事ニ御座候、三ヶ所之兵皆応援も出来不申、一方ツ、崩立より外ハ無之事と奉存候、因州ハ一向相助ケ候筋と相見得、備前ハ些扣居候姿ニ御座候、其外之藩ハ少々、面々見込被相聞れ申候、堂上方之処長州一味之方多く込入たる事ニ御座候、尹宮も此節ハ余程御はまりニ相成、是丈ケハ大幸之事ニ御座候、正親町三條ニも説か替り、是非福原を入京被仰付候方、周旋可致呉様、柳原殿江申參候由、内府公之御咄ニ御座候、今日ハ伝奏衆より之御状相違候付、決て御召之事ニハ有之間敷哉と相考候付、内々 内府様迄御伺候処、急速之御事ニハ無御座候由承知仕、安堵此事ニ御座候、私共ニも相考申候処、いまた御上

京〔因父公御上〕相成候儀ハ、些早くハ有之間敷哉、今少し時機を御見合被下候方可宜儀と相考居申候、いつれ大破ニ相成へく事ながら、今之処を以御立直し相成候処六ヶ敷、いつそどちらても相極候上

御出張被遊候方、御宜ハ有之間敷哉と愚考仕候得共、

其刃之処ハ

思食次第之儀ニも御座候間、何分ニも宜敷御取成可被下候、此旨荒々奉得御意候、恐々謹言、

大島吉之助

七月四日

大久保一蔵様

(大久保利謙氏所藏本にて改訂)

### 三四 伊地知正治ヨリ大久保一蔵へ書牘

去廿七日ヨリ分隊ニテ出立、人数押太鼓ニテ山崎前通行之処、山崎方ヨリモ同敷押太鼓ニテ、一手出テ来リ合隊、夫ヨリ鳥羽街道四塚通行、翌朝二手之勢ハ天龍寺着、其前日朝ヨリ寺内ニハ式百許モ入込居候由、幕府ヨリハ右之押へ至テ手薄ク、別手組太泰廣隆等<sup>(寺刃)</sup>出込居候得共、引取人等ハ長人入込居、二條城辺ニノミ<sup>久松勝成、伊予松山藩主</sup>松平隠岐守様・青木様杯両三頭出張有之、伏見・山崎・天龍寺三ヶ所ニ相分レ、数千人之軍勢<sup>長州人数</sup>屯居候由浮説申居候得共、実ハ三ヶ所ニテ千式三百モ御座候段、左モ可有之存候、右之内山崎ハ持重之姿、天龍寺ハ猖獗、伏見ハ静々ニテ剛柔互ニ顯候テ、願意相遂度手筈ト相見得申候、

天朝ニテハ一橋之献言御採用、大小監察

勅意ヲ奉シテ伏見ニ出張、臣子之情合難忍ト之歎願可然事ニハ候得共、数多之人數引連レ都下ヲ令騒動候儀、要君之筋ニ相当不可然候付、早々人数大坂へ令退去、<sup>(元德)</sup>福原越後一人残り、願意之

勅許相待候様被仰渡、若此上不奉

勅意候ハ、其時違

勅之名ニテ御征討有之候方ニ相決シ、既ニ昨日ヨリ大

目附永井主水正<sup>(尚志)</sup>・御目附兩人其外役々、伏見へ下向相

成居申候、御屋鋪ニテハ一変次第直ニ勢揃相濟シ、

禁裏御警衛ハ勿論、万一之形勢ニ付打手之

勅諭モ候ハ、其時御人数被差出候手配迄御内決相成居

申候、其上両公子<sup>備後忠繼君</sup>・弥御壮勇、御自身御出馬之

御差ハマリニ御座候、夫故御屋敷中壮士輩弥勇ミ立、

先々仕合ニ御座候、兵庫遊学生<sup>遊学生トハ兵庫海軍練習所勝安房守塾生其外漢学生徒ヲ云フ</sup>

十四五人追々上京候ニ付、中原猶介仕長ニテ大砲打込

候賦ニ御座候、先ハ今日御飛脚ニテ日々承得候次第共

取束、勿々得御意候、以上、

子七月四日

伊地知正治

大久保一蔵様

参人々御中

三四五 七月四日ヲ以園田彦左衛門鈴木壮七防長

之事情探訪之届

防長之形勢精々探索仕候処、〔毛利元徳 長州藩世子〕長門守様御出京之儀〔當今國原・益田等上京 暴発セントス、故ニ、長門守心算ノ為メ上京スルヲ云フ〕去ル十四日御乗船之由申上置候得共、〔山口県〕三田尻ハ一日御滞留、十五日弥御出船之由、就テハ早船船頭表へ承合候処、其時分不順ニテ、廿二日頃兵庫御着船トモニハ有之間敷哉之由、尤モ惣勢四万人程モ出京致候哉ニ申触候得共、先日モ申上候通上下凡七八千人内外ニ可有之哉、当分山口へモ士分之者相応ニ相残居候由、三田尻・上之關・下之關之儀ハ、彼地第一之要所ニ御座候得共、農・町兵〔町兵トハ農兵・商兵ノニヲ云フ〕共迄纔計出張之由、右ニ付テハ先達テモ申上候通、夷船襲来之節下之關台場前面へ乗来候得共砲撃ニ不及、剩へ豊後姫島碇泊之異船、長人共小船ヨリ乘行キ荷物類差送候由、旁之次第ヲ以テハ決シテ此節柄、内外之事件ヨリ夷人江ハ平穩ニ取計、左様之処ヨリ長門守様御上京相成候哉ニ專取沙汰仕候、勿論私共見受候モ同様ニテ、当分之模様ニテハ涯々渡来之形ニハ相見得不

申候、

一細川家藩中林新九郎外ニ一人防長之事情探訪、先日ヨリ当所へ滞在致居候ニ付、程能ク彼地〔彼地トハ熊本ヲ云フ〕之事情承合候処、此内ヨリ京都守衛トシテ三四百人程相詰居、右交代トシテ五月末方四五百人差登相成候処、此節麥事ニ付都テ其俣罷居、然ニ猶又長州ヨリ多人数出京之段相聞得、家老平野九郎右衛門・備頭溝口藏人〔眞道〕上下二百人許、外ニ士分足輕等帶刀之者千百人余ヲ引列レ、去ル二十一日ヨリ明廿五日迄ニ追々熊本出立、鶴崎ヨリ乗船之由、右新九郎方へ申来、左候得ハ都合千九百人位ニモ可相及ト之旨承申候、以下略ス、

子七月四日

鈴木 壮七

園田彦左衛門

三四六 大坂辺へ被差出人数へ太守様御盃被下

七月六日

御城下五番組一組物主川上右膳〔久野〕、諸郷樋脇・川辺・水引・隈之城・蒲生九五組、大坂辺迄被差出候旨被仰付、当日ニノ丸於外御庭  
太守様御庭前出御、将机ニ被為掛候テ、各一統へ御盃

頂戴被仰付候、左候テ惣宰ノ場町田圖書殿へ御沙汰書  
左之通〔沙汰書記載なし〕

貫ニシテ百六拾貫目

此内

大砲菓五百斤

小銃菓五百斤

此入樽式拾挺

右銘々松良箱入付ニテ荷作、御船奉行へ引渡相成

此度長藩士兵器ヲ携

朝廷へ歎願之儀ニ付、天龍寺等ノ人数引払候様、各藩  
へ説得可致旨被仰渡趣巨細承知仕候、不刃之所業故至

誠ヲ開キ奉歎訴候様被仰出候ニ付テハ、名分大義の然

タル御所置御座候へハ、不服之訳ハ無之儀ト奉存候、

且

朝命ヲ以テ至当之御沙汰相成り候上、説得仕候様ニテ

ハ、

天威ヲ奉損之儀ニ相当可申哉ト深恐入申候間、弊藩之

儀ハ御断申上度御座候間、宜御執達奉願候、以上、

七月八日

御名内

何ノ何カシ

三四八 七月大坂辺へ一陣ノ人数至急出軍ニ付テ

弾菓賦銃菓局上申

一上製銃菓千斤

此内

大砲菓五百斤

小銃菓五百斤

此入樽式拾挺

右銘々松良箱入付ニテ荷作、御船奉行へ引渡相成

候、

一二封度<sup>山野</sup>野砲 火菓箆筒拾六荷 式人持

但二封度野戰砲八挺分

砲挺ニ付式百發宛

一裝菓紙囊百發宛

砲發ニ付六拾目宛

一急火管百發宛

一急火繩拾本宛

右火菓箆筒砲竿入付

合裝菓紙囊千六百發

合銃菓九拾六貫目

合急火管式千式百四拾

合急火繩百六拾本

一雷帽子入箱六ツ

一 砲箱二付 砲万式千五百宛入ル

一 合雷帽子七万五千

一 小銃火藥箆筒三拾六荷

一 式人持

此内

一 八匁玉付裝藥紙囊拾八荷改製分ベ  
ル銃用

一 四匁右同拾八荷雷管機銃  
和製銃用

一 但砲荷二付七百五拾發宛

一 八匁砲發二付三匁宛、四匁砲發二付式匁五分宛

一 右同三拾四竿

一 式人持

此内

一 八匁裝藥千五百發入九竿

一 四匁右同式千發入式拾四竿

一 右同千五百入砲竿

一 但書同断

一 合裝藥紙囊九万發

一 合銃藥貳百三拾八貫五百目

一 右兵士人數四百五拾人分

一 但砲人二付式百發宛

一 十二擗携臼砲火藥箆筒貳竿 式人持

一 但携臼砲四挺分

一 裝藥紙囊四百發入砲竿

一 但砲發二付四拾目宛

一 炸藥四百發入砲竿

一 但書同断

一 合銃藥三拾四貫目

一 但裝藥・炸藥込ル

一 右之木管四百拾本

一 急火管四百八拾

一 急火繩八拾本

一 右小箱入付

一 八匁玉付裝藥紙囊六百發

一 砲挺二付三拾發宛式拾挺分

一 砲發二付三匁宛

一 合銃藥壹貫八百目

一 雷帽子七百

一 右翔鳳丸乘七付用

一 八匁右同三百發

一 砲挺二付同断拾挺分

一 合銃藥九百目

一 雷帽子三百五拾

右安行丸乗セ付用汽船

一八匁右同三百発

砲挺二付同断、拾挺分

合銃薬九百目

一雷帽子三百五拾

右小蝶丸乗セ付用汽船

右御小屋場 御小屋場ハ御城下下馬供屋ノ北後口ニ在リ、遠郷ヨリ在勤  
備フ大小砲銃ノ足輕止宿所ヲ云フ、此郭内ニ大砲格護藏アリテ、非常ニ  
共ニ備ヘタリ 内大砲蔵ヘ格護、御兵具所ヘ引渡相成候、

一七百日野戦砲野戦重砲火薬箆筒式竿 式人持

但砲竿二付百五拾発宛

合装薬紙囊三百発

但七百日野戦砲三挺分、砲挺二付百発宛

砲発二付百拾式匁宛

合銃薬三拾三貫六百目

一二十拇曰砲火薬箆筒式竿 式人持

装薬百発入砲竿

砲発二付百八拾目宛

炸薬百发入砲竿

但書同断

合銃薬三拾六貫目

但装薬・炸薬込ル

一右木管百拾本

一急火管四百八拾

一急火繩五拾本

但七百日野戦砲三挺、二十拇曰砲砲挺分

右三行小箱入付

右翔鳳丸乗セ付用御船奉行ヘ引渡相成候、

一五百目野戦砲野戦重砲火薬箆筒式竿 式人持

但砲竿二付式百発宛

合装薬四百発

但五百目野戦砲四挺分、砲挺二付百発宛

砲発二付八拾目宛

合銃薬三拾式貫目

一二十拇曰砲火薬箆筒式竿 式人持

内装薬百发入砲竿

但砲発二付百八拾目宛

炸薬百发入砲竿

但書同断

合銃薬三拾六貫目

但装薬・炸薬込ル

一 木管百拾本

一 急火管六百

一 急火繩六拾本

但五百目野戰砲四挺、二十拇臼砲壹挺分

右三行小箱入付

右安行丸船汽乗セ付用前条同断

一 五百野戰砲火藥箆筒壹竿

此内 裝藥式百發

但壹發ニ付八拾目宛

合銃藥拾六貫目

急火管式百四拾

急火繩式拾本

但五百目野戰砲式挺分、壹挺ニ付百發宛

右小蝶丸乗セ付用ニテ御船奉行へ引渡相成候、

合銃藥六百八拾三貫七百目

斤ニシテ四千貳百七拾三斤壹合式勺五才

合火藥箆筒九拾七筒

此内

三拾六筒 壹人持

六拾壹筒 貳人持

合火藥樽式拾挺

二 封度砲八挺

五百目砲四挺

七百目砲四挺

携臼砲 二挺

二十拇臼砲二挺

小銃四百五拾挺

右通此度大坂其外へ出軍御手当ニ御座候、此段御届  
申上候、以上、

銃藥方掛

吉村才之丞

木脇休五郎

西田源左衛門

矢野平八郎

平 吉左衛門

右京師へ至急廻漕ノ準備ニシテ、本日迄悉皆積入レ、同

十日大坂ニ向テ兵隊ト俱ニ發航セリ、

三四九 在京小松帶刀ヨリ大久保一藏へ照会

於其御地

上々様御揃被遊、

御機嫌克被為

入恐悅奉存候、於爰許両公子両公子トハ忠鑑・久御安康被遊

御座、恐悅御同慶奉存候、当所ノ形行ハ去ル四日岩下

正左衛門便ヨリ申上候通、其後ノ形行左ニ申上候、

一伏見天龍寺等ノ人数別段相替候挙動ハ無之候ヘトモ、

例ノ虚謁ヲ以諸所へ人数分配致シ、多人數ノ模様ヲ示

シ候向ニ御座候、天龍寺ヨリ太刃迄モ出張致シ、龜山

へ幕張等ニテ勢ヲ張候形ニ御座候、扱テ先日大小監察

先日大小監察トハ、永井主水正等ヲ云フヨリ達ニ相成候後、未為何事モ不申出、

又々昨日各藩ヨリモ説得致候様

御沙汰相發、此方へモ所司代ヨリ御達ニ相成候ヘトモ、

何分不筋ノ事ニモ有之、吟味ノ上御断申出候、御達并

ニ御断ノ書面ハ、御家老座ノ方ヨリ差廻候付、別段差

越不申候、明後十一日迄ニ説得致候様トノ達ニ有之候、

若其内不承服候ハ、何様ノ御処置ニ相成可申哉、追

討ノ義ニテモ被仰出事カト相考申候、

一朝廷ノ所執レモ様例ノ因循相初リ、御自分ノ御身カマ

へニテ至公至平ノ御所置モ出来不申、両宮・内府公尹官・常陸守

近衛殿ヲ云フノ御所へハ、大島ト昼夜尽力致候得共、何分御身

ノヲソロシサニ何事モ不被行、実ニ

朝威ノ衰へ候ニ至リ候義切齒ノ至、何トモ難申上候、

一橋公ニモ初ノ程トハ少シ寛ニ相成、旁不審モ起候事

共ニ御座候、一橋公ノ御考ハ各藩説得致、其上不承知

ナラハ一橋ヨリ追討相願候間、其上ニ御免ニ相成度杯

被申上候由御座候、此方ノ趣意ハ、

朝命ヲ以テ歎願ノ趣意ナラハ穩ニ可申出ノ処、兵革ヲ

携へ出候次第御不幸ニ被 思召候間、早々人数引取、

福原ヨリ謹テ歎願致候様断然御沙汰ニ相成度、其上ニ

モ不承知ナラハ、達

勅ニ相成申候間、其節ハ被成様モ無之、是非至当ノ御

所置ニテ

朝威相立候様申立置申候ヘトモ、何分其義被行兼候勢

ニ御座候、例ノ御身カマへ御推察可被成候、併十一日

方ニハ何トカ相分可申候、

一江戸表モ水人四千人武田覺計金ヶ原ニ押出シ、当分水府

公へ随從ノ結城等ノ人数ヲ打破、当分君ヲ押立、攘夷

ノ筋ヲ相立度トノ趣意ノ由、大平山トハ又別ニテ、矢

張大平山ハ出張居候由、閣老モ酒井・板倉等モ退役、

松平大和守モ退役ニ相成、既ニ久世等再動ノ模様ニテ



候へトモ、弥再職ニ相成候事ハ承不申、(正外 老中)  
白河阿部守後

閣老被仰付候由、右辺ノ事ニテ、一橋モ大心配ニ被聞  
申候、

朝廷へモ申上ニ相成候付、別紙ノ通

御沙汰ニ相成候由、誠ニ紛乱ニ御座候、日本中ノ大乱

ト被存申候、去ル四日益満休之助・坂元彦左衛門両人

此二名江戸ニ於  
テ擊劍生徒タリ当所へ差越、其段申出申候、

一横濱ニテ御取入ノ軍艦(汽船乾康丸ナリ、○此艦ハ英國製ニテ、セハ、  
テ擊劍生徒タリ)バノナリト云フハ、

岩下方働ニテ御代払モ相濟候由、夫丈相分申候間、定

テ長崎へ乗廻ノ都合ニ可相成ト被存申候、

一前文ノ通江戸表モ紛乱ノ形勢、且軍艦一条其外幕役等

へ相掛候曳合ノ事、且非常ノ事モ難計候付、御屋敷モ

皆々岩下滞府相願居候由、入塾等仰付置カレ候人数モ、

岩下主宰ニテ居合モ相付候間、此節下リニ相成候テハ

甚込入候間、御用ノ御模様次第ニハ暫ク滞府有之度ト

ノ趣、嘉藤次(越之)ヨリ申趣候得共、何分其御許ヨリ被仰

越候御用筋ニテ、何トモ難申上候、併孰レ市來(六左衛門  
ヲ云フ)

出府ノ上ナラハ、今暫クハ間モ有之事、勿論差掛變事ニ

テモ起候ハ、打捨罷下候義モ難相叶御座候付、江戸表

御用濟模様次第罷下候様被仰付候テハ、如何御座候哉、

御勘考ノ上可然御勘弁相付候ハ、御伺 御沙汰次第

江戸表へ御懸合被下候テモ、又此方迄御問合被下候テ

モ宜敷御取計有之度候、実ニ仕掛ノ御用打捨モ不相成、

軍艦御取入等ノ様ナル事ニ相成候テハ、余人ニテハ六

ヶ敷意味モ可有之被察申候、

一江夏蘇助義ハ、海江田(信義)杯交代ノ旨被仰越候へトモ、

格別其御地勤場差支ト申義ニテモ無之由候ニ付、当分

ノ処ニ被召置度申談候折柄、岩下正左衛門無拠御暇申

出趣有之候付、被差下候方ニ吟味致、右跡役ノ処へ土

師吉兵衛寄役被仰付、右土師跡物主江夏へ被仰付候ハ

、組中引立方ニモ可宜、吟味ノ上其通ニ取計置申候、

伺ノ上取扱致可申候へトモ、差カ、リノ事ニテ直ニ被

仰付候、是非江夏ハ罷下候様無之テ不相濟候ハ、何

分御問合可被成候、右ノ形行可然様

言上可被成候、

一土師御儀モ御作事奉行辺ニモ御召使相成候ハ、ハマ

リ可申候間、御作事奉行動被仰付如何可有御座哉、御

勘考ノ上可然トノ事ナラハ御伺、其上ニ思召寄不為在

候ハ、運相付候様有之度奉存候、

一松平(茂昭 福井藩主)越前守様去ル五日ニ御国元御立ニテ、十日ニ御着

京ノ由ニ御座候、

右之外差掛申上候儀無御座候、考出シニ任せ、次第不同ケ条ヲ以相認差越候条、被達

貴聞候義ハ可然御取計被成度候、已上、

七月九日

小松帯刀清

大久保一藏殿利

再白、江戸ヨリノ定式飛脚昨日相達候付、留置今日

差通申候、

### 三五〇 大島吉之助ヨリ大久保一藏へ書牘

残暑甚敷御座候得共、

御両殿様益御機嫌能可被遊御座、恐悦之御儀奉存候、

次ニ貴兄御同慶奉賀候、陳は長州御所置ニ付てハ、名

分大義御当然之訳にて、決て御異論之筋無御座候処、

長州荷担之堂上

尹宮并陽明殿杯を奉刺杯と長人及ヒ淨波聲の説相起候処、

例之御持病御持病トハ驚怖、恐怖直様起立、段々と建言仕候

ても難被行勢ニ成立、残念之至ニ御座候、此機会不可

失時にて、

朝威可振立之処如何とも難致、血涙を吞候事共ニ御座

候、一橋ニも初日之議論も稍変し、何分不断之姿ニ相

見得申候、関東表大破関東表大破トハ、前ニ記シタル如ク川越候等免職ノ事件、或ハ武田・田丸等當野ノ間ニ勃興セシラユニ成立候処より如此次第、暫勢ひを見合候事歟、

或長州江内応之説も相弁候得共、いまた夫程ニハ参り

申間敷、乍然安心ハ出来不申事ニ御座候、久世・安藤

再職との説も追々相響候得共、いまた慥成事ニハ無御

座候、川越覆職之儀、

朝命を以御沙汰相成候付てハ如何ニ成立可申哉、安藤

等再役いたし居候てハ、迎も奉し申間敷と相考候次第

ニ御座候、右等之挙動も不相分候付、様子を伺居候も

のにてハ有之間敷哉、安藤権を握候ハ、一橋も危き事

ニ候得ハ、夫より氣後れいたし候半軟と、推察いたし

居申候、昨日ハ閣老より御留守居呼出有之、長州人数

引払候様、

朝命を以被仰出候付、各藩よりも説得可致旨御達し相

成申候、右ハ畢竟一橋草稿相認、ケ様ニ御沙汰相成候

様建言仕候訳ニ御座候へハ、何篇一橋之手限りと申も

のニ相成、

朝権衰れ行候事ニ成立可申歟、宮方ヲ云フトハ尹宮陽明殿

杯之処一橋江任置候得は、後難無之との事計にて、

朝威之振か振はぬかハ全御構無之御事ニテ、意恨之事  
ニ御座候、御察可被下候、右ニ付大道之筋ヲ以説得之  
処、御断申上候儀ハ表通御問合可相成候間、文略仕候、  
右説得之一条ニ付、因州より出会いたし呉候様御留守  
居方江申来候得共、右同様之振合を以出席断申遣候、  
至当之御所置を以

朝廷より御達之筋不奉候てハ、違

勅之名を蒙候義ニ御座候得は、決して説得可致筋も無之、  
別ニ余論無之候間、可及御断との事ニテ一向打合不申、  
因州ハ長州荷担之巨魁ニ候ヘハ、決して取込之策も難計、

当分ハ因州ハ元来長州左祖ナルカ故、本藩ニ説キ、  
合従連衡セントセシコト後日ニ顯ハレタリ、

朝廷遵奉之筋を一凶ニ立込、少シモ不動候処、外より  
ハ動静不被計、双方より望を掛、味方ニ可引入との事  
ニテ、幕府之方より八十人位ニテも守衛を出しさへ呉  
候ヘハ幕府八十人位ニテ守衛云々、本藩、諸藩振はまり可申候  
ハノ兵ヲ出セヨトノ懸達アリシヲ云フ、諸藩振はまり可申候  
付、何卒して人数を繰出し可呉との訳ニ御座候得共、  
初度之挙動不容易儀ニテ、勢ひニ乘り俄ニ人数共繰出  
可申時態ニテハ無之、無抛兵を動し候ものニテ無之候  
てハ不相濟、勿論筋合を慥ニいたす処肝要之義と奉存  
候付、些とも動揺不致、英氣ヲ養ひ居候事ニ御座候此如

動揺セサリシハ尤モ良策ナリ、久光公御遠京ノ時禁關守、此十一日限  
護ノミニ心得肝要タルヘキ旨、嚴シク含メラレタルニ依ナリ、  
ニ引払候様御達し相成候付てハ、此度迄不立退候て、  
いつれ

追討之 勅命相下り可申儀と奉存候付、其節ハ正々堂  
々之兵を以長賊を駆尽し可申と相待居申候、長州之後  
詰之勢三千人追付着坂之段後詰トハ則チ長門守引  
上京ノ兵ヲ云フ注進來候由、  
如何ニ致しても京地ニおひて暴を働き候ハ、関東之  
様ニハ参り申間敷、只今之処ニテハ會津之一手を以可  
打破と相考居申候、近方之諸侯江御召し相成候勢追々  
馳来、越前当候も十日ニは御着 京之賦ニ御座候由、藤  
堂并尾張辺之人数ハ日々集り来候間、迎も長州より破  
付候儀無竟東事申迄も無之事ニ御座候、去月廿九日ニ  
八下之關辺二艘之夷艦相見得候由、慥ニ相知れ申候、此  
儀ハ関東より先達て英夷横濱出帆之砌、申遣相成候儀  
ニ御座候、上海より長州人兩人長州兩人ト、則チ藤博文、井上聞  
太、舊旧名ナリ、後ニ詳記ス  
を列来居候処、右を乗せ幕役人乗込致出帆候由、就て  
ハ此式艘之軍艦と長州表ニおひて不戦候得は、決して和  
を取組候ものニ相違無之、砲発いたし候得は直様横濱  
より数艘之艦を可差廻と申来居候、和戦之処慥ニ相分  
り不申候、如何之模様ニテ御座候哉、一左右相待居候

儀ニ御座候、ケ程無謀之攘夷論を唱居候て和を構候て  
バ、長州ニハ天下之人望も相離れ可申、弥戦ニ決し候  
ハ、追付襲来可致事ニて、内外差迫候事ニ御座候、此  
旨当地之形勢荒々如此御座候、恐々謹言、

七月九日

大島吉之助

大久保一蔵様

〔大久保判書氏所藏本にて校訂〕

### 三五一 木場傳内長州人上京云々ノ書翰

一筆啓上仕候、残暑難堪御座候処、愈御壯健被成御勤  
欣然之至奉存候、私如形相務申候間、乍憚御放念可被  
下候、当地其以後之形勢差て相変儀無御座候得共、追  
々長州人数為差登大ニ勢ヲ張候模様、夫故京都縉紳家  
一橋等之処御恐縮、一向墓々しき御評議ニも至り兼候  
様子と被承申候、いつれ慥成事ハ大嶋等より御聞取可  
有之、一昨日境より人数上陸、江州石山寺江取籠り候風  
聞御座候間、今日早飛脚を以聞合差出置申候、去ル一  
日高柳八次郎小倉出帆、田之浦隣湊文字ト申所江汐掛  
りいたし居候処、相凶之砲声下之關江相聞得候付、山  
江のほり見候処、長州地ハ早馬又ハ步行等ニて人数奔  
走大混雜、豊後路より四国路江掛ケ異舟二艘相見得居

候由、翌二日同所出帆之処、下之關の方江船火事相見  
得、これはいかゝと申候処、船頭とも申候ニハ、越前  
之船汐掛いたし居、先日より焼払との説御座候間、定  
て夫ニても可有之や、出シハ丸之内ニ二印ニて為有之  
由申居候由、いつれ異船の手を借てなりと、当分京都  
之切迫をゆるめ候様之計策も有之度事と奉存候、

一、濱村孫右衛門七日之日參り候て咄候ハ、去ル四日  
異船二艘豊後姫嶋ト申浦江參り、長州に承接ニ參候間、  
漁船式艘借候様無理ニ申し、姿ハ日本人之衣服を着し、  
右船より長州江乗行候由、小倉留守居咄ニ御座候由承  
り申候、

一、岩國仲仕とも咄ニハ、異船九艘、五艘ハ下之關近  
ク江掛り、四艘ハはるか沖の方ニひかへ候との風説い  
たし居候由御座候、

一、当地は長州人数追々着、川登りいたし申候間、夫を  
御届申上候位之事ニて、別段御届申上候程之事も無之、  
雜説ハ数限りも無之、いつく江筆立様も無御座候、依  
て別段御家老衆江御届も不申上候間、宜様奉頼候、  
一、屋鋪中も二奸出立後誠ニ静謐、永山源兵衛上坂、  
別て仕合ニ御座候、本ノマ、いかてか進物ヲほしかり、小権を

弄し候ハにくむへきニ御座候へとも、是は小害堪忍いたさねハ人はなきはづニ御座候、

一、砂糖も三匁分より追々下落いたし候へとも、当分式匁式分にて留り申候間、仕合ニ御座候、右ハ江戸諸色直成下ケト、此節柄之物忌ニ人氣相禿為申由御座候、守衛方も為御登相成筈の由、宿手当旁大混雜御座候、これニハ又御物入も相重可申、心配いたし居候得とも、随分砂糖代にて仕操出来可申、自然上様方御上京ニも相成候ハ、、迎も費用続丈ニ無御座候、乍然此訳もなき娑婆ニめつたニ御登りハ被為在ましくと、窃ニ安心いたし居申候、自然右様之事ニも御座候ハ、、早ク為御知被下候様奉頼候、此節よりハ相撲も六ヶ敷相成申候間、早ク精力を尽して、精切レのいたさぬ所肝要ニ候半欵、

右申上度如此御座候、時分柄御保養專要奉存候、恐惶謹白、

七月十日

大久保一藏様

木場傳内(清生)

参人々御中

二白、御望本ノツの文と屏風も出来居申候、酒も蒸氣船便

より少々も下し申候ハ、、痛も有之ましく候間、左様可致候、おふくさま御塩梅も宜由大悦奉存候、税所江御伝言を以、林出立遅引之儀被仰越候へとも、最早着も有之候半、御内用くとして一向埒明不申、三拾日めニ出立相成り、中途も筑前辺江、御内用を作りたてねハならぬと、申居られたる由御座候間、定て隙取相成候半と奉存候、何も咄ニなる事ニハ無御座候、噂もいたし度無御座候、大笑、  
(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

三三二 木場傳内ヨリ大久保一藏へ書翰

本文御問合之趣委細致承知候、此段御返答申上候、以上、

大坂

(慶応二年)  
寅七月十一日

木場傳内

大久保一藏殿

御国元江御蒸氣船致着帆候ハ、被相札候て、同席又は御用部屋より之御用封等有之候ハ、、早々可被差登候、差急御用之儀も可有之候間、此段申越候、以上、

七月十日

大久保一藏

木場傳内殿

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

三五三 木場傳内ヨリ大久保一蔵へ楠公社御造立

二就テ書翰

楠公社御造立御用ニ付、石材之儀相糺申候処、材木之儀は都て元々江差返候得共、石之儀は大小数百拾貳本神戸西鳩江差置候得共、嘉納次郎助方より三里計も有之、不弁利之場所付、当所南御屋敷江取入、御蔵御修甫用召仕候ては何様可有之哉、大嶋吉之助江申越候処、別紙之通返答相達申候、右之外ニは何も石材等無御座候、且又場所地之儀も大嶋吉之助見分被差越管候付、追て見分濟之上、何分可申上候、別紙相添此段申上候、以上、

大坂

子七月十日

木場傳内

大久保一蔵殿

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

三五四 黒田嘉右衛門書翰

御離袖後愈御壯康遊戯御三昧奉遠賀候、御立後不相交酒事ニテ消光、七夕ナドハ大酩酊于今コタへ居申候、自慢ニナラヌ事ニ御座候、御笑察可被下候、先日岩公

江申上候内 大樹公御他界ノ説紛々、于今止ミ不申、高階ハ滞坂ニテ毎日御診脈申上候トノ事、一向虚実相分リ不申、コレハ其砌朱粉沢山御買上ケ相成候ト、福井・三角ノ両医早々上京相成候ユへ、諸人疑ヲ起シ候歎トモ被考申候、

一、肥後モ出兵イタシ候処、何歎故障筋申立、追々人数引取候風説、

一、肥前ハ、長州ハ上方筋往来ノ場所ニテ、兼テ心安ク付合候モノモ家来中江有之、自然何様之異変引出候モ難計トノ趣ヲ以、出兵御断相成候トノ事、此両条勝安州咄ト申事ニ御座候、実否イカ、ニ御座候ヤラム、一、因州ノ廻米ヲ馬關ニテ長人奪取候ユへ、因州大ニ致立腹、出兵ノ筋ニ相決候ト申風聞御座候、

一、去ル廿二日阿久根ノ盛徳丸馬關通帆ノ節、鉄砲討掛候ニ付、碇ヲロシ候処、小船江数十人乗込何国ノ船カト相尋候間、薩州ノ船ノ由御返答イタシ候処、然ラハ差支無之候間、罷通候様申聞ケ候付、直様罷通候由、外ニ何モ承リ候儀無之由申出候、

一、別紙差上申候間、御落手可被下候、右其後ノ御尋カタク、如斯御座候、恐惶謹言、

七月十日

三五五 木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰

先日は〔虫喰〕難有拜見、先々御壮健珍重奉存候、竹縄御  
 ふち一条、初発いち、壯之丞周旋にて小松家江申上、  
 其節ハ御ふち金被下ニ不及、御抱之名目さ〔虫喰〕候へ  
 ハよろしとの願にて、其通いち、より小大夫江申上た  
 る由候処、左様なら御抱ニ相成候ても可被宜との御沙  
 汰ニ為有之由承居申候、しかれば私より突然と御ふち  
 金被下方申上候儀も、取付キ先無御座候間、竹縄より  
 水火其外何そ之急變有之節ハ、弟子共引列レ似合之御  
 奉公仕度趣願書差出させ、夫ニ添書を以御ふち被下方  
 申上候ハ、いか、可有之や、其許之都合向小大夫江  
 御打合被下様いたし度、尤被下方之多少取究メかたく、  
 御銀主支配人共御ふち銀五枚被成下候間、五枚欵拾枚  
 ほと銀ニテ被成下候ハ、格別之御出方ニも無之候間、  
〔虫喰〕金にてハ当分過分之御出方相成申候間、右之通勸  
 考いたし申候、早速御返事可申上候処、東郷源左衛門  
 下坂、三井方御預金一条之もつれ札方有之、右江隙取  
 御失礼申上候、右之〔虫喰〕菱や申口相替、亦もいはれぬ

次第と相成り、つまり私魚忽ニ格護相究メ差扣書差上  
 候含ニ御座候、片言獄ヲ折メシ人由ノ如キアラハ、一度  
 ハ瞭然ト相〔虫喰〕も可有之哉とそんし候事御座候、例之  
 むだ書又いたし申候、とふそ御聞捨ニ被成置可被下候、  
 右御答まで如此御座候、以上、

七月十二日

木場傳内

大久保一蔵様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

三五六 子七月十三日御軍賦役大山格之助従浪華

来翰写 (市來廣貫へ)

一輪拜呈仕候、炎暑甚敷御座候処、弥御安康被成御連  
 勤奉珍寿候、扱ハ前之濱出帆、海上無恙十二日未明着  
 坂イタシ候間、御放意可被下候、  
 諸所港々ニテ当地之模様相探候へ共、一向相分不申着  
 坂イタシ候処、色々雑説而已今ニ如浮浪世体ニテ、長  
 モ弥相募リ、既ニ過日ハ所々人数引取候様御逢相成候  
 処、彼申分ニハ委細奉畏候へ共、何分諸所相散シ居候  
 間、兩日ハ御宥免被下度、追々人数引円シ引取候ト申  
 出候由候得共、弥人数モ駈登リ候扱ト申触シ、例ノ虚  
 喝ニ乘リ七転八倒ノ形勢ニ御座候、乍去早々不引取候

ハ、不日ニ一変可罷成、併愚案ニテ詰リ相引ト被察申候、今日ハ又益田四百人ノ手廻ニテ出張カト申触シ、長門守ニハ今十三日国元出立、夜白通行上京トモイヒ、一々不足信用候、扱尤早御聞及ビモ為有之筈、異船二艘下ノ關・三田尻辺ヘ滞船測量等イタシ、既ニ近日差向候模様ニテ、何分此機会面白次第御座候、爰許木場傳内ヨリモ態々早船取建、長防迄被差遣候処、右ハ昨日帰帆ニテ、当分防洲沖三里計リ之処ヘ船繋致居候ヲ見届候形行之咄ニ御座候、尚追々其御地ヘモ相響キ為申筈ト致想像候、

一当城ヘ紀州公居城之処、高松ヨリ多人數昨今ニ相掛出張、其外近国譜代衆人城相成、両三日跡迄七日ノ間ニ堀切并ニ陸台場等出来候由、其外大小藩追々出掛相成申候、

一左之通長ノ儀申上候ヘ共、何分諸所ヘ潜居、兵糧等ハ十分相運候由ナレバ、又唯乘ニ引取モ千カ千落着無御座候、其地追々時実聞取次第御注進可申上候、

一今十三日上京之賦候ヘ共、昨今高松多人數川登、長モ同伴ニテ居船一艘モ無之、夫故今晚ヨリ明朝ニ相掛川登之賦ニ御座候、

一昨十一日夜入時分藝州御手洗江滞船イタシ候付、彼地ヘ付役差遣シ、彼是模様探候処、則薩摩屋敷ヘ同道ニテ参リ形行申出候、

一去ル三日昼八ツ時分上之方ヨリ早船八艘入津ニテ、一艘ニ凡ソ百人内外乗組ト相見得候テ、右之内ヨリ八人上陸、右薩摩問屋ヘ参申掛候ニハ、此地ヘ薩州交易会所相立候由、何方ニテ候哉為知可申ト申掛候ニ付、当地ニハ右様之場所ハ、未全不承及候ト致返答候処、又薩・藝ヨリ之役人共出張居候由、右何方ヘ寄宿イタシ居候哉、是非面会可致申掛候得共、是以当分毛頭出役無之由相答ヘ候ヘハ、夫ヨリ遮テ探リモ不致、諸所徘徊引取候テ当晚出帆、尤港口ニテ大砲六発打鳴ラシ引取候由、然処其折鬼塚・柿本モ参リ居候処、早々為忍候段申出候、右致上陸候外船方之者ヨリ、此人數ハ此間ヨリ備前君侯長州ヘ御下リニテ、為御迎差越申ト相匂ラン候ヨシ、尤モ中国ヲ差シ船ハ下リ候由ナレハ、全く備前ニテハ無之、例之長カ虚喝ニ相違無御座候、一昨夜ハ酒買ニテ差遣候処、返リニ琉球通宝四枚参リ候付、今日ハ試ニ屋敷ヨリ遠方ヘ買物ニ遣候処、無如才相通リ申候、爰許ハ最早十分ニ相開申候、先荒々任繁



雜亂筆如斯御座候、恐々頓首、

七月十三日

大山格之助(綱島)

三五七 天龍寺討手配

子七月十八日、於京都御目付戸川鉾三郎様・小出五郎(有札)  
左衛門様ヨリ一橋様御旅館江御呼出シニ付罷出候、大  
目付永井主水正殿御目付別御兩人様御列席ニテ、主水  
正様御直ニ御内達有之、尚表向ハ御達ニ相成候由被仰  
聞候、

監軍 一人

伏見討手配

先ノ一 戸田采女正(民杉 大垣藩主)

先ノ二 井伊掃部頭(直憲、彦根藩主)

但人数計

二ノ見 松平肥後守(谷保、会津藩主)

松平越中守(定敬、桑名藩主)

但前面之諸軍ヲ令シ進退ヲ司ルベシ、

監軍 一人

但二ノ先ニ直リ

遊軍 有馬遠江守(道純、丸岡藩主)

小笠原大膳大夫(忠時、小倉藩主)

天龍寺討手配

右ノ先 松平修理大夫(島津茂久、薩州藩主)

右ノ先 本多主膳正(康綱、膳所藩主)

右ノ二 松平越前守(茂昭、福井藩主)

但右軍ヲ統

左ノ先 大久保加賀守(忠礼、小田原藩主)

左ノ二 松平隠岐守(久松勝成、伊予松山藩主)

但左軍ヲ統

遊軍 青山因幡守(忠敏、篠山藩主)

締り備 松平筑前守(慶家、加州藩主)

但三條辺洛外ニ押出シ、臨機応援、

奇兵

監軍 老人(慶廣、熊本藩主)

細川越中守(慶頼、久留米藩主)

有馬中務大輔

右之通可相心得候、

外ニ山崎辺手配有之由、

三五八 木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰(兼春一条)

三五八ノ一

七月十八日

木場傳内

大久保一蔵殿

兼春方一条を半方相糺候処、此儀ハ表通之計ニ無之候間、帳留等も無之、乍然半左衛門存生内承候趣ハ、先年御改革之節大坂江

上様被為入候てハ御物入有之候付、伏見より山崎通、

又ハ枚方より直様西ノ宮御泊り相成候節有之之砌、諸

人御賄料被相渡候付、近半手代とも彼地江出張候節、

兼春所江宿いたし候処、調所様御付々之御役々様より

御諭シにて、右宿代之心持にて銀五百めツ、兼春江遣

呉候様承り、其通いたし来候処、其後大坂御通行相成

り、御賄渡に付ても伏見江出張不申候付、右五百めも

遣し不申候処、其後金百両兼春より預り、右利足遣候

処、右も一往彼方へ返呉候様承り、其通いたし候処、

其後又八拾兩持参にて預り呉候様承り、当分右八拾兩

利足年々無滞遣候旨申出申候間、左様御聞通可被下候、

金子百両預ケ之後之事ハ、先日差上候永井覺書ト符合

いたし居、前之方ハ大同小異ながら、此方之情実能ク

相聞得候様被考申候、取込ニまかせ用事迄早々申上候、  
以上、

(明治三三年九)

七月十八日

木場傳内

大久保一蔵殿

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

三五八ノ二  
包紙

大久保参議殿

木場清生

御親展

舌代

先日謙蔵を以申上置候通、明日は於拙亭一会相催度、  
(友吏) (安禱)  
吉井・重野等江も申置候間、御退出より御光来奉希候

也、

(明治九)

三月廿八日

木場清生

甲東君

玉案下

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

三五九 天龍寺へ楯籠ル長軍乱入

七月十八日天龍寺へ楯籠ル長軍四百人余、宵ヨリ押立  
候半、未明既ニ會津・筑前御固メ、九門ノ内中立賣御  
門ニ襲来り、互ニ大小砲発煙ノ下ヨリ入乱、血戦稍時

ヲ移ス、越前・桑名ノ兵モ馳合及戰候処、中々長兵勢強ク、終ニ中立賣破門ニ及ヒ、同勢崩立散々ニ相成、長軍益々強勢、已ニ六門ノ内 公家御門へ攻入、鳳闕ニ廻ラントスル処、乾御門警衛ノ薩軍、御城下一手ノ兵士死ヲ争ヒ、アヒ／＼声ニテ大砲押掛、無透間打立テ候処、サシモ盛ソノ長兵是ニ辟易シテ、散々ニ相成、多クハ鷹司殿へ逃込ミ、門ヲ閉暫時廻合タレドモ、大砲・野戦砲夥敷打掛ケ、煙ノ乱レニ乱レ入、火相掛ケ大門打破リ、小銃劍戟ヲ以テ打伏セ突留、此時越前兵モ馳合共ニ攻打候処、不得止悉ク逃退ク、此時過半打取タル欵、長敗軍ハ丹波路亦ハ山崎口江、五人・十人許ツ、モ列ヲ乱シテ逃去タル由、更ニ行衛不相知、其日中殘党爰彼所へ逃ケ隠レタルヲ、追留メ／＼引出シ、

天誅ヲ加フルコト恰モ<sup>(文)</sup>狩ノ如ク、日入時分軍終リ、薩軍得タル所ノ首級二十五・生捕十二人・大砲八挺・小銃五十挺、乾御門内ニテ周防殿・圖書殿実檢有之、凱歌之式行給フ、誠ニ薩軍ナカリセハ 禁闕ノ危キコト此一挙ニアランカ、既ニ雲上公卿衆モ會兵ヲ強兵ト聞シニ、薩兵八十倍ト賞美シ給フトカヤ、実ニ武ノ礎

也、其外諸郷ニ阿久根・出水・水引物ニ初、イツレモ諸所ニテ其日ノ分捕高名拳テ不可計、追テ分明ナルヘシ、爰ニハ其形勢一挙ヲ記スノミ、同日又々天龍寺へ可向段監察ヨリ被相達、一旦二本松御邸へ引取りノ上、御城下一手・諸郷四手、其夜七ツ相図同所へ押寄取掛候処、尤早落失候跡ニテ、生捕一人也、同寺放火近辺嵐山辺火移リ、法輪寺其外燒失致シ候、山崎・伏見追打勢モ何方モ人数引取ノ由、此時大砲・小銃・物具・太刀等得物不数知、

薩兵其日ノ戦死

野村勘兵衛

宮内彦二

阿久根郷士

六人

水引郷士

七人

手負人数

大島吉之助

川上助八郎

税所長藏

土師吉兵衛

赤井兵之助

阿久根郷士

二人

樋脇郷士

一人

一 伏見藤ノ森・濃州大垣戸田采女正相図居候処、同十九日未明、長州家老福原(元備)越後、凡兵卒百五十人程引列押寄せ、互ニ大小砲銃射放双方入乱及戦争候処、長兵甚勢強ク、大垣勢モ既ニ相見得難防留候処へ、横合ヨリ彦根ノ勢兵三百人程押出シ、大小銃無透間打掛、伏見長洲邸へ放火致シ、長軍相破及敗走散々這々ニ逃去、此両手ノ戦ニ長兵被打殺、又ハ戦死手ノ数多有之、同所川船ニテ三艘程死骸山崎ノ様差送タル由、大垣・彦根モ過分ノ戦死有之由候得共、幾人ト云フ事分明ナラス、同廿日大坂御城近辺へ夥シク砲声相聞得候処、長兵一昨十八日、京都或ハ伏見藤ノ森合戦ニ打負ケ、手負ノ者共十五人位川船ニテ大坂長州屋敷へ送越候、難波橋マテ幕手ヨリ五人射留、十人生捕、櫻ノ宮ニテモ同数讃州高松ノ手ヨリ十三人生捕、翌廿一日又々長兵三十人同

断、大坂へ逃下リ候処、難波橋其外諸所固メ敵シク難通、無是非櫻ノ宮へ上陸、一同致自殺候ニ付、死骸ノ儀ハ彼辺警衛人数ヨリ取揚候由、右大坂御屋敷ヨリ聞合トシテ、伏見へ被差出候者ヨリ注進、

一 京都騒動央長藩大坂へ乱入放火致候段風聞専也、

市中ノ動揺不斜、江戸堀筋家財等木津川筋へ運事夥敷、

大坂城中紀州、難波橋辺高松固メ也、

一 中立賣烏丸北ノ方野戦砲ニテ打掛、十三人討殺、

一日野様所へ追込候処、稍々降参ニヒトシキ言葉有之候

処、洩レテ北門ヨリ逃去、追討ニテ九人討取、

一 醍醐様所へ隠レ火掛候処討取、都テ七八人位、

一 播州室津へハ、毛利長門守兵卒数百人引列押出候聞へ

有之候得共、実説ノ儀ハ分リ兼候、

長門守ハ播州磨野山兵卒引卒国許へ曳退候処、肥後

藩行逢候段、佐賀關ニテ安行丸へ差越候節相嘶候由、

三六〇 勅使九州御下向ニ就テ云々

黒崎さつまや仁右衛門より聞得候風説

一、勅使九州御下向之儀ハ、当月初方より風聞有之候

へとも、其節ハ長州迄ニテ相済ト申風説も有之候由、

長州京師都合向別てよろしく、征夷<sup>本ノマ、(洛カ)</sup>□將軍トやら被仰付候との風聞もいたし候由、右ハ専先般夷船打払之一条、<sup>(山口県)</sup> 叙慮ニ叶候との事、

一、勅使ハ正親町少將様<sup>(公賞、備後監察使)</sup>にて、六月十日宮市江御着、同十六日長州山口江御着、御滞在相成居候由、山口ハ萩より七りほと此方にて、当分長州様ニも此所江御転住相成居候由、

一、当月十四日長府之彼方向トカ申所迄勅使御着、十五日下之關御着、当地御渡海之儀夕刻迄ハ不相分、豊前小倉余ほと都合不宜、若大里<sup>(北九州市)</sup>江御着船も有之候ハ、小倉江ハ少も無構、長州人馬にて筑前境迄御継立、夫より筑前人馬にて御通行ト申風聞も有之由、

一、小倉江先日勅使付之水戸家中彦人・肥後彦人・土州彦人、勅使御使として渡海有之候処、小倉より物頭役出迎候得共取合す、遂ニ小宮何某とか云重役出會にて御用も相済、三人ハ下之關之様昨日引取相成候由、右ハ先度夷船長州より打払之事よりして、以来ハ長州江援兵いたし候様との事にて、乍漸小倉も承伏いたし、以来ハ夷船通船次第打放し、手都合ニも相成り申渡も為有之由、小倉評判別てよろしからず候、長崎より一

昨日蒸氣船公義役人乗付、当所若松迄参り、夫より小倉江差入為有之由、右も昨日ハ又長崎江掃船為有之由御座候、

一、正親町通行ニ付別て潔白にて、此内御付之者両三人、宿役人等之進物受用いたし候儀露頭、大ニ御立腹にて、右三人ハ当分藝州江御預相成居候由、右通之振合故、御通行之國々より何も進上物等無之由、

一、筑前様より御待受として、当所黒崎江今日家老彦人・用人彦人差入候由、当分入込候、福岡衆六百人位ト申事之由、是ハ凡下迄込メテ之事ト聞得申候、

一、<sup>(頭目)</sup>夜前福岡より飛脚到来、<sup>(備)</sup>轉多之冲江夷船一艘碇船いたし候由申来候由、

一、勅使之儀此御方様江ハよでうでんと申御方、別段来八月の御出立にて御下向相成候旨、憶ニ京都より昨日通行之人より承候旨、仁右衛門咄ニ御座候、よでうでん私ハ一向相分り不申候、奈良原着にておのつから相知れ為申善御座候、

一、勅使御通行之長州宿々、御泊宿ハ米五拾表、<sup>(俵)</sup>御休ハ三拾表ツ、目録にて被成下候由、長州ハ此内之戦争にて物入為有之故ト申事之様相聞得候、

一、勅使江ハ京師より水戸家中拾三人、土州外ニ何州トやら、三国之家中御付申上下向之由、其外藝州・長州も相付居候へとも、右ハ中途より御付申上候との事ニ御座候、右先触之写も参居候間、書写差上候賦ニて、折角披見候砌、福岡役々方江出さねハならぬとて取ニ参り、于今手ニ入不申候、尤長州山口より下之關迄ハ、若殿様御付添為有之由御座候、

右区々之風説なから、仁右衛門咄ニまかせ書記差上申候間、御披露相成ほどの事も候ハ、宜様奉頼候、

(文久三年カ)  
七月十八日朝

木場傳内

大久保一蔵様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

元治元年（1864）

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
元治元年七月ノ二

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
（紙数六七枚）の記載あり〕

## 目録

舊邦秘録大久保一蔵小松帯刀へ書翰

薩藩戦争之次第同藩ニテ取調候書付

宮内野村戦死

〔町田民部久成同僚へ報告〕

〔在京御軍賦役報告〕

〔御褒賞〕

〔禁闕守護兵出発〕

〔小松帯刀殿ヨリ志々目献吉殿直話ヲ承リ同人ヨリ承リ候話〕

〔七月十九日長藩士及ヒ浮浪犯闕ノ事実本藩士前田十郎  
當時在京尹宮附屬ノ員ニアリテ宮ノ御親話及ヒ親シク見  
聞ノ譚市來広貫筆記〕

道島正亮家記抄

三六一 大久保一蔵ヨリ小松帯刀へ書翰

尚々奉恐入候得共、市來江宜敷御伝置被下度、且岸・

谷両士江宜敷様奉願上候、

〔光通〕  
汾陽就帰崎一筆拜呈仕候、残暑去兼候得共益御安康被

遊御滞崎、恐悦奉存候、於当方乍恐

御両殿様益御機嫌克被為遊御座、御同慶奉存候、随て

私事海上都合克、去ル八日安着、則より毎勤仕候間、乍

憚御意易思召可被下候、於御元は御厚意被為仰聞、難

有御礼奉申上候、御当地之形行着涯未分兼候得共、何

も静謐ニて、諸事振興之向ニて、大慶之至ニ御座候、

昨日従京師飛脚相達、西郷・吉井書翰届申候、去ル六

日立ニて、何も相変候事も無之、尚亦彼表時宜見計、

断然人数引払之大策熟評、御国元御吟味、其通決定候

ハ、諸郷守衛交代も被差出ニ不及、備後殿御迎船早目廻船之都合取計可畏、假令大樹公東下なく共、模様ニ依り此已前之人數位残置、京・江戸共引払候様可致候間、何分早々熟評相遂注進相待と之趣ニ御座候、未而末藩御請之有無も不相分、五卿辺之処も少ハ能方ニ向候欵之模様之由申參、併是も突留候説ニハ無御座候、御当地評議之処も、於其地御帰舶之上評決可仕御示談仕置申候間、形行ヲ以奉達

御聴、御家老衆江も其段申出置候間、御帰之処折角奉待候訳ニ御座候、

一去ル十五日之尊翰今日相達、難有拜見仕候、蒸艦も去ル六日晚愈廻船、来ル廿四五日方ニ御出帆之御都合之段、別て大幸奉存候、前条申上候通形行ニて、束手御待申上候処模様不相分、奉案候折柄ニて安心仕候、余事なれハ御評決被為在候ても可然候得共、実ニ不容易重事、弥篤と御評議之上、断て不疑之御処置ニ出不申候て不叶訳御座候間、纔之遅速処ニ無之故御帰見合相成申候、就てハ其元之御用不容易急務之御事候得共、可成ハ一日片時も早目御帰之処奉万願候、外ニ段々相滞居候御用向も有之、兎角早目御帰不被下候てハ難相

濟奉存候、先右之形行且御礼旁奉申上度、任幸便早々如此御座候、何も不遠拜謁之上と申上残候、謹言、

〔慶応元年カ〕  
七月十九日

〔利通〕  
大久保一蔵

〔小松藩庶〕  
帯刀様

參人々御中

追て、英人クルム江被下用大小之義委曲承知仕候、達御内聴則取計申候、彼是都合宜敷由、仕合之至御座候、

右包紙

小松帯刀殿

大久保一蔵  
〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

三六二 七月十九日薩藩戦争之次第同藩ニテ取調候書付

一子七月十九日、天龍寺集屯之長賊可攻伐旨被仰渡、前日十八日晚景ヨリ人数御屋敷江被備置候処、十九日曉、賊兵大勢ニテ中立賣又ハ蛤両御門辺江立込候風聞有之、為物見被差出候内、宮内彦次御城下士烏丸通下長者町上ル辺ニテ賊砲被打掛即死、

一同日朝六時過ヨリ中立賣御門辺江大小砲之者追々聞得候付、御人数繰出相成、兼テ御固被仰付置候乾御門江



重テ出張有之、宮之城御床机近衛殿表御門前江被相居、御城下并諸郷之人数等御備付相成候処、右中立賣亦ハ蛤御門江モ戦争相始候之注進追々有之候事、

一同刻同所之戦争甚烈敷相成、已ニ會津御備ヲ打破候注進有之候処ニ、彼方ヨリ使者到来、賊兵手重ニ付、当御手人数急々繰出呉候様掛合有之候故、則先鋒一番手物ニ成田彦十郎組押出樋脇郷兵、続テ二番手同山城新右衛門水引郷兵、三番手同川上八郎左衛門蒲生郷兵、四番手同野村勘兵衛組之押出、貝ヲ吹立、序破之太鼓ヲ鳴ラシ、前列之大砲打出スヲ期ニシ、吐氣ノ声ヲ揚ケ、一隊々々繰出シ大小砲打掛攻寄ル、中ニモ四番手物主野村勘兵衛真先ニ踏出シ、雷声ヲ発シ隊下ヲ下知シ、自身ニモ小銃八匁玉ヲ連発シ、四隊之吐氣之声天ヲ響シ、公家御門前迄押付、大砲ヲ双ベ打、小銃ハ伏込ヲ令シ、自命ヲ不顧奮進スル之処、賊兵応スルコト能ハサルヲ見テ隊伍ヲ乱シ、裏崩二崩レ立縦横ニ乱アヒ、天龍寺ヲ指シテ逃ルモアリ、日野殿御屋敷江逃入、御門之袖堀又ハ堀ノ上等透々ヨリ小銃ヲ雨ノ降ル如ク打掛ル、之ヲ厭ハズ尚攻、ツ、ミヲ打、吐氣之声ヲ揚ケ、四隊共先後ヲ争ヒ、堀ヲ越へ裏門ヲ押破リ、此時野村

勘兵衛左之足ニ砲丸ヲ受ケ、立ツコト能ハス、去レトモ伏シ乍ラ玉薬ヲ込合連発シ、カ、レ、ト隊下ヲ下知シ候所ヲ、今一ツノ銃丸真向ニ当リ、公家御門前江戦死、

一中立賣之戦争折角之段相聞へ、御城下戦兵備ヲ押出シ、右四隊ヲ助ケテ小銃ヲ連発ス、此時先陣ニ進ミタル十長土師吉兵衛右之頬江砲丸ヲ受ケ、深手ニテ助ラレ引取、其外傷者多シ、

一同日同刻同所之戦ヒ盛ニ相成、其機変ニ応シ吉井幸助・中原猶介上京、孫次郎等御城下并諸郷之諸隊ヲ始メ大砲之備ヲ押立、乾御門ヲ発シ鳥丸通リヲ下リ、中立賣通并醍醐殿辺江屯シタル賊兵之横ヲ打立近付所ニ、賊兵事之急ナルヲ見テ備ヲ分チ、大小砲ヲ并へ打事甚タ烈シ、此時我兵諸隊一同伏込ヲ命シテ吐氣ヲ揚ケ、大砲ヲ打立々々テハ吐氣ヲ作り、隊伍ヲ正シテ攻近ツク、又一手ヲ分チテ施薬院ノ内ニ忍ハセ、堀ノ上ヨリ賊兵ノ屯江小銃ヲ打卸シ此處敵間僅カ、矢比ニ敵ヲ差定メ、矢比ニ敵ヲ差定メ、時分ハヨシト一途ニ兵ヲ進メテ追掛ルニ、立逆リ返シ合スル敵モアリ、町家ニ逃ゲ入身ヲ隠スモ有リ、名ヲ吝ミ

恥ヲ知ルハ、口ニ刀ヲ貫キ自ラ死スルモアリ、右往左往ニ散乱ス、此戦ニ我兵モ疵ヲ蒙リ戦死スルモノ三人、手負十一人、

一 赤井兵之助 御城下士 矢玉ヲ厭ハズ突行奮激シテ戦ト雖モ、真向ニ砲丸受三日ニシテ死ス、

一 松下彌七郎 阿久根郷士 平田平六組 先陣ヲ争ヒ進ミ出、敵数人ヲ射伏セ、其身モ胸中ニ砲丸六ツ受クルト雖モ、尚健ニシテ

戦フ所ニ三ツ目之玉ニ当リ死ス、

一 川上助八郎 御城下士 敵ヲ追打、返シ合スルモノト数合戦フ、川路正之進 利良 御城下 出合共々ニ敵ヲ打伏セ、助八郎

首級ヲ得、

一 重久直齊前同シクシテ首級ニツツヲ得、

一 來田源四郎 阿久根郷士 先陣ニ遣テ戦ヒ、敵ヲ走ラシメ、胸板并腕ニ砲丸ヲ受時ヲ移シテ死ス、

一 川南武右衛門前同能ク戦ヒ、下腹ニ砲丸ヲ受ケ打抜カレ、尚強健ニシテ恙ナシ、

一 同日同刻同所之敵ヲ打洩サ、ルヲ要トシテ兵ヲ分チ、江夏莊助・來田來六・志岐小左衛門等諸隊ヲ指揮シ、武者小路ヨリ押テ室町ヲ下リ、中立賣通ヨリ出水通迄之小路々々ニ人数ヲ立テ付、夫レノ隊長会ヲ為シ

テ敵ノ後ヨリ大小砲ヲ射掛打立テタルニコラエ兼、程ナク蛤井中立賣両御門江向ヒタル賊軍一人モ残ラズ散乱シ、醍醐殿屋敷并隣北之町へ過半逃入、屯シタル所ヲ火ヲ掛追打、思ヒノ二首級ヲ得ルモノ多シ、此時九分屋七時頃ナリ、

一 同日同刻、堺町御門江押寄タル賊ヲ討ノ合戦相始ヨリ、諸藩御固之人数ト渡合、且賊ハ鷹司殿江押入、御門口ヲ鎖シ、矢倉ヲ鉤り官軍ノ屯ヲ打、合戦殆ト難儀ニ及ブノ注進有之、物主奈良原喜左衛門・仁禮來助・海江田武二兵ヲ率ヒテ、今出川通リヲ押テ京極通 今寺町通 ヲ下リ、サハラキ町ヨリ鷹司殿江掛リ、裏口ヨリ攻戦ヒ

切結ブ、表口ニハ越前・桑名其外之官軍大小銃ヲ以テ堀ヲ打破リ攻入り 虫喰 合、賊ト火ヲ散シテ相争フ、終ニ

我ニ我兵火ヲ掛殿中ヲ焼クニ、敵タメラヒ散乱シ漏レ出ルヲ、裏口之薩兵一人モ残サス之ヲ打取、表口之官軍モ又強猛ニシテ分取、高名アリト云フ、

一 重篤ニモ則御出馬、御城下并諸郷之人数被召列、日之御門御固相成候事、

一首 式拾九級

但切捨焼亡等ニテ不相知者御座候、

一生捕 拾三人  
一鉄砲 貳拾式挺

但十刃ヨリ五刃マデ

一刀大小 拾六本

一突鐘 貳ツ

一陣太鼓 七挺

一具足 四十五領

内一ツ箱入

一長刀 壹振

一膳当 拾八

一紋付幕 六頭片間張之

一大砲 拾貳挺

但要具相添

一旗 六本

右捨行分捕之品

一味方戦死 四人

一同深手 九人

内一人陪卒

一薄手 貳拾三人

内一人同断

右之數件此節於京都戰爭手合之者江取合、大略聞取候  
条々ニ候事、

三六三 宮内野村戦死 (七月十九日)

宮内彦二

長州暴発ノ前夜、西郷従道氏ト同道馬上ニテ付候ニ、  
出テ中立賣御門前通行之折、長人ノ襲撃ニ遇ヒ、腹部  
ニ銃丸ヲ受ケテ死ス、

野村勘兵衛

公家御門警備中、長人日野家ノ裏門ヲ破リ押入り、表  
門ヲ出テ直ニ襲撃ニ及ヒ、始メ腹部ニ銃丸ヲ受ケ倒ナ  
カラ敵ヲ偵ヒシニ、再ヒ腹部ニ銃丸ヲ受ケテ死ス、

三六四 町田民部久同僚へ報告

前文略ス、十九日未明、長兵中立賣烏丸北ノ方ヨリ大  
砲打掛、其時長兵十三四人同時ニ斃レタリ、同日日野  
家邸中ニ長兵多ク逃込ミ候ヲ討取ラントスル処、北門  
ヨリ逃去候ニ付追討致シ、九人打取候、  
醍醐邸へ隠レタル長兵多ク、其内討取七八人ニ及候、  
伏見藤之森ニ濃州大垣勢固メ居候処、十九日未明長州

家老福原越後一隊百五十人程引卒押寄せ、大小砲戦ノ  
後終ニハ接戦ニ及候由、

別紙ニ

一十九日帥宮有權ニハ正議ノ堂上方数十人ト一同参

内、時勢切迫ノ旨奏

聞諫奏ノ趣アリシ由、

右之方々参

内ヲ相図ニテ長人ハ哀訴申立ノ賦、其条目第一ニ鷹司  
家・烏丸家其他当時幽居ノ方々へ書面差上候事、

但

同時ニ正議ノ方々並列藩へモ右書面通達、幽居ノ

方々御覧ノ後

皇国ノ安危此一挙ニアリ、断然御推参ニテ帥宮へ

逐一被仰候事、此処ニテ宮御門ニ達シ、直様四門

守衛ノ儀加・因・備三藩へ被命候事、

一三藩人数相集置候処、有栖川宮へ兼テ差出置候人

数四門内御守衛被命事、九門ハ諸藩へ嚴重被仰付

候事、

一右ニ曳統キ尹宮参

内御差止メ、遂ニ會・薩モ九門内出入停セラル旨、

勅命相下リ候事、

一長人屯集所ニ捨アリシ書面、

天・幕へ、會・薩征討ノ儀ハ鷹司殿参

内之上差上候事、引統キ會へ戦書ヲ送ル事、

此書面ハ、下嵯峨福田治兵衛木屋藤業金  
藏家ナリ宅へ残り有之候多

クノ書類ノ内ヨリ分捕致候、福原越後(元備)・國司(親祖)信濃兩人ノ

封名ナリ、此福田ナル者ハ長藩邸館入ノ商人ニテ、此

回ノ企ニ尽力致シ、頭分ノ長人ハ此宅ニ止宿セシト云

フ、我人数勢天龍寺へ押寄せ、此宅へモ直チニ踏入シ

ニ、主人ハ素ヨリ一人モ残ラス落チ失せ、取散シタル

品ノ中ニ此書有之候、其他武器類多クアリ皆分捕ス、

三六五 在京御軍賦役報告

七月十九日、嵯峨天龍寺へ桶籠ル長州ノ軍勢凡ソ四百

余人、十八日ノ夜ヨリ押シ出シ、十九日未明會津・筑

前ノ固場九門ノ内中立賣御門ニ襲ヒ来リ、互ニ大小砲

放発シ、烟ノ下ヨリ乱入血戦稍時ヲ移ス、其時越前・

桑名ノ兵駈合及砲戦候処、長州勢ヒ強ク、遂ニ中立賣

御門ノ固メヲ破リ、固メ勢ハ四路ニ崩レ立、已ニ六門

内ニ引キ入りシ故、長軍ハ公家御門前迄攻メ入、鳳

關ニ迫リ入ラントスル処ヲ、乾御門固メノ薩州勢御城  
 下一手ノ兵押シ出シ、声ヲ揚ケテ大小砲透間ナク打立  
 シニ、サシモ猛ヒ切リタル長兵モ直チニ碎易シ、散々  
 ニナリ、多クハ鷹司殿ノ邸内ニ逃入、暫時戦ヒシカト  
 モ、門ヲ閉チタリシニ、薩兵ハ稱ク大砲ヲ打込、烟ノ  
 中ヨリ邸中ニ討入り放火シ、終ニ門ヲ打破リ乱入シ、  
 大小銃・劍・槍等ヲ以テ打伏セ突キ伏セ血闘ス、此時  
 越前勢走セ続キ、手繁ク攻立シ故、長兵ハ程ナク逃ケ  
 去リ或ハ戦死モ少ナカラズ、長兵ハ裏門ヨリ遁レ出、  
 方々ニ散乱シ、多クハ丹波又ハ山崎街道ニ向ヒ、五人  
 十人列ヲ乱シテ逃ケ去リ、当日ハ、洛中ノ守衛ヲ專ニ  
 シ、追ヒ打ハナサス、洛中茲彼所ニ僧伏ノ殘徒探索シ、  
 悉ク誅伐シタリ、恰モ猪鹿ヲ追ニ異ナラス、日入時分  
 ニ軍終リ、薩軍ニ得ル所ノ首級二十五、生捕十二人、  
 大砲八挺、小銃五十二挺アリ、乾御門固メ場ニ於テ実  
 檢式・勝吐氣ノ式ヲ行ヒ、勇々敷形勢ナリ、此レ当日  
 ノ概況ニ候、当日長軍猛勇ニシテ薩軍ナカリセバ、  
 鳳關ノ危キハ累卵ノ如ク、雲上及ヒ公卿方モ會兵ヲ第  
 一ノ勇猛ト予テ頼ミ、思召サレシニ、薩兵ハ之二十  
 倍セシト賞シ玉ヘリ、其外諸郷兵ニハ阿久根・出水・

水引等ノ分捕功名少カラス、

一同日天龍寺へ押寄スヘク旨御達アリシカトモ、一旦御  
 屋敷へ曳キ取り、廿日ノ晝ヨリ出軍押寄せシニ、早ヤ  
 落失セタル後ニテ、一人残り居タルヲ生捕リ放火シ、  
 同寺又ハ嵐山辺ノ人家・寺院法輪寺モ焼滅致候、此日  
 ノ人数ハ御城下兵一手ニ、諸郷ハ四手ニテ候、長賊ハ  
 昨日洛中ニ繰出シ、残り居タルハ纔ノ人数ニテ候由、  
 生捕ノモノヨリ申出候、残りノ者モ洛中ノ敗北ヲ聞キ、  
 伏水(息)・山崎ノ両方ニ向テ落行キ候由、

一此日天龍寺ニ於テ大小砲物具・大刀其他米穀等ノ分捕  
 多シ、

一十九日洛中ノ戦争ニ戦死左ノ如、

鹿兒島士

監軍

野村勘兵衛

宮内彦二

阿久根郷士

松下矢七郎

濱田藤太郎

鹿兒島士

手負

土師吉兵衛

税所長 蔵

川上助八郎

赤井兵之助

樋脇郷士

中野松之助

阿久根士

河南武右衛門

福永傳太郎

福永助右衛門

平岡源四郎

遠矢平左衛門

隈城郷士

道岡恕兵衛

長野圓右衛門

出水郷士

大迫治右衛門

高岡郷隊付人足

庄 太

樋脇郷隊付人足

甚太郎

隈城郷長野圓右衛門僕

金次郎

三六六 御褒賞

去ル十九日

禁闕之下不容易擾乱之処、各藩兵士等忽出張、粉骨碎

身抛一命遂防戦速ニ及鎮静之条、忠勳

叙賞不斜候、殊其後数日終夜御守衛相勤残念之砌、別

テ苦勞

思召候旨

御沙汰候事、

七月

右之通從 御所被 仰出候事、

〔未〕  
一松平修理大夫

三六七 禁闕守護兵出發

七月十九日ノ味爽、公子島津圖書殿治久ヲ總督トシ、大

目附町田民部成久・御小姓与番頭川上右膳賢久・御側役西

郷吉之助盛・御軍役奉行伊地知正治等城下兵一隊、及  
 ヒ隈之城・水引・蒲生等ノ兵二隊ヲ卒ヒテ

禁内ヲ守護センカ為、日之御門ニ備ヘタリ、嵯峨天龍  
 寺ノ討手ニハ公子島津備後忠殿ヲ總督トシ、国老小松  
 帶刀清參謀タリ、御小姓与番頭吉利群吉城下兵一隊、

及ヒ出水・高岡・阿久根・穆佐・桶脇等五ヶ郷ノ兵四  
 隊、野戦砲一隊ヲ率ヒテ進軍セントスルニ方リ、天龍寺

ニ屯セル賊魁國司信濃ハ六百余名ノ兵ヲ率ヒテ、夜半  
 二天龍寺ヲ発シ、下立・中立・蛤ノ三門ニ迫リ、一橋

殿及ヒ筑前勢ト戦ヲ開キシニ、賊ノ鋒銳クシテ直チニ  
 討破リ、勸修寺殿・日野殿裏門ヨリ御築地内ニ攻入り、

一橋・會津・筑前ノ兵ト大戦ス、本藩兵ハ已ニ天龍寺  
 ニ向テ進發セントスル処ニ、大小砲声ノ轟クヲ聞ヒテ、

賊ハ逆寄セリト直チニ方向ヲ転シ、禁内ニ向テ進  
 軍シ、乾門ニ予テ備ヘ置キタル大砲四門ヲ押立、賊軍

ニ向テ関ヲ造テ撃テ懸ル、此時賊軍ハ一橋・筑前ノ兵  
 ト戦ヒ、賊軍勝ニ乗テ公家門前ニ突入シタリ、此時本

藩城下兵ハ四門五百錢二百錢各四門  
 及箱用砲二門ナリノ大砲ヲ連發シ、或ハ  
 小銃ヲ放チ、其音天地ニ震フ、隈之城隊ノ物主野村勸

兵衛ハ兵ヲ率テ公家門前ニアリシカ、賊軍迫リ来ルニ

向テ真先ニ進ンテ戦ヒケルカ、敵彈ノ為ニ即死セリ、  
 其隊兵野村藤七郎モ一緒ニ斃レタリ、我兵益奮進、賊

軍コラヘスシテ日野殿ノ邸ニ逃ケ入りシ故、我兵追撃  
 スルコト尤烈シ、賊兵困頓極リ降ヲ乞フ、我兵猶予スル

中ニ直チニ駈出シ、裏門ヨリ逃ケ去リタリ軍散シテ後聞ク  
 如ニヨレハ國司  
 モ其中ニアリテ逃、  
 出タリト云フ、又高岡・阿久根ノ兵ハ烏丸通ヲ進シカ、高

岡隊ノ談合役本田次郎五郎ハ國司カ本陣ナルヲ聞キ、  
 益進ンテ國司ヲ討取ラント烈シク攻立シカトモ、遂ニ

得ス、此時阿久根兵ノ物主平田平六ハ隊兵ヲ励マシ、  
 大砲ヲ押シ立テ、関ヲ作り隊前ニ進ミ、先ニアル高岡

兵ヲ左右ニ開カセ、中央ヨリ大砲ヲ連發ス、高岡兵ハ路  
 傍ノ溝中・屏下等ニ伏セ、銃ヲ放チ横面ヨリ攻撃ス、続

ヒテ槌脇兵ハ先ニ進ミタル阿久根兵ヲ左右ニ開カセ、  
 後ヨリ大砲ヲ連發シ、息ヲモツカス戦ヒシニ、出水兵

ノ物主奈良原喜左衛門、及ヒ軍賦役中原猶介カ率ヒタ  
 ル遊学生徒ノ一隊モ、船用忽砲ヲ押立、烏丸通ヨリ突然

賊兵ノ後ニ出テ、榴散彈ヲ烈シク連發ス、綾・穆佐二郷  
 ノ兵ハ新町通ヨリ討テ蒐リケルニ、賊ハ前後二敵ヲ受

ケナシカ以テタマルヘキ、終ニ散々ニ潰走シタリ、此  
 前後ノ戦ニ、我諸隊ニ獲ル所ノ首級三十八、斬捨タル

モノ三十余級、生捕ノ十四人其姓名左ノ如シ、

國元初三郎

マコ 村一郎

越知重忠

中村金右衛門

來島又兵衛

兒玉小六

萬藏團吉

國司信濃家来

川之上次郎

佐々木正右衛門

中村政次郎

人足

吉藏

又兵衛

下田屋

友之進

此他ハ姓名詳ナル者半以上ナリ、捕縛セシ者ハ二本松邸  
武芸練習所ニ置キ、懇丁ニ遇シタリ、又旗大小四本或ハ  
國司カ甲冑箱一荷、其他銃砲・槍・刀・彈藥ノ類數フル  
ニ違アラズ、本藩兵戦死姓名左之如シ、

城下隊物主

隈之城士

城下土斥候役

阿久根郷士

阿久根士深手

同

以上死者六人

此二名ハ三日ニシテ死ス、輕重傷者姓名左ノ如シ、

城下士

同

樋脇郷士

隈之城郷士

同

出水郷士

阿久根郷士

全

全

全

全

高岡郷隊人足

野村勘兵衛

野村藤七郎

宮内彦二

松下矢七郎

赤井兵之助

濱田藤太郎

税所長藏

土師吉兵衛

中野松之助

道岡恕兵衛

長野圓右衛門

大迫治右衛門

河南武右衛門

福永傳太郎

福永助右衛門

平岡源四郎

遠矢平左衛門

庄太



樋脇郷人足

甚 太

長野圓右衛門僕

金次郎

以上軽重傷者都合十四人

益田・久坂ノ二賊ハ宵ヨリ窃ニ入京シ、鷹司殿ノ邸ニ  
潜伏シ、中立・下立賣ノ両門、或ハ伏見屯在ノ兵寺町  
今出川等ノ諸門ヨリ突入スルヲ相図トシ、鷹司邸ヨリ  
直ニ

御築地内ニ侵入シ、各手戟ノ間ニ參

内シ、臨機

鳳輦ヲ揺シ奉ラントスルノ計画ナリシト云フ、是レ予  
テ有栖川宮其他同論ノ堂上方ト謀シ合セタルコトナリ  
シト云フ軍散シテ後生捕ノモ、白状セシ趣ナリ、此時堺町筋鷹司邸ノ近傍ニハ  
彦根・福井ノ官軍備ヘタリシカ、賊軍邸内ニ潜伏シタ  
ルヲ探知スルヤ否ヤ、直チニ邸内ニ衝テ入り戦ヒケル  
ニ、賊軍ノ鋒猛烈ニシテ、二藩手ノ兵苦戦ノ際本藩ノ  
兵馳セ続キ応援シ、終ニ賊軍四方ニ散乱シ、邸中ニ遁  
ケ匿ル、モアリ、四方ニ逃ケ散ルモアリ、水引郷ノ兵  
追躡シ三四名ヲ斃シタリ、此時ハ早ヤ下立・中立・蛤  
公家門前ノ戦ハ終リ、各藩兵朝ヨリノ戦ニ勞レ、休憩  
シタル折ナリキ、而シテ同邸ニハ殘賊果シテ潜匿スヘ

シ、放火スヘキ旨総督一橋殿ヨリ令セラレシニ依リ、  
本藩城下隊直チニ火ヲ懸ケタリシニ、果シテ潜匿セシ  
者数十名散々ニ遁レ出ントスルヲ狙撃ス、其中ニ寺町  
門ヨリ数十名落行キタル者アリシト云フ、這門ニハ熊  
本勢備ヘタリシカ、如何ナル思想ナリケン、遮撃モナ  
サス傍觀シテ落シタリ、此事軍散シテ後大ニ世評ニ涉  
レルコトナリキ後日聞ク処ニ依レハ、熊本兵ノ隊長某等テ、長藩左祖ノモノアリテ、進ラザリシト云フ、如斯焼  
キ立タルニ、此日朝ヨリ北風烈シク、砂礫ヲ卷クカ如  
クナリシ故、四方ニ延焼シ、凄マシキ形況ナリ、加之  
各所ニ火ヲ放タルカ故、北風ノ烈シキニマカセ洛中半  
ハ以上ハ焦土トナレリ、○福原越後ハ伏見ニ屯シ、十  
八日ノ夜半過ル頃屯所ヲ發シ、藤ノ森墨染辺マテ押出  
シケルニ、大垣勢克ク戦ヒ、賊兵五六十名ヲ討取りタ  
リ、福原モ銃傷ヲ受ケ、一旦山崎ノ方ヲ差シテ退キタ  
リシカ、夜ノ明方敗兵ヲ纏メ、重テ竹田街道ヨリ攻入  
ラントスルヲ、彦根・會津ノ兵迎ヘ討チケルニ、遂ニ  
山崎差シテ落チ行キタリ、此日ノ戦伏見ノ方ハ曉丑ノ  
下剋ニ初リ、中立・下立・蛤三門ノ烈戦ハ卯ノ上剋ヨ  
リシテ申ノ刻ニ終レリ、何レモ官軍捷ヲ得、中ニ就テ  
本藩ハ各藩ニ抽ンテ苦戦シ、來島又兵衛等ノ賊魁ヲ討

チ、或ハ國司信濃モ僅ニ遁ル、コトヲ得タルカ如キノ  
大捷ナルカ故、公子圖書殿治久・備後忠殿申下刻比乾門  
内ニ会シ、旗合首実驗ノ式ヲ行ヒ、勝鬨ヲ揚ケ、各ニ  
本松邸ニ凱旋シ玉ヘリ、此時放火ハ益々延焼シ、風ハ  
烈シク、消防スルモノハナク、風ニマカセテ燒キ立テ、  
廿日昼後ニ至リテ鎮消セリ、○凱旋ノ後邸中ニ於テ、  
両総督ヲ初メ兵士夫卒ニ至マテ酒肴ヲ賜リ、捷軍ヲ祝  
シ、勞ヲ慰セラレ、明日天龍寺発向ノ準備ヲナセリ、

三六八 小松帶刀殿ヨリ志々目獻吉殿直話ヲ承リ

同人ヨリ承リ候話

七月十九日公家御門前ニテ御國勢長賊ト戰爭、賊大形  
敗走之折柄、或公家衆參ラレ、帶刀殿江向ヒ和議ヲ調  
候様被相逢候付、右ハ何方ヨリ之御指揮ニテモ候哉ト  
被相尋候処、伝奏ヨリノ御指揮ニテ候ト被申候付、賊  
ハ大形敗走、最早残徒ヲ討候迄之事ニテ、此期ニ至リ  
和議ト申時機ニ無之、勿論右様之儀ヲ帶刀位ノ者本ノマニ  
命セラル、訊ニテモ有御座間敷、總督江御沙汰当然之  
事ト被相答候処、右公家衆ハ夫成 御所之方江カ被差  
越候由、左候テ帶刀殿ニハ直様一橋之御本陣へ被駈付

候処、於九門内何方トモ場 一橋大納言殿ニハ御床机ニ被  
召、采配ヲ取り、御自身御指揮有之候処へ帶刀殿罷出、  
前件之次第逐一被申上、一大事之御訳柄ニ付早々御參  
内被為在、形行被及奏 間度、御參 内ニ付テハ、帶  
刀御供可仕ト被申上候処、直ニ一橋公ハ一騎駈ニテ御  
參 内、帶刀殿御供ナリ、一橋公ハ帶劍、履ヲハキナ  
カラ昇殿、 御簾之御前近被罷出、何トカ被為及奏  
間、帶刀殿ニハ遙之廊下ニ蹲踞イタシ居ラレ、奏 間  
之御口上ハ不相分由、左候テ和議之儀ハ相止候由、直  
ニ一橋公ハ御退出ニテ、帶刀殿ニモ又戰場へ被張出被  
致指揮候処、又候暴論公家衆和議一条被及奏 間、稍  
叡慮モ其方ニ被為動候哉ニ相聞得候間、帶刀殿則一橋  
公へ御注進ニテ再御參 内、帶刀殿ニモ御供ニテ、一  
橋公ニハ矢張帶劍履ヲハキナカラ、紫宸殿江イタグラ  
メニテ、有栖川宮ヲ初長州鼻負之暴論公家衆多人數ト  
御對座、一橋公ハ一人ニテ舌戰、終ニ悉ク説破セラレ、  
公家衆閉口之由、万一公家方暴論相募、一橋公之説不  
相立候ハ、公家衆ヲ被打果候御所存之由、帶刀殿ハ  
座末ヨリ舌戰ヲ聞居ラレ候由、左様テ又戰場へ張出サ  
レ候処、夜入又モ暴論公家衆計ニテ、

主上ハ有栖川宮江有栖川宮ハ長州最良之因州勢前以ヨリ固メニテ、暴論公家ト謀合、御遷幸ヲ相計候半、鎮撫之後、金藩ハ有栖川宮固メ被仰付、当分陣小屋へ打込固居候ヨシ

御遷幸被為成候御賦、且和議一条又起リ候由相聞得候付、又候一橋公一騎駈ニテ御參 内、帶刀殿モ御供ニテ候処、最早三種之神器并鳳輦モ紫宸殿前へ御備付相成、暴論公家供奉ニテ既ニ 御遷幸之時機ニ及ハセラレントスル処ニテ、一橋公無会積モ昇殿、乍恐モ主上之御袖ヲ奉為引留、私奉守護候付、イマタ 御遷幸被遊御時機ニモ無御座ト被為及奏 聞、其節之一橋公振ハマラセラレタル御挙動、威儀堂々誠ニ無双之豪傑ト相見得候由、帶刀殿ニハ遙之末席ヨリ被伺居候由、然処鷹司殿ヨリ燃立候火閑院宮様杯へ相掛リ、 御所モ御掛念ニ付、今夜二條城江 御遷幸可被為成候付、致其手当候様一橋公ヨリ帶刀殿へ御沙汰ニ付、御答申上ラレ候ハ、二條城へ 御遷幸之儀ハ宜有御座間敷、訊ハ市中焼跡ヲ夜分之御通行被為成候御事ニテ、殊ニ二條城ハ天龍寺程近之事ニモ有之、旁宜間敷、今夜ハ相國寺へ 御遷幸被為成、公兵ヲ以御守衛ニテ、二條城へハ明朝錦御旗ヲ御翻サセラレ、 御遷幸被為在候方宜可有御座ト申上ラレ候処、尤成事故其手当イタシ

候様御達御座候得共、 御遷幸之時機ニ不被為及御取止ニ相成候ヨシ、

一同十七日比、長州荷担之有栖川宮ヲ始メ、暴論公家達

參 内ニテ、此節長藩入京歎願ニ付テハ、尹宮ヲ閉門(朝彦親王)

被仰付、會津肥後守首ヲ取り、長藩へ御引取相成候ハ

、直ニ相鎮リ可申ト被及奏 聞候処、無罪之者ヲ右

通之所置不相成訳ニ候、今一往及評議候ヘトノ

勅詔被為在、左候テ御手許ヨリ一橋公納言へ早々參

内イタシ候様被仰達シ、御同人ハ直様一騎駈ニテ御參

内有之候処、右趣ヲ被 仰聞、如何取計可然哉ト

勅詔ニテ、一橋御答申上ラレ候ハ、此一条ニ付テハ私

差合御座候付、不奉願ト申切退出イタサレントスル処

ヲ、脇ヨリ被引留、其訳ハト御尋問ニ付、今日肥後守

首ヲ御切り被成候ハ、明日ハ私モ同様之御取扱ニテ

可有之、依テ差合ト申上候段御答被申上候処、右一条

ハ夫切ニテ相止候由

三六九 七月十九日長藩士及ヒ浮浪犯闕ノ事実本

藩士前田十郎當時在京尹宮附屬ノ員ニア

リテ宮ノ御親話及ヒ親シク見聞ノ譚市來

廣貫筆記

一六月五日ノ事ニ、同日昼時分東山清水寺ノ下ニアル明ケ鳥ト云フ料理屋ニ、土州藩士兩三人酒吞ニ参リ、酒モ少々吞ミ楽ミ居、尤モ酌ム女モ三四人出居候処、先頃ヨリ洛中浪人取締別テ嚴重ニテ、會津守護職ノ手ヨリ市中ヲ巡リ、胡乱ノ者ハ無用捨召捕候由ニテ、右明ケ鳥ノ辺ヘ取締方ノモノ八人参リ、土州人共酒吞居ルヲ窺ヒ候体ニ見ヘシカ、如何様長州人ト見受候哉、右ノ輩座敷内ニ押入り、直チニ召捕シト仕掛候ニ付、土州人ハ立チ向ヒ、人違ヒニハ非ラス哉ト申シタレトモ不聞入、其内一人ノ土州人ハ槍ニテ突キ伏セラレ、一人ハ其隙ニ其場ヲ迦レ、裏口ヨリ直ニ土州屋敷ヘ走セ歸リ形行ヲ告シニ、屋敷ノ人数直チニ明ケ鳥ヘ走セ付、取締人ニ向テ勝負セント申掛候処、其時ハ早ヤ土州人ナルヲ解悟致シ、人違ナリシヲ評議中ニテ、中々勝負所ニ無之、初メ無体ニ取掛リ候ヲ、會津人ニモ手ヲ出シ候者ヲ人違ヒント、懐キ止メシヲモ不聞入突キ伏セ候ニ付、如斯大混雜ニ及ヒ、土州屋敷ニハ追々多人数走セ続キ、已ニ戰爭ニ及ハントノ形勢ナリシ由、右通取締行廻リノ案内ニハ、壬生浪人壬生浪人トハ、當時幕府ノ手ニテ京都壬生ニ數百人ヲ拘ヘタリ、之ヲ壬生浪人ト云フニテ、此輩ハ兩三年前ニハ長人又ハ諸浪人ト

連合セシモノ共故、京・攝間ニ長人又ハ浪人潜居ノ地ハ能ク存知故、殊ニ姓名迄モ案内故ニ探索ノ手先キニ致候由、殊ニ此節柄、長人ノ探索・浮浪追捕ノ事朝幕ノ嚴令ニ依リ、會津ハ壬生浪人ヲ案内者トシテ、稠シク探シ召捕候由、祇園町辺・清水寺下辺ハ長人ノ巢窟ナリトテ、土人ヲ長人ト見認メ、粗忽ニ突キ伏セ候由、仍テ土人ハ種々難題申掛ケ、已ニ珍事ニ及ヒ、土州屋敷ニハ會津屋敷ヘ多人数押掛シ、會津ニハ大ニ心配シ、様々詫申入レ、其時會津ヨリハ此御方此御方トハ本ノ口添ヲ願ヒ詫ヲ入レ、粗忽ノ働キ致シタルモノハ切腹為致、同列ノ者ハ夫々輕重ノ取扱ニ及ヒ候、當時浪人探索等ノ嚴重ナルヨリ、如此事ニ及候云々、一右通探索稠敷候ニ付、川原町辺町家等ヘ潜伏致シ居候長州人并浮浪士百三十人程召捕、其中ニハ頭立候者モ兩三人召捕、又ハ同町對州屋敷ヘモ四十人程、三條旅店ヘ六十人余、清水寺辺ヘ三十人程、嵯峨辺江百四五十人余、伏見ヘ六十人余、山崎ヘ二十人程、八幡ヘ三十人余、宇治・山科等ヘモ多ク、大坂ヘ各所二百五六十人潜居致居候由、右ノ輩殘ラス召捕、又ハ切捨勝手タルヘキ旨幕府ヨリ達セラレ候、又長州人ハ日々密力ニ

登り来ルトノ趣ニテ、洛中洛外・伏・坂ノ地ハ物騒ニテ、故ナク殺害セラル、者、或ハ押込強盜モ多ク、油断ナリ難キ形勢ニテ候、

一長州ヨリ益田右衛門介・福原越後・國司信濃等兵ヲ引率シ上坂致候者、七月朔日ヨリ三日頃迄ニ海陸兩道ニ着坂致シ、長州蔵屋敷へ入り込タル趣相聞得、此方留守居木場傳内探偵ヲ入レ候処、凡其人数上下五百人余ト申ス事ニテ、三日ノ夜京師邸へ早打ヲ以テ注進ニ及ヒシ故、二本松邸へハ同夜半ヨリ小松氏・西郷氏等出会、種々評議之上、尹宮へハ前田十郎ヲ以テ御知ラセ相成候処、全ク御存無之御驚キニテ、即時ニ諸大夫ヲ以テ一橋公其外御所付等へ御通シ相成候由、其時宮前田へ仰セニ、ケ様ニ可成立トハ兼テ思ヒシニ、今日ニ迫り候テハ如何ントモ為スヘキ様ナシト、大ニ御歎息被成候、近衛家ニハ宮御同様、御附人ヲ以テ同時ニ御知ラセ相成り、夫々御用心モ被成候、

一此時大坂辺ニテ長人共申スニ、着坂之人数ハ是ヨリ江戸へ出攘夷別当職所望致シ、横濱ニ於テ夷人追討先鋒ノ為メナリト申シ触シ候由ニテ、三日四日七月三日頃ニハ京中モ専ラ其説ニテ、上京ノ説ハ全ク無之候、

一右長州人共、五日七月ニハ大坂ヨリ直様八幡・山崎へ出張致候由、其時枚方迄ハ川舟ニテ同所ヨリ上陸致シ、隊伍ヲ整へ旌旗ヲ押シ立、鉦鼓ヲ鳴ラシ、兵卒ハ甲冑・陣羽織ノ類ヲ着シ、両所へ押行キ候由、此事相聞得、京・伏ノ間大混雜ニ成り立、洛中洛外諸所ノ固メ場等人数ヲ増シ候モアリ、大砲ヲ備フルモアリ、上ヘヲ下ヘト騒動致シ候事一方ナラス、

一長州勢八幡・山崎へ二手ニ分レ楯籠リ、又其内ヨリ國司信濃ハ手勢百人許ニテ引キ分レ、山崎街道ヨリ嵐山天龍寺へ同夜着陣致候由、同所ニテハ当夜ヨリ篝火ヲ焚キ、如何ニモ数百人ノ人数ト相見得候由、天龍寺ハ兩三年前長門守殿上洛ノ時ヨリノ宿陣ニテ、近頃ニハ人数ハ全ク居ラサレトモ、住持ノ僧ナトハ至テ慕ヒ居候由、又戰爭後ノ説ニハ、当夜中諸方ヨリ十人二十人程宛集り来リ、凡ソ五百人内外ニ及ヒシト寺僧ノ話ニテ候由、

一會津侯ハ守護職ノ事故、兩三年前ヨリ御在京、黒谷ヲ本陣トシ、五日七月長州勢入京ノ形勢ニ依リ、兼テ武田街道・本街道兩方ノ固メニ増勢、当夜多勢出張シ、禁闕ニハ凡五百人余南門へ出張リ、肥後守殿ハ此内ヨ

リ大病ニテ起臥モ心ニマカセス候得共、五日七ツ時分  
俄ニ參

内被致候由、常ニハ公家御門ヨリ下乗ノ事候得共、病  
中ノ故ヲ以テ下乗不相叶形行達

叡聞、非常之訳ヲ以テ公家御門ヨリ御咄喚迄乘輿差許サ  
レ、上殿ノ上モ家臣兩三人ニテ助ケ、御廊下ヨリ御座  
之間迄列レ送り候由、一橋ヲ初五撰家等残ラス參

内ニテ種々御評議ノ最中ニテ、一同病ヲ忍ヒ參  
内セラレシニハ御満悦ナリシ由、然シテ

天拜被仰付、禁中ノ警衛嚴重ニ奉命セラレ、手勢南門前  
御花畑ヘ屯集被命、肥後守殿〔松平春保〕ニモ同所ヘ在陣、同夜ハ

俄ノ事ニテ布屋ニテ陣営ヲ設ケ、其後筈木屋ニテ八百  
人余ノ兵ニテ、戰爭後モ数日滯陣セラレ候由、病氣ハ  
弥増ノ向ニテ、実ニ會津ハ感心ナリトノ評判ニ候、此  
時會津ノ在京兵ハ凡二千八百余人ニ候由、

一右通會津侯乘輿ノマ、參

内ヲ允サレ候ニハ、長州同意ノ宮及ヒ堂上方ハ大ニ沸  
騰シ、御咄喚迄乘許サレタルハ古ヨリ例ナキ事ニテ、  
撰家・將軍タリトモ未タ聞カサル処、是レ全ク議・伝  
兩奏ノ狼狽ニ起リ、且ツ會津力籠ニホコリタルモノナ

リト、或ハ一橋公カ因循臆病ヨリ、會津ノ氣ヲ取ラン  
カ為メ執奏セリト頻ニ唱ヘ立テ、諸所ニ其事ヲ記シテ  
張札ヲ致シ、此罪ヲ鳴ラシ、肥後守ヲ獄門ニ掛ケタル  
繪図ヲモ三條・四條ノ橋詰ニ張り出シ、會津ハ命ノ惜  
シサニ御花畑ヘ逃込タリナトノ悪言モ記シタル由、是  
モ長州荷担ノ浪人等カ所為ト申ス事ニ候、會津ハ弥奮  
発シ、如何ニモシテ長賊一人モ洛中ニ足ヲ止メサセシ  
ト必死ニカヲ尽シ居候由、当夜ヨリ武田街道ニ張り出  
シタル人数ハ炎暑モ厭ワス、三四日ノ間ハ日覆サヘ致  
サス警衛致シ居候、

一山崎街道ヨリ長兵多人數攻入ルトテ、洛中洛外大ニ動  
揺シ、諸大名ヘ御固メ被命、此方〔本〕ヘモ山崎ヘ出張被  
命、會津申談候様閣老稻葉長門守ヨリ留守居吉井中助〔友亮〕  
ヘ達セラレ候処、即座ニ申出ルニハ、当夏大隅〔島津久光〕國ノ御  
暇帰國ノ時分、弊藩ニハ禁闕警衛被命候ニ付、分テ  
嚴重申聞置候趣モ有之候ニ付、外々警衛ハ御断申上ル  
トノ趣申出候由、又次ノ日呼出シニ相成、諸所ノ固メ  
場無勢ニ候間、少々ニテモ淀又ハ山崎ノ間ニ差出候様、  
懇ニ依頼ノ達有之候得共、大隅守帰國ノ後ハ少人数ニ  
テ手分可致程ノ人数無之、禁闕ノ御守衛モ存分ノ人

數無之、併シ 闕下ノ御守衛ハ如何様ニモ心力ヲ尽シ、

大隅守申聞置候通相勤メ可申ト申放シ候由、此方ノ評

議ニ何様ノ事アリテモ、外々ノ固メハ相断リ、 禁闕

ノ警衛ヲノミ専ニスヘシ、元來長賊ノ主目トスル処ハ

天子ヲ奉養ノ外アルマシク、仍テ

禁闕ヲ不奉離ヲ肝要トシ、右通断リ切りタル由、會津

ニハ此方ヲ一向ラニ頼ミニ思ヒ、昨年八月十八日ノ如

ク、薩州ノ助力ナクテハ無心元トテ、幕府へ遮テ願ヒ

出、右様達シニ相成候事ノ由、

一會津ニハ先年來長州ノ狡黠暴慢ヲ憤リ、殊ニ今度ノ次

第旁速ニ征討ノ

勅命ヲ下サレスシテハ、天下ノ折合ハ付間敷旨、肥後守

參 内ノ時モ二様者敬白殿其外一橋公等へ被申立、其前ニモ

朝幕ノ間へ被申立候事數回ニ及ヒ候得共、一橋ヲ始メ

閣老刃因循不斷、遂ニ今日ノ大事ニ及ヒ、又家臣中ニ

ハ每々此方本ノ人ニ、俱ニ討長ノ事速ニ命令アラシコ

トヲ謀ラント懇談ニ及ヒタルモ每々、殊ニ今度加勢ヲ

山崎ニ出シ吳候様、彼ノ隊長ヨリ涙ヲ流シテ内談ニ及

ヒ、列藩ハ悉ク因循、拙モ頼ミトシ難シ、足輕類ノ輩

ニテ実用ニ立候者少ク、因テ此方ノ人数少々ニテモ出

シニ相成候得ハ、諸藩ヨリ百人ハ此方ノ十人ニテ宜シ、

若シ人数出シ難キニ於テハ旗驗ニテモ借入レ度、左レ

ハ諸藩皆鼓舞セラレ可申、會津ニ於テハ及ハサル事ナ

カラ、此方ノ人数少々出シタラハ、八幡・山崎ニ走セ

向ヒ長賊ヲ追討シ、奉安

宸襟度トモ懇談申候得共、此方ニハ一切受付無之ニ依リ

テ、怨ミノ体ニモ有之候由、又尹宮へハ彼方ヨリ附人

鈴木多門ト申モノヨリ相願ヒ、宮ヨリモ御沙汰ニ及ハ

レシカトモ、御断申上、又前田十郎へハ金澤嘉兵衛ト

申人ヨリ厚ク依頼アリシ故、前田ヨリ重役へ申立シカ

トモ、同シク謝絶スヘシトノ事ニ候、誠ニ可愛想ナル

事ニテ候、

一右通此方ヨリ加勢出サレサルハ、イト深キ子細アリト、

其時分諸藩ノ心底モ分り兼、且一橋其外幕役中因循ニ

テ、是迄會津等ノ建言モ取り用ヒス、依テ天下ノ形勢

ヲ謀リ見シカ為メ、殊ニ御帰国前 禁闕ノ御守衛、分

テ御沙汰之趣モ有之テノ訳ナリト承候、

一七月七日ノ夜、尹宮前田へ御内話ニ、長州ハ大隅守國父

一昨年上洛ノ時ヨリ諸事妨ヲナシ、今ニ至リテハ暴

業ヲ以テ天下ヲ乱サントス、殊ニ此回ニハ弥犯動ノ形  
顯レタリ、速ニ征討ノ手順ニ運ハサレハ、一大事ニ立到  
ハ必定ナリ、元來長人ノ主トスル処ハ、將軍職ニ居ワ  
ランノミノ主意ニシテ、外ニ国家ノ事ヲ云フハ全ク底  
心ニナキコトナルヤ明カナリ、然レトモ第一大隅守ヲ  
嫌ヒ、次ニ會津、次ニ我々ニアリ、此度出掛タルハ我  
々ヲ退ケ、

主上ヲ奉揺何レヘカ玉座ヲ遷シ奉リ、遂ニ將軍職ヲ申  
下シ、足利カ例ノ如クノ心入ナリ、因テ速ニ征討ノ令  
ヲ申下スヘクナレトモ、兎角一橋ノ処彼是ト因循セラ  
ル、ハ如何ナル故カト、大ニ疑フ処ナリ、既ニ帥ノ宮  
ハ元來暴党ニ荷担ノ人ニテ、入京ヲ許サント言外セラ  
レタリ、寔ニ危キ形勢ニ成立、微力ノ及フ勢ニアラス、  
大隅守帰国スルトイツモ此様ノ事到来ス、重テ上京シ  
テ、此度逆賊ノ根ヲ絶ツノ処置御委ネニナラサレハ、  
天下ハ治ルマシクト御嘆息アラセラレ候、

一右通一橋ノ因循々々トハ上下皆申立候ニ付、如何ニモ  
其通ト存候処、戦争後一橋公見込之程尹宮其外へ御話  
アリシ趣ニハ、長州ノ目的奸謀等ハ能ク見止メ、或ハ  
手ヲ入レ聞取り、兎角征討ノ大仕事ト決心ハ致シ居候

得共、堂方上臈カノ中ニモ返心半服信シ難キモアリ、公卿方  
ニハ尤モ表裏ノ人多ク、目前ノ勢次第ニテ、東西南北  
定モ更ニナキ人ノミ、頼ミニナルハ一兩人ニ止マリ、  
又手元召仕、或ハ幕役ニモ機密ヲ談スヘキナク、其上  
集リ勢ニテ八百余人、上下ノ中ニ講武江戸の講武所所人数、又ハ水  
戸・一橋家様々ノ談ニ及ヒ、区々ナル評議ニテ是ソト  
云フ論ナク、寔ニ頼ミ少ク、殊ニ有栖川宮・鷹司其外  
堂上辺ハ皆長州荷担ニテ、入京ヲ許サントバカリニ申  
シ居、或ハ入京ハ決テ免シ難シト申スモ近頃ハ少カラ  
ス、夫是深キ事由モアリテ、破ルヘキ機会ヲ待チタル  
コト久シキコトナリ、此上ハ速ニ

勅命ヲ申下シ、一挙ニ処置スヘキ時ニ臨メリトノ御親話  
アリシ由、尹宮ヨリ前田親シク窺候由、

一橋附ノ者ト幕役人ト議論一致セス、大ニ不和ヲ生シ、  
元來一橋家ノ者ハ柔弱ナル者勝ニテ何事も不延、講武  
所付ノ輩ハ御直勤ト誇リ威權ヲ振ヒ、水戸人ハ一橋御  
一身御保護ノミニ參リ居ルト申ス様ナル勢ニテ、寔ニ  
御心配ナル次第ニ有之、御用人平岡圖四郎方中ト申ス人ハ  
正カナル人物ニテ候処、六月初メ御旅館ニテ暗殺セラ  
レ、其後尚更御趣意通り兼ネ、世上ニハ因循ノ様申立



候得共、内実ハ右通ノ仔細モ有之候由、

一平岡四郎カ暗殺サレタル次第ハ、一橋公ノ旅館ハ若州

小濱屋敷ニテ、当分所司代屋敷ト唱へ、一橋公御借入

ニテ旅館ナリ、六月初陽明殿近衛家ヨリノ御使者到来之処、

平岡ハ旅館へ退出後故、早々出頭スヘシトノ事ニテ、

薄暮頃急キ出頭ノ途中、御旅館内へ駕籠ナカラ乗込ム

処ヲ、浪人体ノ者三人抜キ掛ケ刺殺シ、死骸ハ其三人

ニテ駕籠ナカラカツキ出シ、堀川投ケ込ミ立去リ候由、

右三人ノ者ハ則ヨリ敵シク探シ方相成候得共不相分、

後日ノ説ニ、水戸人カ嫉妬ノ説ナリシト、此平岡死後

ハ一橋公ノ処諸事遅緩勝ニナリテ、御痛心一方ナラス

トノ説ニ候、

一橋公ト池田慶徳因州侯トハ骨肉ノ御兄弟間ナカラ、御見込合

ハ不和ナリトノ説モ有之候得共、実ハ其通ニアラス、

因州ハ臣下中都テ長州荷担ニテ、養子ノ御身故押へ付

ラレ候事多ク、夫故長州征討ノ御談合モ十分ニ調兼ネ

候由、御書通モ中途ニテ押へ候モ有之候事モ有之候由、

一信州松代藩士佐久間修理政象山ハ四月初頃出京致シ、藩用又

ハ天下ノ事ニモ周旋シ、旅宿ハ三條旅館ニテ、近頃

一橋公其外閣老辺へモ出頭シ、国事ヲ論シ、其名尤モ

高ク、元来有名ナル上、当時ノ説ニ反シ開國論ヲ主ト

シ、鎖港攘夷ノ論ヲ破リ、本人ノ事ニ、予ハ元来開國

論ニテ、鎖攘ハ長策ニ非スト憚ル処ナク唱へ、剩へ俳

徊スルニモ洋風ノ鞍鐙ヲ用ヒナトシテ、当時鎖攘説ノ

世ニ斯クノ如クナルカ故、一般目ヲ付ケ居候由、七月

十一日毎ノ如ク洋粧ノ乗馬ニテ、三條通川原下ル辺ニ

テ、浪人四五人切掛リ候故、馬ヲ早メ候得共馬ノ足ヲ

伐ラレ、二三丁許ノ処ニテ馬共ニ倒レタル処ヲ、浪人

共追駈来リ殺害シ、首ヲ取り立去リ候由、其翌日三條橋

張札ノ趣ニ、佐久間修理事才器識慮アリテ可惜人物ナ

レトモ、天下人心ニ疑ヲ起サシメ、要路ニ向テ開國論

ヲ唱候ニ付、不得止事天誅ヲ加フル者ナリト記シアリ

シ由、是モ全ク長州人カ水戸人ヲシテ殺サシメタリト

ノ事ニ候、実ニ此人ハ當時天下ノ一人ニテ、惜へキ人

ナリト心アル者ハ嘆息致候、当四月公國交國前出京致

シ、高崎ナト五六ニハ度々面会シ国事モ談シタルニ、

断然開國論ヲ主トシ、開港ハ素ヨリ海外ニ汎ク交リ、

皇威ヲ宇内ニ輝スニアリ、予カ開國論ハ一朝一夕ノ事

ニ非ラス、早ヤ二十余年前ヨリ今日ニ至ル迄少シモ交

セス、国是ハ開國ニ外ナシ、鎖攘ハ千万為シ得へカラ

スト公平ニ嘯シ居候ニ付、高崎ハ其通り唱ラル、ハ御身危カラント申候処、笑テ申スニハ、身ノ保護ヲ以テ説ヲ変スルハ、男子ノコトニアラス、寧ロ殺サル、トモ説ハ変スヘカラスト申シタル由、

一七月中旬頃此方藩本ノ論ニ、天下ノ事今形遲寛因循ニ打

チ過キ候テハ、終ニ救フヘカラスルノ大事ニ立到リ、

皇室ノ御危難ニ及フヘシ、速ニ長州征討ヲ発セラレ可

然トテ、三本木ノ某ノ処ニ土州・久留米・越前等會議ヲ

催サレ候処、熊本ハ存意ノ趣アリトテ、会席ニハ難臨

トテ、前日彼藩周旋方ノ者我屋敷ヘ参リ、(五六、正風)両高崎ヘ面

会申ス趣ニハ、長賊討伐ノ事ハ素ヨリ御同意、既ニ越

中守ニモ其旨建言モ被致候程ノ訳故、討伐決議ニ於テ

ハ少シモ異論無之、越中守建白ノ写ハ藤井氏良迄既ニ

一覽ニ入レ置候、尤大膳父子ノ御処置ハ、官位ヲ被剥

逆賊ノ旨天下ニ御布告相成、領地追放不相成候テハ、

朝幕共ニ御威光難相立ト申出候由、左候テ十六日七月ニ

ハ三本木ヘ、此方ヨリハ小松帯刀・大島吉之助西郷・

吉井中介・海江田武次・奈良原喜左衛門・藤井良節・

高崎兵部阻名等ノ人数会主ニテ、土州・越前・久留米・

柳川等ヨリ數十人出会評議ニ及ヒ、一同異論無之、十

七日ニモ丸山ヘ集會シ、速ニ討伐シ禍根ヲ絶ツニ決定シ、右藩士兩三人列レ立、尹宮・常陸宮・近衛殿・一(冕親王)橋殿及ヒ閣老辺ヘ手分ニテ參殿、速ニ討伐ノ

勅命申下サレン事ヲ勸メ上候処、何レモ薩・土・越其外

大藩ヨリ申立ルヲ御待被成、殊ニ一橋公ニハ此機會コ

ソ待チ兼タリトノ御事ニテ、両宮・近衛家等ヘ御會議、

奏

聞ヲ遂ケ、朝議可被決トノ御返答ニテ、十八日ノ朝

ヨリ

朝議ニ相成リ、奏

聞ヲ遂ラルヘシトノ御事ニテ、一橋公ハ則ヨリ閣老其

他幕役ヲ集メ、軍配御取掛被成候由此時諸方ノ面メハ被重ナレトモ、尚諸方出張手配アリ

シト、一橋公ハ征討ハ御決心ノ事ナレトモ、尹宮トノ御

密議ハ、會津勇壯奮発ストモ諸藩ノ処覺束ナク、因テ

薩州ヨリ必ス何トカ可申立、其時ヲ以テ決議可然トノ

御旨ニテ、右通申立相成候処、只一日ノ間ニ相運ヒ、

十八日、惣參惣參、内トハ、官方及ヒ閣白殿其他重立タル堂上方、又ハ一橋公・閣老等ヲ云フ

内ニ相成リ、奏

聞ヲ遂ラレ候由、

一十八日ニハ朝ヨリ両宮様并有松川宮様・五摂家其外公(後ニ親王)

卿方惣參

内ニ相成リ、一橋公及ヒ閣老モ残ラス參

内朝議御取掛リノ処、有栖川宮并鷹司殿・日野殿其外  
数名ノ公卿方ノ言ニ、是迄長州ノ所為甚タ宜シカラス、

其上此度歎願ニ名ツケテ、軍兵多人数ヲ催シ出張ノ次  
第ハ沙汰ノ限リニ候得共、御追討ニ相成候得ハ、夫ヨ

リシテ天下大乱ノ基ナレハ、御諭シニ相成候得ハ必ス  
曳取可申ト被仰候得共、両宮様  
常陸宮ヲ云フ并近衛殿等ニ

ハ御異論ニテ、是迄数日ノ間及数度御諭相成シモ承服  
不致候ニ付、迎モ承服ハ万々無算東、然ル処ニ尚ホ其

通ニテハ

朝威モ不立、諸藩モ沸騰可致、一長州ノ為メ衆諸藩ノ  
人氣ヲ失フニ至ラン、其時ニハ

朝廷御孤立ニ相成ルヘクナトノ御諭ニテ、有栖川様其  
外暴論ノ公卿方閉口セラレ候由、仍テ一橋公ノ御見込

ヲ以テ尚御諭シノ為メ、大目附永井主水正及ヒ御目附  
等五六名ヲ当日伏見長人屯所へ被遣、今日中無異儀曳

取リ御沙汰可相待、無其儀ニ於テハ、不被為得止御追  
討可相成旨相達候由、

一右通永井其外十八日ノ昼時分、伏見長州陣所へ行キ向

ヒ、福原越後へ相達候処、流石カノ福原モ振ヒ声ニテ

申スニハ、御達シノ趣奉畏候、然シナカラ何分多人数  
ノ事、其上方々行散リ罷在候間、早速ヨリ申シ触レ曳

取候様ニモ可仕候得共、為念日数五六日ノ間御猶予被  
成下度申立候得共、永井ハ延引ノ儀ハ難叶、今日中ハ

初メヨリ

朝議ノ決スル処ナリ、若シ此上延日相成ルニ於テハ、  
再ヒノ御沙汰ナク、兵力ヲ以テ御追立相成、心得違ナ

ク今日中可引取旨反復相達引取候由、

一如此一橋公御見込ヲ以テ御諭相成候得共、(符九)迎モ無事

曳取ルヘシトハ思召サス、依テ御手当向ハ悉ク相備ハ  
リ、禁闕ノ守護ハ幕兵并一橋ノ手勢ヲ以テ御自身ノ

賦、天龍寺・法輪寺等ノ打手ニハ此方本并越前・彦根、  
山崎へハ會津・藤堂・土州其外洛中ノ守衛配賦ノ達有

之、此方ニハ十九日晝ヨリ天龍寺発向ノ手当ニ有之候、  
一右通予メ手配迄モ悉皆相濟、夜五ツ時分両宮様・近衛

家御父子・有栖川宮其外公卿方御退出相成リ、十九日  
ハ未明ヨリ惣參

内アルヘシトノ御議定ナリシ由、依テ前田等モ尹宮ノ  
御供致シ御帰殿後食事ヲナシ、直ニ二本松御屋敷本藩

へ出頭シ、明末明天龍寺発向ノ人々へ暇乞ニ参リ候処、何レノ長屋モ酒宴盛ニテ賑々シク、出軍ノ手当ニ混雜ナルモアリ、皆人ニ暇乞ヲナシ、四ツ半時分宮ノ御屋敷へ走歸リ候処、宮モ明日ノ征討ニ旁御痛心、御寝ニモナラス御座ヲ召サレ候由、然ル処御附會津藩〔次〕モ、我屋敷へ出軍ノ人々へ暇乞ニ参リ候由ニテ、間モナクアワタ、シク走セ歸リ申スニ、只今有栖川宮・鷹司・日野等ノ方々再ヒ御参 内有之タルトノ趣ニ付、先刻当宮御一同御退朝アリシニ、何分疑ワシキ次第ナリト則其段御直ニ申上候処、宮ノ仰セニ、果シテ参内セシナルヘシ、必定明日討伐ノ事ヲ奏 聞シテ破ルノ為ナラン、誠ニ大変ナリ、今日ノ議論ニモ合点ノ行ヌ事ノミアリシカ、案ニ違ハヌ事ナリトノ仰セニテ、直ニ御参 内アルヘシトノ御事ニテ、御供揃被仰出、然シテ尚ホ実否可聞繕ト被仰、諸大夫ヲ以テ近衛家へ被遣候処無程歸リ、弥再ヒ御参

内ニ相違無之、近衛家ヨリモ御知ラセニ御使出参リカ、リ居候、近衛家モ御父子共御参

内アルヘシトノ事ニテ、常陸宮へモ其内御引合相成、九ツ時分俄ニ再ヒ御参 内被遊候、其前刻一橋公へモ

早々参

内被成候様御使者被遣候処、一橋ニモ疾ク其段聞取り、宮方へモ使被差上候跡ニテ、一橋ハ御出掛リノ処ニテ候由、此御方屋敷へハ前田ヨリ知ラセ申上候由〔此時有栖川宮邸中トヲ得ラレズ、同論ノ輩上方ヲ誘ヒ玉ヒ、再ヒ参内セラレントモ云フ、ニハ長入人及居、宮ヨリ朝議ノ次第ヲ覆ヒ大ニ論實シテ、宮モ止ムコ、一右通尹宮御附會津藩士ハ帰邸ノ中途ニテ、有栖川宮再ヒ御参

内ニ行逢ヒ候由、

一橋公ハ尹宮ヨリ為御知ノ使者参候時ハ、疾ク御聞取り、直ニ参

内被成候処ニテ候由、同公ハ参

内ノ御供方モ僅二人・中間二人ニテ御乗り出シ、乗馬ハ醍醐家ノ門前ニ乗捨参

内ニ相成候由、然シテ両宮様尹宮・常陸宮ヲ云フ・近衛家御父子参

内、直ニ有栖川宮・醍醐・日野・中山其外十余人ノ暴論家ト大議論ニ及ハレ候由、有栖川宮等ハ今一応御論シ相成候ハ必ス引き取り可申、其旨我々カ所存奏聞センカ為メ、再ヒ参

内セリトノ御事ナリシカトモ、一橋公等仰ニ、此上御

変換相成候テハ列藩ノ氣嚮ヲ失ヒ、一大事ニ可及、兎角兵ヲ差向ケ、其上恭順ニ於テハ其時ノ所置様可有之トノ御申離シニテ、両宮・近衛家等モ御同論ニテ、有栖川宮其外モ返ス御言詞モ無之、実ニ危キ次第ナリシ由、

一 後日宮前田等ニ御物語ニ、此時若シ一橋カ押切りタル、言ナキ時ハ、暴論ノ堂上中尚ホ勢ヲ得テ天窓ニ上リ、種々ノ奸論ニモワタルヘカリシヲ、一橋カ其時ハ眼差モ平日トカワリ奮発ノ様子言外ニ顯ハレタリト、御話モ有之候、

一 十八日ノ夜再ヒ御参

内ノ方々ハ、有栖川宮・日野殿・醍醐殿・中山殿并十二三人ノ長藩荷担ノ堂上方、夫ニ就テ尹宮・常陸宮・近衛殿御父子・二條関白・一橋公又ハ閼老・大目附等追々参

内、堂上方モ十九日未明迄ニ残ラス参

内有之、同日戦争中ハ素ヨリ、其後ニ至テモ凡十余日ハ御詰メ通シニテ、宮様方ニハ廿四日ヨリ暫時ツ、御掃殿被為在候、御詰切りノ訳ハ

主上御氣細ニ被為在、或ハ動々モスレハ有栖川宮其外

堂上方・長州荷担ノ人々長州助ケノ論ニ変シ候ニ付、尹宮ナト被成御座候得ハ甚シキ事ニ至ラス、仍テ勤メテ御張り合御詰通シノ由、実ニ御一席中ニテ敵味方ニ分レタル形勢ニテ、無仕方都合ニテ候ト、戦争後尹宮御親話ニ候由、

一 十八日宮様方再ヒ参

内有之候ヨリ、

主上ニハ御迦シノ御内定ニ候得共、両宮様・一橋公ナトノ正論連中ヨリ遮テ奉止、夫ヨリ表向ハ御止リニ候得共、御内実ハ有栖川宮ナトヨリ女官又ハ 皇后宮ヘ申上、知恩院ヘ御幸ノ御賦、 准后様ハ下加茂ヘト密々御手当モ有之、御幸ノ御途中奉奪、何方ヘカ奉守護トノ謀合モ有之候由、専ラ有栖川宮・日野・醍醐ノ二三卿長人ト謀リタル事ノ由、戦争始リテハ殊更奉促、其後ニモ夜中窃ニ奉出ラントシタル事モ有之候由、戦争中公家御門前ノ戦最中ニハ弥御迦シト 禁中大ニ動揺致シ、内侍所ハ御迦シノ御手当ニテ、常御所ノ御庭ノ様ニ奉出、其時前田其外松本清記<sup>皇藏</sup>等ハ日之御門内ニ扣居、親シク拜候由、

一 内侍所ヲ奉出候時ハ、女官七八人ニテ奉守御庭之様奉

入、其同時ニ禁中ノ屏ヲ崩シ、其所ヨリ

主上ヲ奉出賦ニテ候由、誠ニ狼狽極リタル事、皆人落涙致候由、

一右通

主上モ御迦シトノ事候ニ付、定テ尹宮様ナトニモ供奉ノ御事ト存シ、心得ノ為可奉伺ト申談シ奉候処、宮様紫宸殿ノ脇廊下迄御出相成リ、御直ニ被仰聞ニハ、如何様ノ事アリテモ決シテ御迦ニハ不相成、其旨安心スヘシ、又禁中ニ火カ、リテモ御危キ事ハ無之、御迦シニハ不相成トノ仰有之候ヨリ、我々ハ安心致シ候得共、一体ノ様子ハ御迦シノ御用意有之向ニ有之候、

一戦初リシヨリ

主上ノ御太刀金作ノ御太刀ヲ尹宮様へ被下、宮ノ御太刀ヲ

主上御取リ被為遊候由、何等ノ御訳ハ不相分候得共、御深意ノ事ナラント申シタル事ニ候、

一戦争後小松氏帶ノ咄シニ、

主上御迦シ相成候ハ、有栖川宮御館内ニ因州勢屯シ居候ニ付、其手ヲ以テ奉奪ノ手筈ニテ、日野家邸ニハ長州勢百余人以前ヨリ密ニ入込居、大小砲・玉菓等イツノ間ニ持入レ候哉、書院庭ニハ二三百目位ノ野戦砲一

門備有之候由、右通

主上ハ因州勢ニテ奉奪、日野家ニ屯集ノ長勢会合シ守護奉リ、一ト先ツ知恩院へ玉座ヲ居へ奉リ、其時備前勢其外諸藩兼テ長州へ通謀多ク有之、其人數知恩院へ走付キ、臨機宇治又ハ奈良良辺へ

御幸ナシ奉ルトノ計策ニテ候由、

一十八日ノ夜有栖川宮其外公卿方再ヒ参

内ノ時、

御幸奉促賦ナリシカ、一橋又ハ兩宮様尹宮・常陸宮直チニ御参内ニ相成リ、奏

聞ノ隙ナク、其故御諭シノ發論ノミニテ止ミ候、誠ニ危キ事ナリシ由、此時ハ一橋公兼テニ似サル御勇断ナリシ由、

一醍醐殿屋敷内へハ以前ヨリ長州人入込ミ、日野家へハ長州・因州人、有栖川宮ニハ因州勢入込ミ、殊ニ日野家ニハ、十七日ノ夜ヨリ國司信濃其外數十人潜伏致シ、軍器モ多ク運ヒ居候由、十八日ノ夜一橋公再ヒ参

内ノ時ハ家来二人・別当二人ニテ乘リ切り、中立賣御門ニテハ自身ニ名乘リ御乗通り被成候由、ケ様少人数ニテ御乗切り被成候ハ、常ニ長人其外浪人共懇ヒ居候

故、此時ハ誠ニ危シト御見切り、或ハ一刻モ早く参  
内不被成候テハ

主上御動揺モ難計トテ、御微行被成候由、後日小松家  
へ御直話被成候ト小松家直話ニテ候、

一十八日夜一橋公俄ニ参

内ノ時ヨリ御決心ニテ、長賊ヲ亡スハ此時ナリト、戦  
争ノ手当ハ前以テヨリ調居候ニ付、手勢ハ追々ニ走セ  
続キ、小銃隊凡千人程、殺手隊二百余人ニテ、初ハ御  
供方ノミ禁中ニ入り、外ハ南門前ニ備へ、又ハ境町通  
御所ノ屏付ニ備へ、御自身ハ野服ニ召替ラレ、馬上ニ  
テ御警衛被成、四ツ時ニハ御手廻リ三四十人許ニテ、  
御所内ヲ御行廻リ御指揮被成候、

一十九日朝ヨリ

主上ハ紫宸殿ニ出御、官方関白殿・近衛家其外堂上方  
多人数伺公、皆官服ニ襷ヲ掛ケラレ、坊主ノ衣ニ襷カ  
ケ候様ニ相見得候、此時一橋公ヲ 玉座近ク召サセラ  
レ、御直ニ伺トカ

勅語ヲ被下、其時一橋公涙ヲ流サレ御下リ相成候由、  
勅語ノ趣ハ不相分候、其時小松家ハ一橋公ニ付キ添ヒ、  
紫宸殿ノ階下ニ扣居ラレ候由、此時分ハ公家御門前ノ

軍最<sup>〔中脱カ〕</sup>ニテ、前田ナト親シク紫宸殿脇ニ扣居候テ、右ノ  
次第ハ見候由、

一内侍所出シ奉ル時モ前田ナト親シク奉拝候、箱ノ様ナ  
ル輩ニテ、誠ニ美ヲ尽シ候者ニ相見得、女官二人ニテ  
奉守常御所御庭へ奉出候由、其時女官ニ附従候モ七八  
人ト相見得候由、

一備後様<sup>公子忠</sup>ニハ日ノ御門内ニ御備被成候、色粧ノ鎧ニ  
テ、兜ハ家来<sup>爲</sup>為御持セ、征矢ヲ負ヒ弓ヲ手挟ミ、将  
床ニ召サレ、天<sup>〔忠〕</sup>真レ勇々シキ御容子ナリ、兵士百五十  
人許左右ヨリ後ニ扣へ居、何レモ勇威ニ相見得候、小  
松氏ハ五十人許リニテ公家御門内ニ備ラレ、是羽服則  
黒ノ紋付羽織ニ立揚袴・陣笠ニテ候、圖書<sup>公子久</sup>公子ニ  
ハ乾御門ヲ百二十人許ニテ警衛被成候、

一三條實美其外昨年脱走ノ旧ト公卿方ハ、長州ヨリ同勢  
ト俱ニ、初ヨリ天龍寺へ被出張候トノ説有之候、果シ  
テ其通ナルヘシト申ス事ニ御座候、旧宅へハ得帰ラレ  
ストモ又ハ帰ラレ候トモ、取々ノ評判モ有之候、十四  
五日頃ノ事ニ、相國寺末寺林光院ノ住持毎年暑中見舞  
ニ参リ、天龍寺ノ和尚カ咄シニ、長兵多日入込居迷惑  
ノ至、依テ奥ノ小座敷ニカ、マリ苦ミ居、客殿・持仏

堂其外一間ノ明キモナク兵士入り込、其中ニ持仏堂上段ノ間ニ女見ル様ナル人二人、其次下段ノ間ニ八人、此八人ハ女ノ様ナル人ニ無之、惣髪ニテ候由、如何ナル人カト存居候、又兵士上下凡三百人余リ、又農人ノ如キ兵四百人許リ、彼是上下八百人位モ可有之、法輪寺又近辺ノ寺々ヘ分リ宿宮致居、此女ノ様ナル人々ハ京都ノ人ニ相違無之、又兵士ノ中毎夜三十人計リツ、遊ニ出ルト申シ、夜入過ヨリ出夜ノ明ケ方ニ歸リ来候、初メ長兵入込候時分、頭立候者ヨリ住持ヘ向テ申スニハ、少シモ迷惑ハ不為致候間、暫時借用致度旨ニ候間、住持答ヘニ、兎角其筋ヨリ御達無之候テハ御答ニ及兼候ト申入候処、其時ハ早ヤ本堂・客殿等庭前マテ三四百人ノ兵士押入り、殊ニ槍・刀・鉄砲ナト携其俣ニ住居込ニ相成、無致方其形リ此小座敷ニカ、マリ居候折節、頭立候者ト相見得、住持カ所ニ来リ四方山ノ咄モ致シ、此様我々カ事少シモ心配致スマシク、兵士共若暴乱ケマシキ事ヲナサハ直ニ我々ヘ可申聞、屹ト軍法ニ行ヒ可申ト、其辺ノ挨拶ハ絶ヘス申聞ケ、又ハ我々此通御厄害ニナリ居トテ、必ス心配致ス間敷、若シヤ會津・薩ノ方ヨリ変事仕掛ル時ハ、御寺ノ宝物・仏像・

家財ハ速ニ格護可致、我々モ加勢シテ片時可申ナト、懇ニ申聞ケ、少シモ乱暴ハ不致候故差テ心配ハ無之、又時ニハ山崎ヨリ荷物ヲ過分ニ運ヒ来リ、米ハ殊更過分ニ持込来リ、不如意ノ体ニハ全ク不相見得候ト申シタル由、林光院ヨリハ毎年暑中見舞ニハ使僧遣ス事ナカラ、今年ハ右様長州人入込ノ由ナレハ、珍ラシキ事故、直ニ見舞致シ候ト前田ナトヘ坊主直話致シ候由、林光院ハ此方ニハ縁アル寺ニテ、右通咄モ致候、右女見タ様ナル人々ハ三條殿ニハアラサルカト、坊主モ申シ候由三條殿ナラント講フ、ハ處説ナリシト云フ、

一長州人天龍寺ヘ入込、又ハ嵯峨辺ノ民家ヘモ余多宿リ居、其者共ハ加州・因州・土州ト表札ヲ打候由、右ハ三藩脱走人モ可有之候得共、多クハ長州人如此打チ候由、六月ノ初頃ヨリ嵯峨・嵐山ノ辺ニ長州人多ク出張居、遊參ニ行候人ノ中ニ、士ト見受候得ハ直ニ差咎メ、又ハ必ス行クナト押止候由、七月初頃此方此方トノ宮内ハ本藩彦二聞合セノ為メ被遣、馬ヨリ嵯峨ヘ參候節、太秦ニテ長人四五人出来リ、薩州様ト見受ケ候、嵯峨辺ニハ同藩壯年ノ者多人数參居候ニ付、万一失礼致スモ難計候間、必ス御出被成ルナト遮テ申ス故、其俣引取り、



右始末届出候処、上向上向ハ重キノ人々ハ能コソ押テ不  
參シト被申候由、然レトモ兵士中ハ長州ノ奸謀ニ是迄  
忿リ居候故、臆病ノ至ト沸騰致シ候、如此長人ハ會・  
薩人ヲ惡ムコト甚シク、殊更薩人ヲ惡ムコト會人ヨリ  
上ニアリ、是レ彼カ奸謀惡計ヲ押ヘ事ナラサリシ事度  
々有之故ニ候由、

一 彦根藩モ此方ヲ惡ムコト甚シク、其起リハ上巳騒動以上トハ外松田ノ事件ヲ云フ以來ノ事ニテ、一藩臆病ノ様唱へ、殊ニ佐  
幕ノミニテ、尊王ノ人ナシト不評判ニテ、頭ヲ明カル  
キ所ニ出シ得スト申ス程ノ事候処、昨年春ノ頃ヨリ長  
人共種々周旋致シ、京都へ曳キ出シ、御固場等ヲ取持、  
夫ヨリ同論ノ人モ出来、去年八月十八日堺町御門ノ一  
挙ニモ長州へ荷担致シ、此度モ同様ニテ候、然レトモ  
元来柔弱ノ藩風ニテニノ足ヲ踏ミ、公家御門前ノ戦ニ  
モ、赤旗ヲ立ナカラ逃ケ行ク有様ハ見苦シキ体ニテ候、  
一十九日昼時分、此方ノ人数乾御門前ヨリ陽明殿近衛家前  
辺ニテ勝軍ノ鯨声ヲ揚ケ、首実驗ノ式執行ハレ候処、  
主上ハ紫宸殿ニ出御ノ折ニテ鯨声ヲ被為  
聞、又モ賊兵力寄セ来レリト御驚キ、公卿方モ仰天被  
成候由、一橋公ヨリ否ナ薩州勢カ勝吐気ヲ揚ケ、首実

見ノ式ヲ行ヒ候ナリト言上被成候処、恐多クモ  
玉顔直リ、御側ニアル公卿方モ笑顔ニ被成候由、夫レ  
ヨリ  
御安慮、無程常御殿へ被為入、朝ノ供御モ被召上候由、  
如此當日ハ、朝ノ供御モ昼八ツ過頃ニ被為召上候次第  
ニテ候由、

一 有栖川宮ノ御屋敷へハ、警衛ノ為メ初メヨリ因州勢百  
余人相詰居、十九日戦争後廿日ニ相成リ宮ハ御參  
内ヲ被止候ニ付、因州勢モ長州荷担故、人数早々曳キ  
取り候様所司代ヨリ相達シ候処、種々苦情申立引取候  
向ニ無之、已ニ変事ニ可及勢ニ候処、段々申論シ引取  
ラセ、然シテ寺町御門并院參町ノ固メ被命候由、其時  
ハ又候戦争ト可相成ト皆々決心致候、  
一 因州へ右通寺町御門等ノ固被命候処、細川家ハ昨年来  
今迄同所ノ固メニテ素ヨリ中惡シク、細川ノ人四五人  
モ列レ立院參町辺通行致セハ、因州人ハ兵士ノ列ヲ立、  
或ハ筒先ヲ向ケナト致シ候由、是モ因州ハ長州荷担ニ  
テ世上ノ評判ヲ失ヒ候故、各藩ヲ皆敵ノ様ニ思ヒ居、  
如此ノ次第ナリトノ咄ニ候、  
一 有栖川宮ノ御屋敷へハ、因州勢ニ長州人モ交リ居ルト

ノ説ニテ、廿日ニ因州勢曳取ノ苦情申立候ニ付、放火討伐ノ御手当ニ候処、何分九門内其上禁闕ニ近ク、放火ハ相止メ討伐ニ決シ候由、此追伐ニハ所司代人数先鋒ニテ、諸藩ハ応援ノ賦ニテ候、

一 岡山藩モ初メヨリ長州荷担ニテ候得共、戦争後ハ閉口致シ方向違ヲ致セリ、或ハ長人ノ甘口ニノセラレ、残念ナリト悔悟致居候、

一 加州藩ハ十九日長州ノ川原町屋敷放火ノ命ヲ奉シ、出張致シ居候処、元來長州人ニ欺カレ、是迄仕役セラレタル事多ク、此日モ出張シタルノミニテ、放火ニ手ヲ付ルコト為シ得ス猶予罷在候処、長人共自ラ火ヲ掛ケ立退キ候由、長人ハ凡三拾人許ニテ其俣三本木ノアル茶屋ニ至リ、酒ヲ呑ミ支度<sup>支度ハ食事ヲ云フ</sup>モ致シ、鷹司殿屋敷ノ様出張致候由、屋敷燃上リ候ハ朝六ツ半時分ニテ、前以ヨリ其用意モ致居候ト相見得、土蔵ニハ差シタル品モ無之、膳・椀具ノ類其外雑物ノミ有之候由、

一 長州ハ一年前頃ヨリ松平ノ称号ハ廢シ、國中ニテハ毛利ノ旧号ヲ用ヒ候由、是モ全ク徳川家ニ叛キタル訳ヨリノ事候由、今度ノ戦争後、直ニ大膳大夫父子ノ官位又ハ称号ヲ被召剝旨、幕府ヨリ達シ相成リ、毛利大膳ト

諸書附ニモ被記候、

一 鷹司殿ハ長州荷担ニテ、屋敷内ニハ長州人潜居致シ居候ニ付、参

内御差止メ相成リ候処、二條川東ノ別荘へ謹慎居住ナサレ、諸藩へ守衛被召付、出入ノ者モ嚴重ニ改メ候由、其外長州荷担ノ公卿方残ラス謹慎被命、諸藩兵守衛付ニ相成リ、此方ヨリハ平松家ノ取締被仰付、昼夜二十人ツ、交代ニテ差越事ニ候、

一 有栖川宮ハ御父子共ニ禁固被命、是ニモ會津兵守護取締付ニテ、五六十人ツ、交代ニテ詰居候由、老公ハ五十近ク、御子ハ二十五六ニ被成候由、御父子共ニ御悔悟ノ御様子ハ全ク無之、泰然トシ被成御座、何カ後日ノ御考アルヘシト申ス事候由、

一 此度ノ戦争前ニハ長州ノ評判宜シク、百姓町人ニ至ル迄望ヲカケ、會津ハ邪論ト巷説モ有之、夫故長人ハ窃ニ九門内ナトニ勝手ニ入込ミ、誰モ差咎メ候者モ無之候処、會津人ハ弥嚴重ニ取締リ候由、右通ノ事ニテ日野殿・醍醐殿等ノ屋敷へハ勝手ニ入込ミ、武器・玉薬ノ類モイツノ間ニ運ヒ込候哉過分ニ儲有之、戦争後皆人驚キ候由、鷹司殿屋敷へモ兵糧・玉薬・大小砲モ

多ク畜有之、其内玉葉ハ少キ方ニテ候由、家屋ニ放火ノ時モ燃發候致由、

一時ノ勢ト申スハ無致方モノニテ、恐多クモ

朝廷ニハ長州ハ暴論ト被仰出候得共、何レカ正邪ノ弁別不被為 在、夫故追討モ速ニ不相發候由、戦争後モ有栖川宮ナトハ動々モスレハ長州助ケノ方ニ御傾キ、或ハ戦争中

主上御迦シノ御企有之候ヲ、全ク一橋公ノ御力ヲ以テ奉止、其後ニ至テモ會・薩・越・土ノ処讒奏甚シキ次第モ有之、長人ノ奸計ハ可恐次第ニテ、女官ヘ兼ネテ甘ヲ与ヘ候事ナトノ故ト申ス事ニ候、

一 加州ハ元来柔弱ノ士風ニテ長州人ニ欺カレ、無上忠誠ト唱ヘ、十八日諸方ノ手配達シ有之、川原町長州屋敷ノ取締ヲ承知シ、人数百人程差出シ、君候ハ御暇モ不願、戦争中僅ノ供廻リニテ窃ニ出立、国元差シテ下向セラレ候由、臆病ノ次第ト一統糞ノ如ク評判致候、殊ニ七月七八日頃ノ由、伏見長州屋敷ヘ被參、今度ノ嘆願ハ逆モ御採用無覚束候ニ付、一ト先帰国可然ト被申、其時魚類・大根ナト被贈タル事有之、米モ千石許リ被贈候由、ケ様ニ帰国ヲ被促モ一己ノ見込ニテ、畢竟臆

病ヨリ起リタル事ナリト、京中ノ物笑ニテ候、

一 長人ノ中ニモ適々出掛タル事ナカラ、歎願ハ逆モ御採用無之、夫ノミナラス何事モ未タ時至ラス候間、一ト先ツ曳キ取り、後日再ヒ事ヲ謀ラントノ連中アリテ、天龍寺・山崎ニテ議論区々ナリシカトモ、浮浪輩中々不聞入、此時成否ニ拘ハラス發動セサレハ再ヒ時アルヘカラス、却テ制セラレ動クニ術ナキニ至ラント、大論ニ相成リ、不得止事暴發ニ決シ候由、又六月七日ニ長州山口ニテモ時勢見計ヒ一旦和順シ、其上一挙ニ事ヲナサント評議モ有之候処、浪人等并暴論家承服不致、殊ニ用人名某ト申ス両三人ハ、此時發拳セサレハ瓦解シ、遂ニ二国ヲ失フニ至ラントノ論ヲ達、又其異論ノ者兩人アリテ鎮靜論ヲ發シ、大争論トナリ、其日ハ決議ニ至ラス退散セシニ、帰路鎮靜論ヲ唱ヘタル者ハ途中ニ於テ暗殺セラレ、以来因循論ヲ唱フル者ハ悉ク如斯ト張札ヲ出シ候ヨリ、再ヒ無事論ヲ立ル者ナク、遂ニ暴發ニ決シ候由、

三六九ノ一

別紙ニ連続シテ書ク

桂幸幸ハ小五郎ハ才略アル者ニテ、初ヨリ殊ニ周旋致シ、

過半ハ此者ノ策ニ出タル事多く、然ルニ昨年堺町御門ノ一条ヨリ、今形ニテハ事ノ成就千万無覺束、其上勅勤ヲ蒙リ居候テハ、天下ノ有志ヲ集メ候事モ難相成候間、一ト先ツ恭順ノ策ヲ用ヒ、名義ヲ正フシ、事ヲ公平ニ謀ラントノ議論ヲ建テ、第一大膳大夫父子ノ勅勤ヲ允サレ、上洛ノ道ヲ開キ、天下ノ人心ヲ取り鎖攘ノ説ヲモ程克クシテ後、宿旨宿旨トハ何等カ分明ナラズト雖、スルニ、大權スルニ、大權ヲ一ト時ニ達セン、殊ニ討幕ノ説ハ尤モ一大秘策ニシテ、敢テ色タニ出サ、ルヲ專要トセント發論致候処、同落入江九一・（弘毅）木ノ島又兵衛等ノ輩中々承服セス、或ハ浮浪真木和泉等ノ暴徒激怒甚シク、因循遲寛ノ論ヲ立ル者ハ悉ク誅伐スヘシ、然ラサレハ有志者ノ氣嚮ヲ失フニ至ルヘシトノ勢ニテ、桂モ殆ト危ニ迫リ候故其論ヲ變シ、再ヒ京・攝間突出ニ左袒シ、種々尽力致シ候由、如此昨年八月以來ハ国家ノ安危ヲ憂ヒタル者ハ因循俗論ト唱候由、其輩ハ暴論家ノ為メニ暗殺セラレ、妻子道頭ニ漂泊スルモノアリテ、不得止事暴徒ノ中間ニ這入候者多く有之候由、

一 此度モ桂ハ京師ニアリテ、（二）山崎又ハ天龍寺等ノリ初終事ヲ謀リ、迪モ成功無覺束、一ト先ツ穩ニ曳キ取り、

重テ良策ヲ用ント一夜入江・木島等ノ輩ト大論ニ及ヒシニ、木島等ハ中々承服セス、茲ニ迫リテ臆病未練ノ因循説ヲ立ル人ハ、見込次第ニナサルヘシ、我々カ為ス処ヲ御覽ナサルヘシ、事ナリシ後ニハ必ス論スル旨アルヘシト謂テ、承服ノ体ナキニ依リ、桂ハ黙シテ止ミタリト、木島等ハ其前夜ヨリ鷹司家ノ屋敷ニ在リテ、諸方ノ長勢九門内ニ押入候上、直チニ禁闕ニ入り、主上ヲ奉奪ルニ預リ潜居致候処、見込通りニ無之候間、同列ノモノハ皆裏門ヨリ逃出タルニ、九坂・木島・入江等ノ輩ハ殿中ニ火ノカ、リシヨリ、腹搔切テ火中ニ飛入り死候由、此時桂ハ前夜ヨリ川原町藩邸ヘ引取り、戰場ニハ姿モ不見得、イツレヘカ遁レ一説ニ桂ハ二本木ノ遊桂カ妾ナル者ノ履歷候由、候由、右之趣ハ戦争後鷹司殿ノ御嫡子ヘ（親施）見レハ符合セリ、（親施）益田右衛門介モ鷹司殿ノ屋敷ニ前日ヨリアリシカ、討手ノ人数押寄、火ノ手カ、リシ時裏口ヨリ落失セ候由、

一 公家御門前戦争ノ時、禁内ヘモ大小砲ノ玉多く飛ヒ来リ、殊ニ紫宸殿ノ屋根ニハ多分ノ玉来リ、此時主上ハ紫宸殿ニ出御中ナリシカトモ、早々常御殿ノ様被為入候由、誠ニ御危キ御事ニ候由、

一此方ノ宮内彦次ハ十九日ノ曉、物見ノ為メ馬上ニテ出水通りヲ下リニ見廻候処、長州勢ハ早ヤ其時出水通辺へ押寄居ニ、鉄砲ニテ打チ落サレ、首ヲモ取り、近辺ノ店棚ノ上ニ上ケ有之候ヲ、後ニ此方ノ手ニ取り候由、宮内ハ甲冑ヲ着シ居、馬ハ其所ニ繫キ有之、其時懷中ノ名札ヲ見テ、薩州人ナル事ヲ知りタリト申シ合ヒ候ヲ、其辺町家ノ者聞居候由、初メ會津人ト見テ打チタル者ト被存、懷中ハ翌日天龍寺へ持越シ打捨テアルヲ、此方ノ手ニ拾ヒ取候由、

三七〇 道島正亮家記抄 (或ル大夫ノ話)

三七〇ノ一

或大夫ノ嘶ノ由、先達テ長州ヨリ使者三人差越候テ、其御方蒸氣舟御廻船ノ節ハ、船印壹ツニテハトウモ見分ケカタク候間、二ツ三ツモ御差出、其上相図杯モシカリト不被相定候テハ、本マ、(參上)イタシ候テハ別テ御氣ノ毒成儀ニ付、本マ、(近)方ヲ可被成旨申来候ヨシ、不入挨拶杯イタシ、海ノ上ノ事ニ付何方ヲ乗候トモ、長州カカモフ事ニテハ無之ト自俣ニシ申候ハ、是ハ長州本也ナト申越候、実ニ其通リト申候ヘハ、成程異国船ニ似寄候テ、長州モ見分カタク可有之ト申候付、似寄トハ如何、

実ニ異舟ニテ無之ヤ、船中乗組ノ者モ鉄砲袖コハシ掛ニテ候、遠方ヨリハ実ニ異船ナラン、夫ヲ似寄候ハ大間違也ト申候ヘハ、其ハ開口(開カ)、七月十九日ノ事也、

三七〇ノ二

姦吏共へ

我薩国ノ姦吏共我党ヲ引、自カラ誠忠ト号シテ猥ニ尊王攘夷ノ名ヲカリ、恐多モ奉欺

天朝君上ヲ、譎謀詐計ヲ以国体ヲ汚辱シ、人民ヲ苦シメ、剩御先代様以来無ニ勤王ノ御名ヲ本ノマ、(舊候処)、実以天地ニ

不容ノ罪人、三州ノ義士憂憤切齒、汝党ノ肉ヲ喰ハント欲スル事久シ、自今已後其因循姑息ノ懦風ヲ不改ハ、我

党先公在天ノ尊靈ニ告テ其罪ヲ報シ、直シクセント欲ス、心姓智ヲ存スル者速ニ其非ヲ悔ヒ、報国ノ志ヲ記セスンハ、汝党首足其処ヲ異トセン事不日ニアラン、